ネギ勘！

豪気

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ネギ勘！

【Ｎコード】
Ｎ９８１５Ｋ

【作者名】
豪気

【あらすじ】
有り得ないなんて事は有り得ない。
絶対なんて絶対無い。
偶然が偶然ある訳がない。

とある青年は口下手恥ずかしがり屋で人相悪いが、平凡に暮らしていた……筈だった。

ある日必然的に知り合った妖精さんと共に麻帆良の裏を知り、今日

も今日とて走り勘違いをされていく。

これは、そんな青年の幸せで不運なお話――――。

第一話　【宵闇の吸血鬼編】

有り得ないなんて事は有り得ない。絶対なんて絶対無い。偶然が偶然ある訳がない。

結局のところ、それら全てを運命だとすれば正しく俺のこの状況も運命だと言えるだろう。

だが、それら全てを受け入れられる事が出来るか、と訊かれたら俺は首を縦に振る事はない。

ない、のだが気付いた時には既に遅く。俺は今ある平和な暮らしを自ら投げ捨てて方向転換不可能な道へ進んでいた――――。

ネギ勘！　第一話

それは、正しく眼の錯覚だと疑ってもいい部類に入るだろう。基本無神論者を気取っている俺であるが今なら神に祈り縋ってもいい。

人間の何十倍もある巨体、空を包んでしまいそうな程の両翼、岩の様に硬くに何物の受け付けない鱗と身体、猛禽類を想像させる縦に沿った瞳はこちらを視界の外に外す事はなく、大口から垂れる涎は子供一人分くらいなら余裕で溺れる程の量があった.

己の性格のせいか、あまり口を開けないが今は馬鹿みたいに舌を出している。

「……上、等」

口から洩れ出た言葉は若干の震えも混じっており空気に溶けていく。

何故こんな事になったのか。どうしてこんな、“図書館島深部”に俺が居て、現実では有り得ない“竜（ドラゴン）”が居るのか。

確信はしていないが、おそらく俺が予想出来るにロボット工学研究会辺りが開発した最新の竜型ロボットなのだろうが……これはやりすぎだ。

今年の学祭に出すのであれば客寄せには丁度良いかもしれないが。間違いなく人々の注目はコレに来るな、うん。

「さすがヒビキさん！　竜という魔法生物を恐れず失笑とは。天晴れです！　さあ、ヒビキさん。あんな竜はあなたなら余裕綽々です！　今こそあの竜に力を見せ付けてやりましょう！」

胸ポケットから顔を出す自称“小さな神木の妖精さん”は片腕を元気良く上げながら俺とあの竜型ロボットを戦わせようとしている。

失笑と勘違いされている分、やはり俺の口下手レベルは最高潮。

マックスなのだろう。少し、落ち込む。
首を上げなければ到底顔を拝めないそな竜型ロボットは喉を鳴らしながら俺と妖精さんを一瞥している
俺としては無害に扱って欲しい。どうやら敵か味方か認識出来るセンサーがまだ完成されていないのかそれとも機能していないのか今すぐにでも襲い掛かって来そうな雰囲気である。

ただ図書館島で時間を潰そうかなー、と軽い気持ちで外に出たのに妖精さんに連れられるままに図書館島のトラップを抜け先へと進んでいってしまった。

思えば、途中から何かおかしいと感付いていたのに何故そのまま放置してしまったのだろうか。
生憎と腕時計もしておらず時間も確認出来ない。
軽目の服装で持ってきたのは財布だけ。本当によくここまでこれたな、と自分でも思う。

俺、妖精さん、竜型ロボットが居る場所は図書館探検部でも訪れた事がない秘境中の秘境に間違いない。何故ならこんな竜型ロボット、見付かれば即座に麻帆良の新聞に載る筈だし何よりロボット工学研究会が隠す意味がなくなってしまう。
つまり、この竜型ロボットの外部での第一発見者が俺だという事だ。

「ハハッ……さて、どうするか」

息を吐き前へ見遣る。何の装備も無い、まるで初期のＲＰＧの主人公の如く。
歯がカチカチと自然と震えるが口を真一文字に閉じて抑え、両脚も微振動。
このロボットが余りにもリアル過ぎる……まるで本物みたいだ。

「――ガアアアアアアアァァァァァァアアアアア！！！」

「――ッ！」

「来ます！　構えて下さい！」

俺が竜型ロボットの咆哮に反応したのを見て妖精さんが咆哮に負けじと叫ぶ。
歯が笑っているせいで喋れない俺は、どうすればこの場から逃げる事が出来るのか妖精さんへと視線を送る。
短い付き合いだが以前から向こうが相棒宣言しているのでアイコンタクトは可能な筈だ。

「……分かってます。わたしの援護なんて必要ない、って事なんですね。了解です。ヒビキさんに牙を向ける下等な竜何ぞ、俺一人で十分って事なんですね。ヒビキさんの恐ろしさを知らないなんて……一方的な戦いになる事が予想出来ますね」

――あれ、何か違うんじゃない？　と返したいがそんな猶予は

専ら無く。暴風にも似た風を起こす羽ばたきで地から脚を放し、竜型ロボットは大口を開ける。
その口の中が赤い光が灯っている事に、俺は気付くのに二秒掛かった。

まるで、その肉を貪る事に特化した大小の牙が羅列している口からお決まりに炎を吐き出すかの様に。そう、冷静に考えれば分かる事だったんだ。

「……関係ない」

リアル過ぎる炎。熱気が肌を刺しこちらへと向かってくる。
いつの間にか脚は自由に動き歯も鳴りを潜めている。
確かに当たれば一瞬で丸焦げ、あの世行き間違いなしの炎の息吹き。“本物”なら確かに昇天だろう。本物ならば。

恐らくこれはホログラム。熱気も口の中にある何かの装置から出ているのであろう。
主観的にも客観的に見ても本物と瓜二つに造り、良く出来たモノだとロボ研（長いから略す）に賛辞を送りたい。
関係ない、そう呟いたのは当たっても無傷、という意味で言ったものだ。
一度、擬似的でも炎に焼かれるという行為をしてみたいと思うがやはり俺の脳は怖いらしい。必死に逃げろと信号を送っている。

勿論俺は即刻同意。竜型ロボットに背を向け、出入口へと全力疾走。
何やら後ろから爆発音が聞こえるが気にしている場合ではない。いくら炎がホログラムでもロボット自体が俺へと突っ込んできたら意味がないのだ。

駆ける、駆ける、駆ける。ただ前だけを向いて。今から寮へ帰るとなるとどれ程時間が掛かるのか想像するだけで鬱になりそうだが、そんな思いを振り切り逃げに徹する。

さらば、竜型ロボットよ。また学祭にでも会おうではないか。
お前がどんな催しに使われるのか楽しみだぞ。

「ヒ、ヒビキさん！？　どうして逃げるんですか！？　ヒビキさんならあんな竜一匹や二匹……」

何やら勘違いしている妖精さん。
俺は胸ポケットを撫でながら口を開き妖精さんに告げる。

「……次、会う時が楽しみ」

「え……？」

「……あいつは、まだ自分を出せないでいる。それまで、戦わない……」

――――そう。この竜型ロボットの出来から考えるに、アトラクション用に使われるのだろう。それまで奴との勝負はお預けだ。
俺の拙い言葉を受け取り妖精さんは涙を浮かべていた。

「す、すみません です。ヒビキさんの心情を知らずに一人突っ走ってしまって……。こんなんじゃ相棒失格です。そうです、そうですよね。あの竜が全盛期の力を得るまで待つ、という事ですね。了解しました！　このわたし、ヒビキさんをもっと知るために精進します！」

「……分かれば、良い」

勢いつけて走っているため風を切る音と呼吸音で妖精さんが何言っているのか若干分からなかったがおおよそ伝わっただろう。
ここで分からない、何て言うのは無粋の極み。

「……さあ、帰るぞ」

「了解です！」

元気の良い声を耳にしながら俺は図書館島を後にする。
もちろん竜型ロボットは追い掛けてきたが、何時からか追い掛けてこなくなった。
あの巨体だから仕方がないとは思うが……外へ出す時はどうする

のだろうか。

些細な疑問が浮かぶも腹の虫が鳴いた事により、綺麗に思考の隅へと流れて行った。

思えばこの時からだったかもしれない。俺が変な団体へと脚を突っ込む事になったのは。

そうとも知れずに竜型ロボットとの（学祭での）再会を待ち遠しく、思いを馳せる俺と妖精さんだった。

第二話　聖

何時までも無知な自分が居た。何時までも無知過ぎた自分が居た。何時までも無知で居た自分が居た。

けれどもそれは悪い事じゃないと、思う。無知で居たなら、手を伸ばし助けてあげる。そうやって人って言うのは助け合っていくものだから。

だから、きっと。俺が助けたのは無駄ではない筈――――え？　無知？　何の事？

ネギ勘！　聖

竜型ロボットとの一件以来、実は俺、とても大変な事をしってしまったんではないのかなー、と内心ビクビクしていたがここ数日経って何の音沙汰も無いので、肩の荷が降りた様な気分である。

誰にも見付かりたくなかったからあそこにロボット何ぞ置いたのだろう。それをただの学生の身分である俺が見付けてしまったのだから、さあ大変。隠しカメラなんて設置されていたらもしかして俺、逮捕されていたかも……。

「――ッ」

「どうしたですか？　ヒビキさん」

「……いや」

俺の表情の曇りを見てしまったせいか、妖精さんが不安な表情を浮かべている。

何でもないよ、と言った視線を送りながら俺は麻帆良でも有名処である世界樹前の広場で、日課である素振りを続けるのであった。

思えば、『妖精さん』。と言うのは間違いでちゃんとこの娘にも列記とした名前がある。ただ俺が名前を言わないのは、妖精さんに迷惑ではないのかな、と言う申し訳無さと俺の無知さ故があるからだ。

さて、ここで話すとしようか。俺と妖精さんとの馴れ初めを。

俺と妖精さんが出会ったのはまだ日も浅い二週間ぐらい前の事。相部屋だった友人が親の都合により、急遽外国に行ってしまい元々三人用の部屋が一人部屋となってしまったため、掃除も兼ねて模様替えをしていた。

転校前はそれなりに仲良くしてくれた友人が居なくなってしまい、そして相部屋だったにも関わらず転校してしまった当日に気付いた俺の無知さに気分は降下しながらも、部屋を自分色に塗っていく。

どのくらい時間が経っただろうか。腹の虫が鳴いていたから昼近くになっていたと思う。最後に残っていた両親からの仕送りの段ボールを開けると、居たのだ。

「……」

「ん……ここは、どこですかぁ……？」

寝惚け目を擦りながら辺りを見回す、人形サイズの少女が。

驚きを通り越して身体が固まってしまった俺は、目の前の光景にどう対処すべきが脳をフル活用。その間も少女は首を動かしながら辺りを視認し、漸く俺に気付き――眼を見開き固まった。

段ボールを開けたまま小さな少女を凝視する男と、何やら声を震わしている小さな少女。他者から見ればどちらが悪者か一目瞭然に違いない。

「……また、か」

そんな少女の行動に俺は悲しげに呟く。この少女の行動は最早俺にとって見馴れたモノだがやはり心が痛い。馴れと言っても俺の心は頑丈ではないようだ。

少女の行動。初見の人が俺を見た時に大体同じ顔をする。問題は言うまでもないだろうが――この、眼。

鋭く強い目付き、殺意、敵意、悪意を眼として表したらこの眼だろう、と以前友人等から言われた事がある。祖父もこの眼の持ち主で俺は遺伝。祖父が若かった頃は『鬼の眼光』と呼ばれてたと自慢気に話していた事を憶えている。

そして悔やむべきは己の口下手さと恥ずかしがり屋な性格。最早、手遅れと言った方が良いのかもしれない。

もちろん俺も最低限の努力はした。だがどれも効果は得られず今はもう諦めている。なので、少々前髪を伸ばして眼を隠していたのだが少女が下から見ていた事も小さい分もあり、バッチリと見られてしまった。

諦めを込めた溜め息を一つ。どうすればこの状況を脱する事が出来るのか。脳をフル活用した結果、現れた項目も一つ。

「……昼飯、食べるか？」

その問いにおずおずと首を縦に振る少女に俺は今度は安堵の息を洩らした。

――――ま、結局。昼食は前日作って残っていたカレーを小さな少女と食べながら（生憎と少女用の食器は無かったため、爪楊枝を代用）、少女のここまでの経緯やらを食べながら聞いた。

聞き役となってから数分。少女の経緯を要約すると、どうやら少女は名前が無いらしい……否、憶えていないと言った方が正しいのかもしれない。気付いたら大きな樹に居て、外に出て放浪した結果、ここに流れ着いた、と。小さな身体をさらに小さくしながら言っていた。

自分が妖精でありしんぼく（後に神木と分かったが）から生まれたとか何とか。随分と弱っていたらしく俺に泣きながら感謝の言葉を述べてきた。……ちょっと、嬉しかった。

「……それで、どうするんだ」

「え？」

妖精さんは口の周りをカレーだらけにしながら眼を丸くする。少女と同じ境遇、ないし、ほぼ同じ存在を俺は知っているから言える事だ。

察するに……この自称妖精さんは幽霊に違いない。名前を知らない、憶えていたないのも既に亡くなってしまったからだろう。しんぼくとやらに居たのもきっとそれが生前思い出深かった場所に違いない。

妖精の身体の小ささもも幽霊だからだろう……と言うか、幽霊に身体の大きさなんて関係あるのだろうか？

月に当てれば綺麗に光るであろう銀髪、浅瀬の海の様に澄んだ蒼色の両眼、白いタイトな感じのミニスカートと半袖みたいな服装。

上下半身の服装に所々黄色のラインが入っており、長めの銀髪にこれまた黄色のバッテン印の髪止めが付いている。

妖精さんの容姿から見て外国の方なのか？　あくまで予想の範囲なので……日本語が流暢だから日本生まれ？　よく分からん。

普段恥ずかしがり屋で他人と言葉をきちんと交えるのが難しい俺でさえ、妖精さんとは上手く話せていた。と、言うのも妖精さんと同じ幽霊という存在に会った事があるからである。

日課である素振りもその影響だが今は関係ない。問題はこの妖精さんだ。

生前の名前を憶えていない、何処で生まれたか分からない、どうやって元の場所に帰れば分からない、の三無いで涙を零す妖精さん。

さすがに、と思った俺はここに居て良いと言ってあげた。部屋も広いし、ちょうど良い。何より妖精さんがきちんと成仏出来るまで俺がこの娘に良い思い出を作ってあげようではないか。

「い……、いいんですか？　こんなわたしでも、本当に？」

「……ああ。俺と共に居てくれ」

随分と言葉が固くなってしまったが伝わっただろう。現に妖精さんは先程とは別の色をした涙を零しながら喜んでいた。

「じゃ、じゃあお願いがありますです。……いいですか？」

既に友達となった妖精さんのお願いを俺が無下にする筈もなく。微笑みながら俺達はもう友達だろう？　と言う旨を伝えるとこれまた飛んで喜び。

幽霊だから飛べるのか～、なんて腕組みしながら暢気に考えていたら妖精さんははしゃいだせいか頬を赤に染めて口を開く。

「……わたしに、名前を付けてください！」

「……何を、そんな当たり前な事を」

「え！　いいんですか！？」

驚く妖精さん。俺としては元より考えていた事だ。胸中ならば『妖精さん』でも構わないが、さすがに口に出す時は可哀想そうだろう。名無しも不味いし、本当の名前とは比べ物にならないくらい下の名前になるだろうが呼び名と思ってくれれば暁幸である。

それに、実は呼び名はもう考えていた。

「……キョウ」

「キョウ……？」

「ああ……。お前の、名前だ……」

俺の名前を音読みに読ぶとキョウなので。安直だと思わないで欲しい。呼び名としては呼び名らしいし、何より――――、

「俺と、お前は既に……一心同体。相棒、だろう？」

――――友達だろう？　言葉は変わっても意味は同じ。受け取ってくれた妖精さんも、口下手で変な言葉遣いな俺の言葉でも読み取ってくれたらしい。……妖精さんは言わずもがな大粒の涙を流しながら初めて会った時の表情とは打って変わっての、満面の笑みを浮かべて、

「ありがとうございます。キョウ……大事にします。相棒（マイスター）」

「……ああ」

――――と、初めての出会いとやらとしては完璧ではないだろうか。口下手レベルマックス、対人レベルミニマムな俺でも十分な活躍が出来た……筈。ただ、最後に言った“まいすたー”とは何の意味だ？　家族、友達？　……まあ、いいか。終わり良ければ全て良しって事で。

そして、冒頭に戻り今日も今日とて日課の素振りを続ける。陽は沈み暗闇の満ちた夜の世界。そこで素振りを続ける俺。ふと、視線を感じ見遣ると街灯に照らされている部分でプカプカと宙に浮かぶ妖精さんの姿。

「……何だ」

「いいえー。何でもありませんですー♪」

「……そう、か」

どうやらご機嫌が宜しいようで。夕飯が炒飯だったからかな。あれは自分でも良い出来だと思ったから良かった良かった。

街灯の下、光に照らされる白銀の妖精さん。それがあるモノに思えて俺は笑ってしまった。

「どうしたですか？　急に笑ったりして」

「……いや、ただ――――」

――――妖精さんが、なんだか天使の様に見えただけだよ。

第二話　魔

良かった。本当に良かった。心底良かった。物凄く良かった。限り無く良かった。間違いなく良かった。絶対良かった。

彼と出会えた事により、自分は存在してもいいのだと認識出来た。とても、感謝している。感謝しきれない思いで一杯だ。

だから。

これからも、いつまでも、どこまでも、相棒と共にいます――――。

ネギ勘！　魔

空気を切り裂く風切り音が耳朶を打つ。暗闇に紛れて一筋の光の軌跡が生まれ、それは絶対的な力を持つ者によって編み出された証。

何度も何度も、途切れる事のない風切り音に心地好く眼を細めながら、我が主――――名を“ヒビキ”、を見守る妖精が一人。

容姿は至って普通の少女と何ら変わりない。

ただ、その体躯が人形サイズで服装と髪、瞳の色が外国人張りの異質を持っていた。

少女の名は“キョウ”。世界中に根付く神木の一つから生まれ落ちた妖精の一。
生まれたばかりで性格は幼い子供の様だが内に秘められし魔力は『膨大』の言葉が似合う程。
少女は未だ内包された魔力全てを扱える訳ではない。
生まれ落ちてからまだ時間が足りない、と言うのも理由の一つだろうが少女には他の妖精とは決定的に異なるモノがある。

風切り音が耳朶を打つ。ＢＧＭ代わりに訊きながら夜にも視得る眼が少女をある一点へと、視界に縛り付ける。

ソレは明らかに異質だった。同属である大樹の前で一人黙々と木刀を振り続ける男。少女と男は無関係ではない。
既に少女と男は切っても切れない縁に結ばれた関係なのだ。

ヒビキは口を真一文字に閉じながら黙々と振り続ける。
前髪に隠された狂気の双眸は何処へ向けられているのか、生憎とキョウには判る事は叶わなかった。

「――――ッ」

「どうしたですか？　ヒビキさん」

「……いや」

不意にヒビキが素振りを止める。夜にも効く眼から見えるのは苦渋に顔を歪ませる彼。
いきなりの事だったので判らなかったが、彼がこちらに苦笑を交えた視線を向けた後、ゆっくりと視線を足元から前へと戻してから素振りを再開する。

（……足元？）

初めはその意図が読めなかったキョウだが足元に散らばる木々の葉が、何故彼にあの様な表情をさせたのかを理由付けた。

春の訪れと共に何処の木々も緑色の葉が春を代表する花の彩りを良くさせている。
問題はその葉が風に吹き荒れたり、役目を終えたり等して地に落ちている。

しかし麻帆良は誰が、何時、どうやっているのかは定かではないがあまり地に木々の葉が溜まる事はない。
それは余り誰も詮索しないし気にする事でもないので特筆すべき事ではない。

言いたい事は、その落ちていく木々の葉の内、ヒビキの周りにあるモノだけ綺麗に二つに分かれているのだった。
これにはキョウも驚愕した。彼はただ素振りしていただけではなく、素振りをしながら落ちていく木々の葉を斬っていたなだから。
なら、何故、彼はあの様な表情を見せたのか。

（――――あ）

ヒビキの足元を注視して漸くキョウは気が付いた。一枚、たった一枚だけ斬られる事なく地に落ちていた。
故に何故彼が悔しそうな表情をしたのかも、納得した。

（……凄いです。さすがはマイスターヒビキです。感激です感動ですカッコいいです！）

尊敬と敬愛が混在する視線を送りながらさらにキョウは気が付いた事がある。
今は無風。風はない。なのにヒビキの周りには木々の葉の群れが為している。

これは恐らくヒビキが意図的に風を生み出し葉を落とす事により、素振りをしながら自然に葉を斬れる様練習していた、とキョウは理解した。

言葉でなら簡単かもしれないがこれ程難しいモノはない。
何せ、“ただの”素振りと“狙った”素振りの二つを同時に行っているのだから。
前方しか見ていない事にも驚いた。これでは前に落ちてきた葉しか切れないと言うのに、ヒビキは前後左右関係なく斬っていたのだから。

通りで彼が素振りをする度に魔力の様な何かを感じていた、とキョウは一人でに頷く。
その間も無言で素振りをし続けるヒビキ。
思えば竜（ドラゴン）と会った時もそうだ。図書館島と呼ばれる地下深くから感じる巨大な何か。

それを確かめるべく相棒に無理言って奥へ奥へと進み、出会ったのは大型の竜。
妖精である自分でさえも恐れて固まり無理矢理大声を上げていたのに、ヒビキは何時も通り冷静で至って普通の佇まいで竜と相対していた。
否、まるで竜を同等の相手と思っていなかったのかもしれない。
現に竜のさらなる成長に期待して戦線を素早く離脱したのだから。

（やっぱりヒビキさんは凄いです！　こんなわたしとも契約をしてくれたですし、優しくて強くて……とってもカッコいいです！）

キョウの瞳の輝きが増す。
それと共にヒビキへの尊敬度が上昇していく。最早、これ程の良

き実力者と出会えたのは運が良い、なんてモノじゃない。運命。そう、これは。

（……運命、ですか）

思いだす。自分と、彼との馴れ初めを。

何処かの世界の何処かの国の何処かの場所にある神木。そこが『キョウ』と言う存在を作り、生まれ、育った場所である。

神木の代替物。意識ある神木。魔力の塊を体現した妖精。何千万分の一の確率で誕生した精霊。

初めは意識だけがそこにあった。内に満ち溢れる魔力。外部から情報として流れてくる魔力。

知識として蓄えられ、その世界が一体どんな場所なのか日に日に妖精は理解していった。

何時の日か、感情という未知のモノからふと生まれたのは疑問と高揚と期待だった。

「外はどんな場所だろう？」「外では何が起こっているんだろう？」「外って面白いのかな？」感情は風船の如く膨らみ、されど破裂する事はなく。

気付けば身体を持ち、意識は固定され、一つの個として存在していた。

それから何日間何週間何ヵ月間何年間。ありとあらゆる場所へ行

き、体験し、情報を供給していった。
有意義なのは言うまでもなく、妖精は妖精として成長し『本物の』妖精として成長する事が出来た。

———問題は、魔力の枯渇。供給する側の妖精は日に日に魔力が減っていき最終的にはスプーン小さじ分の量しか残ってはいなかった。
正に風前の灯火。妖精として成長し『本物の』妖精としても生きていける神木は決定的な欠陥部分が存在した事を忘れている。

供給される事ない魔力。それは、契約して魔力を得なければ妖精(しんぼく)は生きていく事が出来なかった。

「……」

「ん……ここは、どこですかぁ……？」

気が付けば何かの視線を感じた。弱りきった身体を起こし眼を擦る。
前の記憶がない。一体自分はどこで何をしていたのかと思い、自身を覆う影に目が行き見上げると———生きた心地がしなかった。

殺意、敵意、悪意を体現した双眸。闇を呑み込む漆黒の色。人を傷付ける事に躊躇いのない印象を受ける鋭利なその眼。
視線を浴び続けた妖精は身体が微動だにせず、まるで金縛りでも

受けたような感覚を得ていた。
視線を離す事が出来ない。離した瞬間、この儚い生命に終演が迎えられてしまうと思ったから。

「……また、か」

（――――え？）

小さく呟きを入れた目の前の男性は瞳の中に悲哀を帯びた色が混じっており、嘆息する。
それに妖精は気付くも悲哀の色は霧のように消えていた。

「……昼飯、食べるか？」

そして、妖精は男性の問いに答えた。

渡された爪楊枝をスプーン代わりに出されたカレーを食しながら、妖精は生まれから今までの冒険を端折りながら口を動かす。
その間も男性はカレーを食す。前髪に隠された二つの瞳にどのような感情が込められているのか、妖精に判る筈もなかった。

「……それで、どうするんだ」

「え？」

何故自分の事を話したのかは、自分でも分からない。ただ彼なら自分という異端を恐れず接してくれると、心の何処かで思ったのだろう。

風貌だけで判断せず、彼の中身が悪ではない事を察せたのはかれが憂いの表情を纏ったのを偶然にも見れた事と、少女が神木として働いていた経験からかもしれない。

話も終わり口数が減っていく中、目の前の彼がこちらを見ながら呟いた。

眼は前髪で隠れている。初見の際に恐れられた事を知ったのだろうか。

口周りをカレーで彩りを加えながら少女は、彼を見遣る。

内から感じる何か、一見普通に座っているが瞳を知ってしまった故に、は何処かに武器でも隠しているのではないか、と予想してしまう。

彼は相当な実力者だ。少女は瞳以外何も知らない彼の素性に終止符を打つ。

膨大な魔力を持つ妖精が結論に至ったのは、その膨大な魔力を持った神木の精霊が恐れる程の実力を内に秘めている目の前の男性に、無理を承知で———下手をしたらこの場で殺されてしまうかもしれない等という疑問が浮かんでしまう最中。

「……ここに居て、いいぞ」

「わたしと、契約して（いっしょにいて）下さい――――って、え？」

「……ああ」

杞憂だった。余りにも早い解答に眼を見開く。
もう少し悩むかと思えばこうして期待を裏切ってくれる。彼は、本当に何者だろうか？

契約をしていない以上少女の魔力は回復しない。回復するには契約をする事が絶対条件。
契約相手の魔力も供給可能だがそんな無礼をする筈がなく、これで契約完了すれば少女は回復が出来る。

ここまでややこしいのは少女が正規の妖精ではないから故に。神木から生まれた、と言うのはそれだけで貴重で稀に見ない例なのだ。
通常（ようせい）とは異なるのも、仕方がないだろう。

「い……、いいんですか？　こんなわたしでも、本当に？」

「……ああ。俺と共に居てくれ」

歓喜で涙が溢れる。迷惑をかけてしまうのに、見ず知らずのわたしのために、こんな異端なわたしのために、心を開いてくれた彼。

魔法使いとは違う、彼。一般人とは違う、彼。常人とは違う、彼。契約をしてくれた、彼。
厚かましい筈のわたしを、理由は不透明なのにこんなに信用に至ってしまったわたしを。
ああ――――こんなに、嬉しい事はない。

だから、さらに厚かましく少女は願い、夢を視る。
せめてこれが終わりではないのだと。独り（わたし）の冒険は終わり、新たに相棒（マイスター）と共に紡ぐ冒険譚を。願い、願い、願う。

ありがとう、ありがとう、ありがとう。マイスターヒビキ。

†††††††

「……何だ」

「いいえー。何でもありませんですー♪」

「……そう、か」

同属の目の前で修業を続ける“ヒビキ”を笑みを浮かべながらただ少女は見遣る。
それだけで嬉しく思えるし、高い実力を持ちながら堕落しない精神を持つ相棒に“キョウ”は宙を舞っていた。

夜の世界。月が支配するこの時間で風を斬る音のみが静寂を、斬り刻む。
前髪は隠れて見えない。だが、一瞬こちらを見遣った際にキョウは相棒が笑った様な気がした。

「どうしたですか？　急に笑ったりして」

「……いや、ただ――――」

彼はそこで言葉を切り、再度素振りを続ける。
何を言いたかったのか分からない、何を伝えたかったのか分からない。
キョウはヒビキではない。キョウはキョウ。ヒビキの相棒だ。

“――――相棒となれて、良かった”

だけど、その笑みには、そんな意味が込められていた気がした。

第三話　聖

これは無理だ、絶対不可能だ、もうどうにも出来ないって時。俺は取り敢えず行動する。

行動しなければ何も起きないから。偶然や必然、運命なんてこちらに大手を振って助けてくれるなんて有り得ないから。奇跡だって起こるモノではなく、起こすモノだって俺は思っている。

だったらさ。やっぱり行動しなければいけないんだよなぁ……

…それが良い方向か悪い方向に転ぶかは分からんが。

ネギ勘！　聖

疲れもピークに達してきていると感じながら、日課の素振りを終え持参してきたリュックからタオルを取り出し汗を拭く。

あまり汗が出ない体質だがそれでも拭いておく。ふと見遣ると妖精さんも眠いのか欠伸をしていた。

いやぁ見てて和むね、やっぱり。小さいからなのか、幽霊だからなのか、はたまた少女だからなのか。

生憎と俺はロリコンじゃないし、幽霊趣味じゃないロリコンじゃ

ないし。
きっとこれだけ癒されるのは妖精さんからはマイナスイオンが発しているのに違いない。

「……帰るぞ」

「ふぁいです〜」

まだ最後の電車には間に合う筈だ。寮の近辺で素振りをすると、他の人に見られる可能性があるからなぁ。駅まで道は暗く何も見得やしない。……何も、出ないよね？

タオルを首に掛けてリュックを背負い木刀を手に持つ。妖精さんは最早定位置と言ってもよろしいポケットの中へと入っていく。
どうやら彼女に無理をさせてしまった様でお詫びにとポケットの外から撫でていた。

「……安心しろ、後は任せておけ」

「———ほう？　随分な自信じゃないか」

一言発した後、見知らぬ声が。前方から聞こえた様な気がしたが真っ暗で何も見得やしない。
途端、俺は不安に刈られて木刀を握る手に力を込める。

こんな時間帯に世界樹広場に居るのは、夜回りの警備員さんか教師、もしくは変質者。
可能性としては……変質者？　眼を凝らしても全然見えない。
慌ててリュックの中から仮面を取り出し顔に付ける。もしも誰かが来た時のために、持ってきたがどうやら成功だったようだ。付けていれば顔を見られる事はないし、恥ずかしがり屋な俺としては恥ずかしくもなくなる一品だ。

「……出てこい。そこに、居るんだろ」

仮面を付けて落ち着きを取り戻した後、勇気を振り絞って声に出す。携帯使って直ぐ様警察に連絡出来る準備をしたいが、相手が見えない、位置が掴めない、ピンチな状況だ。
一体相手はどんな人なんだろうか？

「フン。お見通し、と言う訳か――――茶々丸」

「はい、マスター」

「……」

暗闇から現れたのは金髪外人らしき少女さんと、これまた少女。
こんな時間帯に彼女達は何の用だろうか。

それに『ますたぁ～』と『ちゃちゃまるぅ』……？　彼女達の名前だろうか。随分変わった名前だ。きっと小さい方の少女の遊びに大きい方が付き合っているのだろう。
どんな遊びかは知らんが、こんな夜遅くに出歩いたら不味いのは言うまでもなく付き添ってあげているのは事情を知らない俺でも分かる。

安心しながら彼女達を見ているが、小さい方の少女が何だかこちらを凝視している。
……もしかして、匂うのか？　結構素振りしていたから、妖精さんは何も言わなかったけど臭かったに違いない。
だが電車の時間がヤバい。間に合わなかったら夜道を徒歩で帰るとか考えたくない。
駅までは少女を横切るしかない。精一杯の笑顔を浮かべながら少女の横を通り過ぎようとする。

「数日前に結界を突破した何かを追ってみたらまさかこんな奴だと――――ッ！」

「マスター！」

大きい方（ちゃちゃまるぅ）が小さい方（ますたぁ～）の前に立ち、まるで壁の如く身構えている。
あれ、もしかして俺がますたぁ～ちゃんに手を出すのかと思われている？　夜道に仮面を付けて木刀を持った怪しい人物……うん、間違いなく警察行きだね。

これは完全なる誤解だ。俺はただ早く帰りたいだけ。謝罪の意を込めて、ちゃちゃまるぅさんに頭を下げると――――風が頭を通り過ぎた。

「……何だ、今のは？」

まるで暴風が頭を通過したような感覚が襲う。視線を上げて見るとちゃちゃまるぅさんが手を突きだしながら、こちらを見ていた。何なのだろうか一体。

疑問符が浮かぶ中ちゃちゃまるぅさんはますたぁ～ちゃんを抱きながら後ろへ飛ぶ。一向に意図が読めない。どうやら俺と少女達の認識が間違っているのかもしれない。

「まさか避けるとはな……。貴様、何者だ？」

「……何者、とは」

……やはりそうだった。少女達は得体の知れない俺に怖がっているんだ。無理もない。仮面を付けた変な奴が木刀を持っているんだ。俺だったら一目見た瞬間、裸足で逃げ出すね。それなのに少女達は逃げないなんて随分勇気のある女の子だ。

ここは優しく伝えるのが定石だろう。自分の出来る限りの笑みを浮かべて、両手を開く。自分は敵じゃないよ、と意思表示だ。

「……俺は、お前達が思っている奴ではない」

「なら、何だと言いたい？　貴様から発している魔力はどう説明するつもりだ」

「……口で言わなくても、分かるだろう……？」

少女達だって分かっている筈だ。俺が君達を襲う変質者じゃない、と言うことを。ただ気が動転してしまい、冷静さを欠いているだけなんだ。さっきから彼女達は、変な事を言っているし。

月光の下に眼を細めながら未だに怪訝な眼差しの少女達。どうすれば誤解を解けるのだろうか。

だが時間は有限。さすがに電車に間に合わなくなってしまう。仕方がない、少女達の誤解はまた出会った時にしよう。

「……俺は、急いでいるのでな。帰らせて……もらうぞ」

少女達を横切れば早いのだが誤解が解けない以上、変に近付いたら少女達の心に傷を付けてしまう恐れがある。それは彼女達はもちろん、俺だって嫌だ。

遠回りになってしまうが少々迂回する事にしよう。少女達に背を向けて退散する――――が、

「ハッ、こちらもじじいの小言を訊くのは嫌なんでな。悪いが、少々手荒くさせてもらうぞ……茶々丸！」

「――――あ？　何か、言ったか？」

少女が何か叫んでいたので振り向いた瞬間、ちゃちゃまるぅさんが俺の木刀目掛けて殴ってきた！

たたらを踏みながら俺は驚きで眼を開く。ますたぁ～ちゃんは不適に笑っており、ちゃちゃまるぅさんは無表情で構えている。

この時点で俺は悟った。少女達はとんでもなく後戻り出来ない間違いをしている事に。

ついに正当防衛として、反撃してきたのだ。余程俺の印象が悪いのだろう。よく見れば、ますたぁ～ちゃんの顔は恐怖で歪んでおり、ちゃちゃまるぅさんは表情も作る事も出来ない程顔が固まってしまっている。

何て事だ。真夜中、ただ散歩していただけなのに俺という変質者一（仮）と出会ってしまったために、気が狂い言動も行動も可笑しくなってしまっている。

その友達も少女を守るために必死で恐怖で脚が震えるのを堪えながら前に出るなんて……。

原因は俺、である事は間違いない。だが逃げるにしても、少女達は追ってくる。俺は早く帰りたい、だが少女達の気を戻したい。な

ら……考えられる方法は一つ。

「……手加減は、しないぞ」

さらなる恐怖を与えて、気絶させるのみ。小心者の心が音を鳴らしながら割れるのが耳に聞こえる。大丈夫、脅かすだけだから何も心配する事はない……筈。

それに、脅かす最中に距離が出来たら即刻逃げればいいんだし。忘れていたが、今の俺は仮面を付けているから向こうからは表情は分からない。だけど眼は見えているから俺がどんな思いを伝えたいのか気付いてくれる筈。今程このコンプレックスの塊な眼に感謝した事はない。

この眼光ならば少女達も大人しくなってくれる。最後にハッタリを構しておこう。

「……さあ、いくぞ」

「———茶々丸！」

少女の泣き出す一歩手前な叫びに、ちゃちゃまるぅさんは飛ぶようにこちらに突撃してきた———な、何で？

第三話　魔

眼が醒めると夢だった。眼を閉じると現実だった。眼で視ていてはいけなかった。そんな眼は偽りしか写さなかった。

邪魔な脚を根刮ぎ払い、五月蝿い腕を捻り取る。余計な四肢はただの付属品。

長年の願いが叶った。長年の祈りが届いた。長年の望みが手に入った。

全部、嘘だった――――。

ネギ勘！　魔

意識が他所へと流れていく。ふと、よくある感覚。ここに来て、発現した嫌な機能。従者が淹れてくれた紅茶に舌を唸らせていたが、興が醒めてしまった。自分の時間を取られた事に心にて苛立ちが生まれる。

顔を歪ませ、舌打ちを一つ。面倒臭い、が漸く掴めた。

「茶々丸、準備しろ。感知した……ッ。全く、余計な手間取らせおって」

不利益な記憶の中に埋もれていた情報。数日前、麻帆良に張っていた結界を抜けた輩が居た。嫌とは言え、断れない我が身。直ぐ様感知し跡を追うが、“魔力”を消し、その身を隠された。

元々この仕事は好きで行っている訳ではない。だが、長年やってきた仕事だ。見つけ出さずにはいられるのは癪に触る。明らかな失態。言葉にせずとも表情にありありと浮かんでしまう。

従者———茶々丸が見事なまでの了解の意を唱えた会釈を見せ、支度を始める。視界の隅で完璧なまでの従者を見遣りながら、窓の外から姿を晒す半月に幼い唇を妖しく歪ませた。

『人形使い』、『童姿の闇の魔王』、『悪しき音信』、『禍音の使徒』、『闇の福音』、『真租の吸血鬼』。

どれも有名においても不名誉にしても、この二つ名を訊けば誰を連想させるのか分ってしまう自身の正体。今までの悪行、これまでの災厄、これからの魔縁。全ては自身の道を阻む奴らを消すために身に付けた力。

今では極東に根付く学園都市の警備員と成り下がったが、心までは渇れてはいない。そう、思っている。

生憎と月は半分に割れており、満月ではない。雲が笑う様に見え隠れする。少女もそれに応えた後、さっさと終わらせて暇を弄ぼうと思案する。暇つぶし。ああそうだ。それが、少女に真似た化け物の暇潰し。

今ままで姿を現さなかった魔力の持ち主。数日も魔力を消しているを見ると、こちらの出方を見ているのか、弱っているのか、若しくは相当の実力者か。

問題は無い。手に負えないなら爺に任せればいいだけの事。

「ま、それでも遊ぶがな。暇潰しには丁度良い……か」

十五年という歳月は余りにも長過ぎた。小言にも、十五年の重みが乗り掛かり脚の歩みにも力が込められる。

一歩後ろからついてきている茶々丸も口を閉ざし真っ直ぐと歩調を変えない。

良く出来た従者だ、とは言わない。これが当たり前だ。

時間の経過と共に欠伸をしながら場所へと近付く。

「……本当に面倒臭いな。魔力さえ戻っていればこんな事には……」

もうすぐで目的の地へと着く。否、もう着いている。行動に移さないのは一重に警戒されているからだ。どうやら、今回の仕事は楽に終わらないらしい。

世界樹広場に居たのは一人の青年と一つの使い魔。気付かれていないと思っているのか、前髪の長い青年は幾度と止める事なく木刀を両手持ちで、素振りを続けている。

感じる。結界を抜けて来たのはあの妖精だ。だが、何故か妖精と青年の魔力が同じ波長に感じる。
魔力、気が個人により総量が異なり波長は個人によって異なるモノだ。波長は人格、生まれ、魂により変わるモノ。
それこそ色で言うならば赤と朱の様な。性格と同じで魔力や気の波長が”全く同じ”なのは有り得ない。良くて“似ている“、という認識が正しいだろう。
しかし、眼の前に居る青年と使い魔の波長が“全く同じ”なのだ。

（……どういう事だ？）

不可思議、というよりは気味が悪かった。小さな疑問と怪訝な思考が眼を鋭利な刃物を連想させた。考えられる事は、どちらかが喚び寄せたと思われるがここは麻帆良都市。敵方の本拠地。
そんな場所で召喚すれば、使用した魔力やら気がこちらが常時展開していつ結界で見付かってしまう。それ以前に世界でも名声の高い実力者もいる。だがそんな素振りは一切無かった。つまりこれは。

「青年（あいつ）が元々隠れ潜んでいたのか……」

気付く事なくそれは声として外に洩れていた。その声に反応し茶々丸が体制を整える。何時でも出撃可能、という意味らしい。
手でソレを制止させながら思考する。外部から来る者は結界によりその身を晒す事になる。だがもし最初からここに居たのなら？
その場合、魔力、気さえ消していれば気付かれる事はない。

青年もそうだったのだろうが唯一の誤算が使い魔がついてきてしまったところか。それによら常時発動の結界に見付かる。難儀な話だ。

どちらにせよ、こちらの行動方針は決まった、否。決まっていた。さっさと捕まえて爺に突き出す。楽観した気持ちで居たが同時に思考はどこまでも冷静だった。

『悪の魔法使い』、エヴァンジェリン・A・K・マクダウェルは先手を取ろうと脚を踏み出すが――――踏み止まる。

奴がこちらを視ている。暗闇に同化している我々を射殺す様な眼差しで。

エヴァンジェリンは青年の瞳を識った。常人には持ち得ない昏き邪悪な色。

自分と同じく、悪の道に進んでいなければ出来ぬ眼を青年はしている。

弱っているのか蛇行しながら浮かんでいる使い魔をまるで庇いながら懐に入れる。さながら、襲いかかる危険から使い魔を守るためか。

「……安心しろ、後は任せておけ」

「――――ほう？　随分な自信じゃないか」

奴の言葉は間違いなくこちらを見越しての言葉。だから臆面も無く答えた。向こうはこちらに気付いているのだから。　言葉を吐き出すと共にエヴァンジェリンは青年に妙な違和感を覚える。
奴は何だ？　　どうしてあんな奴が麻帆良に居る？　何が目的だ？　姿を隠していても不安に駆られてしまう。

妙な違和感と様々な疑問が生まれるも明確な答えは見い出せず、青年はいつの間にか仮面を取り付けていた。
何のへんてつもないただの仮面。だがそのただの仮面が青年の異様な雰囲気を増長させているのは明らか。木刀を強く握り締める音がこちらまで聞こえた。警戒しているのが手に取る様に判る。

「……出てこい。そこにいるんだろ」

刹那――――身体が痺れた。

避けられない殺意を、逃げられない敵意を、免れない悪意を無理矢理押し殺した言葉は広場に良く響いた。響いた鐘のような音色が少女の心臓を抉るように握り掴む。既に知っていたのか――――それでも、尚、こちらに猶予を与える程の余裕を持ちながら平然と立っている青年にエヴァンジェリンの顔は酷く歪む。愉しく、愉悦に満ちた童女の笑顔で。

「フン。お見通し、と言う訳か――――茶々丸」

「はい、マスター」

「……」

凜、とした声を携えて現れる真祖。従順に仕える従者。無言の闇を操る仮面。

———遂に相対する。

エヴァンジェリンが気になったのはまず顔を隠した仮面だった。素性がバレないためであろうその仮面は、本来の使い方以上に役割を果たしていた。

顔を隠す仮面の色は真白で眼を見せる穴しか無い。何の色も持たない仮面が不気味で。その眼が、エヴァンジェリンを見詰めるその眼だけが、“彼”という存在を一つの点として表していた。

身体の痺れが痙攣を産み骨の髄までを叩き続ける。幾らか高揚感が昂る中で、エヴァンジェリンは自身を見詰め続けるその眼を恍惚に見続ける。従者は命令あるまで静かに待ち佇むのみ。

この眼を見ている限り、この眼がエヴァンジェリンを見続ける限り、少女の姿をした化け物は認識する。

———ああ、私は本当に悪の魔法使いだな。

今まで見られていた数の中で一番と言って良い程の印象を持つ彼

の眼。
一体どんな道を歩んだのだろう。一体どんな人生を持っているのだろう。一体どんな哀しみを背負ったのだろう。一体どれ程のモノを喪ってきたのだろう。
６００年という長い年月を経て少女の姿をした化け物は、化け物の姿をした悪は、悪の姿をした少女は今、生粋の化け物を目の前にして哂った。

徐々に初めの認識から変わっていったその眼の印象。もっと奴を識りたいが仕事は仕事。自身の仕事は奴を爺に明け渡す事だ。
少々不満だが、刑罰が下った後に何とでも言って貰ってしまえばいいだろう。

そうやって自己完結に至るまでの時間は凡そ一秒半。その僅かな時間さえも彼にとっては遅いのかもしれない。

「数日前に結界を突破した何かを追ってみたらまさかこんな奴――ッ！」

「マスター！」

エヴァンジェリンが気づく前に、風の様に従者が前えと躍り出る。それは青年の不意打ちを防ぐため。音無き歩みはいつの間にかエヴァンジェリンと茶々丸の二歩先まで近づいていた。
限りある武術、戦闘技法をデータと言う情報ににインプットされた身体は最善の攻撃を割り出す。半歩踏み込み風を切る正拳。当た

った。少なくとも茶々丸の予想ではそうだった。
しかし答えは青年の呆れが混じる声と共に返ってきた。

「……何だ、今のは？」

上半身を前に押し出す様に低い姿勢になり、まるで礼でもするような基本的な動作を思い出させる避け方をしたのだ。追撃は無理だと察知して己の主を抱え込み、後方へと下がる。青年にとっては準備運動なのかゆっくりとした動作で首を左右に曲げている。

エヴァンジェリンもまさか茶々丸の初手を見破るとは思わなかった。茶々丸の戦闘技術は全て知っている。知っているからこそ見破られ、挙句の余裕の表情。そこから青年の戦闘経験の長さが計り知れる。

（何故奴はこんなところで身を隠す必要がある？　何か目的があるのか、それとも私の様に……）

今が戦闘中だと思い出し言葉を紡ぐ。

「まさか避けるとはな……。貴様、何者だ？」

「……何者、とは」

一拍置かれた青年の声。何かに触れたか、と察する前に青年は作られた笑顔を面に出し両腕を惜しみなく広げた。無防備で踏み込める範囲にいたが、それは敵を呼び込む演技。熟練者のエヴァンジェリンにとってはそれに飛び込むのは愚の骨頂だと無意識に息を短く吐く。

「……俺は、お前達が思っている奴ではない」

どの口が言うのか。その無防備に懐を晒す姿は余裕の表れに見える。

「なら、何だと言いたい？　貴様から発している魔力はどう説明するつもりだ」

「……口で言わなくても分かるだろう……？」

ここでエヴァンジェリンは疑問を持つ。青年の口振り、突然の出現、それらの意味。彼は何を伝えようとしているのか。隙を見せないように常時茶々丸を動かせられる配置につかせ、青年を注視する。

見た目は若いが青年は数々の死地を駆け抜け、その度に世界に絶望し、死に触れ、戦地を彷徨った。でなければ、あの闇色の瞳に秘められた経験は説明ができない。

（一体奴は、どれほどの悔み、嘆いたのだ……？）

小さな疑問は徐々に興味へと成長し、自身の境遇と重ね合わせる。エヴァンジェリンは無意識の内に青年に同情の念を抱いてしまっていた。
青年はそんな彼女の心情を知ってか知らずか、まるで逃げるように背を向け口にする。その声色は先ほどとは変わって弱弱しさを感じた。

「……俺は、急いでいるのでな。帰らせて……もらうぞ」

（急いでいる、だと？　奴は何か明確な目的があって行動しているのか？）

そのまま去ってしまおうとする青年を呼び止めようと従者に目配せ。
そして、これではっきりとした。奴は明確な意思を持って行動している。今まで姿を隠していたのはその準備期間。それなのに現れたのは自分に何かを伝えるため。それは、何故ならば――――、

（私と同じ。同胞だからという事なのか……。なら、なら、ならば。何故今まで私と出会わなかった？　何故私から隠れていた？　何故……私に話さなかった！）

茶々丸に夜に溶け込む寸前の青年へと追撃を仕掛ける命令を下す。片腕を前へと突き出し目標を定めるように。もしくは遠くへ行って

しまう『理解者』を離さないように。

「ハッ、こちらもじじいの小言を訊くのは嫌なんでな。悪いが、少々手荒くさせてもらうぞ……茶々丸！」

その一撃は当たった筈だった。背後からの不意打ち。青年からは確実に無防備。戦闘を行う者の気配を感じなかった。一般人の気配に酷似している程に。

「――――あ？　何か、言ったか？」

だがそれすらも。何の変哲もない木刀で受け止められた。受け止めただけではなく、威力を殺すかのように数歩下がっているので無傷。鋭い眼光を主従の二人に向けた青年は素直な疑問を平然としながら、訊いてくる。

（バカな……背中に眼でもついているとでも言うのか！？）

数々の戦闘を経験してきたエヴァンジェリンだが、戦う意思がない状態で敵の攻撃を受けた事はなかった。常に敵に容赦なく向かっていたし、何より障壁を張っていた。だから背を向けていても、敵の攻撃を心配したことは少なかった。地面に転がっている小石が唐突に襲いかかってくる事を背を向けた状態で認知できるか？　否、それは難しいだろう。

だが青年はそれを意図も簡単にやってのけた。

「……手加減は、しないぞ」

青年の粛清が始まる。あのまま見逃しておけば良かったものを。そんな青年の心の内がエヴァンジェリンにには聞こえた。だがエヴァンジェリンは退かない、逃げない、下がらない。

これからは警備員ではなく、悪の魔法使い、エヴァンジェリンとして奴を捕まえる。同族嫌悪ならぬ、同族好色だろうか。知りたくなった。目の前にいる奴の事が識りたくなった。

「……さあ、いくぞ」

「———茶々丸！」

市販の木刀を手にした青年を迎撃するは、超最先端技術を搭載した魔法使いの従者。最初の出会いが終わるのも、後少し。

第四話　聖

一人になって考えてみる。今まで自分は生きていて、意味のある、意義のある生活を送っていたのか。

はたして意味があるのか、意義があるのか。それを理解出来るのは本人のみであり千差万別、十人十色。人によって感性が違うのだから当然だろう。誰も判らない、誰も理解しない。誰も答えを知らない。

だけど、それでも。意味のない、意義のない生活を送っていたとしても。きっとそれは自分にとって幸せなら――――文句なんて出ない筈だから。

ネギ勘！　聖

さて、どうしよう。既に退路は断たれた、と等しいくらいに俺の眼の前にはか弱き少女達が小さな手を握り必死に恐怖と闘っている。きっと暴漢を相手にした事はなっかたのだろう（当たり前だと思うが）。俺に向けられたその拳は開閉を繰り返し、迷いを見せていた。全ては誤解から始まった事。言葉を尽くしてみてもきっと俺の言

う事は訊いてはくれまい。それほどの信頼と信用を得てはいないのだから。だったらどうすればいいのか。考えられる事は少ない。

頼みの綱の妖精さんはぐっすりと気持ちの良い寝息をを立てており、夢の中。俺の装備と言えば、首に汗ふきタオルと右手に木刀。何て侘しい。肩を少女達にバレないように落とし、首を傾ける。くそ、どうすれば……、

「……さて、どうしよう、か？」

「はッ、どの口がほざく！　教えろ！　貴様の本当の目的を！」

ますたぁ～と呼ばれる少女が憤怒を表に出して声を張る。それに気付いた時にはちゃちゃまるぅさんが俺の眼前に佇んでいた。慌てて後ろに下がろうとすると、突然の突風が。つい木刀で風を受けようと前に突き出すと重たい衝撃が流れる。ん？　何だ？

眼を凝らすと何故かちゃちゃまるぅさんの制服が先程と比べて、傷ついていた。

「……マスター。危険です。ここは一時離れるべきかと」

「くっ、し、しかし……」

「現在のマスターの身体は人間の少女と全く同じ状態です。彼の実

力は未知数、マスターの魔法媒体のストックでは余りにも不充分です。申し訳ありませんが私ではマスターを守れる確率が低いと思われます」

何か事情の深そうな話をしているが、俺はそれを訊いているよりちゃちゃまるぅさんの身体に見やってしまった。いや、俺も健全な男だ。女性の身体、引いては所々制服が何故か敗れて卑猥な感じになってしまっている。……すみません、凝視してしまって。

軽く自己嫌悪を起こしながら、ちゃちゃまるぅさんを心配すべく彼女へ近付く。あれは、いきなりの突風だった。俺が無傷だったのは幸いだったが、ちゃちゃまるぅさんは女性であり傷が遺ってしまえば一生もの。

正直、ちゃちゃまるぅさんが敵視しているのは判ってはいるが、心配はせずにはいられなかった。

「……オイ。傷は、ないか」

無礼な口調ですみません。これでも緊張しているんです。

「……お下がりください、マスター」

「無視、か？　……なるほど。重症ではない、か。それはそれは――」

と、言い切る前にちゃちゃまるぅさんが己を犠牲に突進をしかけ

てきた。その余りの予想外の行動に慌ててしまい、左足首を挫いてしまった。

――――痛い！？　痛みを和らげるために無意識に身体を捻る。ここで倒れたら間抜けだ。そう思われるのだけは勘弁してほしい。とっさの判断が良かったのか、右足に力を入れて踏み込んだおかげで倒れずに済んだ。

挫いた左足首を庇いながらも、木刀の刃先を下に向けて杖のように地面に着けようとした。痛みでもしかしたら声を出していたかもしれんが、気にする余裕は俺には無かったのだ。

「……ハッ」

何故なら、ちゃちゃまるぅさんは俺の足元で倒れていたからだ。……いやいや、訳が判らん！　何故？　何故だ！？　取り敢えず彼女にとって俺は敵だ。ここは刺激を与えない様に離れなければ。先ほどの様に突進されたら大変だからな。俺は学習したぞ。

「……やめとけ。お前では、無理だ」

念の為、忠告をしておく。無茶をしてはいけませんよ、という気持ちを込めて。

「貴様！　やめろ、やめろ！　お前の目的は、お前の真実は誰も理

解出来ないのか！？　私なら、理解出来る！　私は、お前の同類だ！」

「……何を」

言っているの？　さすがの俺も焦りを隠す事は出来ない。目的？　真実？　同類？　ますたぁちゃんが何を考えて発言しているのかは判らないが、誤解をしているという事だけは理解出来た。

取り敢えず、ちゃちゃまるぅさんを立たせようと腕を伸ばすと、何本もの鋭い光の波が腕の間を抜けた。思わず情けない声を上げてしまい、恐る恐る光の波の出所を見てみると、ますたぁちゃんが試験管の様な物を持っていた。

一体どうやって光の波を？　そんな疑問が過ぎるが直ぐに解答へと至る。

「……よく出来た手品だな」

「何ッ！？」

あれ？　何か違う？　褒める所間違えたかな？

「面白いな。そんなモノで俺を相手してくれる、とはな……。さぞ

かし、子供に人気なんだろうな」

これで大丈夫かな。しかし、まさかますたぁちゃんが手品を出来るとは考えもつかなかった。試験管からどうやってあんな光を生み出すのかは知らないけど、あれを小学生に見せたらきっと彼女は人気者になれるに違いない。

いいなぁ、それ。俺もその手品学んでみたいなぁ。まあ、この状況では無理に等しいけど。

「お前が何を考えているのかは大体予想がつく。私は敵ではない。お前の全てを知りたいとは言っていない。お前がここで何をしたいのか、もしかしたら協力出来るのかもしれん」

「……マスター、何を」

ちゃちゃまるぅさんの悲しげな声が場に響く。確かに俺はますたぁちゃん達の敵ではないし、目的と言えば早く帰りたい。

しかし、協力？　全てを知りたい？　新手の告白ですか、そうなんですか。いやしかし、見ず知らずの少女に告白される状況なんて今まで無かったし、やっぱり告白されると言うのは嬉しい。今までの人生では無かったからな……。けど、口にはしない。きっとこれも勘違い何だろうと、自重する。

「……目的、か。言う必要ではないな」

「何故だ！　私なら、お前を――――」

「お前は、俺の敵ではないからだ。……自分で言わなかったか？」

ハッキリと言ってあげる。彼女の眼を見て、前髪で隠れているからよく見えないが、少し微笑む事を忘れない。ちゃちゃまるぅさんから少しずつ離れる。一応、無害かもしれないが。また光の波を向けられたら危ないからな。

左足首を庇う様に、右足を前にして重心を前に傾ける。木刀は構える必要はないと思ったから、左で収めておく。まだ、終電に間に合うかな……。

「ん～、ヒビキさん……？　どうしたですか……？」

「ッ！　マズい……」

だが時既に遅し。その可愛らしい声に気付いた時には、妖精さんは外に顔を出しており、この殺伐とした空間の仲間入りを果たしてしまった。

どうしよう。妖精さんは幽霊だから少女達には見えないだろうから、おそらく俺が勝手に声を出していると見えるだろう……何という間抜けっぷりだ。

「お前……やはり、妖精……いや、精霊の類か」

「あ、ああ、あああーーー！？　真祖の吸血鬼！　何でこんな所に！？」

あれ。以外と二人とも知り合いだったんだ。何だ、心配するのは杞憂だったな。けど、吸血鬼って何のこと？　ますたぁちゃんに付けられたら渾名かな。……何か可哀想だな。訊いてみたいが、あまり触れない方がいいな。誰だって訊いて欲しくない事だってあるし、何より俺は他人だし。

「ヒ、ヒビキさん！　どうして吸血鬼と一緒にいるのですか！　え、え？　うわーん！」

「……少し、落ち着け。何てことのない、茶番が起きただけだ」

誤解が誤解を読んでいる。まさしく俺に対しての茶番だな。果たしてこの茶番に終劇はやってくるのだろうか。皆目見当もつかない。だがしかし。妖精さんが起きた事により光が見えた。ますたぁちゃんも妖精さんと親しい仲らしいし。あれだ、きっと手品師は霊も視える能力もあるんだな。だったら、妖精さん。頼んだぞ。

「……キョウ。出来るか？」

「え……あ、う、は、はい！　もちろんです！　キョウはマイスターヒビキのためなら何でもやりますです！」

「……良い返事だ」

何という素晴らしい返事だろう。パンクしかけていた心の許容量に余裕が生まれる。このまま妖精さんが起きてくれなかったら、もしかしたら朝まで続いていたのかもしれない。ほっと息を吐く。素直に頷き、笑みを浮かべた。

「……俺がやる事はただ一つ。そのためには障害がある」

「はいです！　今はまだユニゾン出来る力は出せませんが……例え真祖の吸血鬼と言えど、マスターが居れば怖くないです！」

妖精さんの叫びを皮切りに暴風が俺の背中を押す。耳をつんざく木々のざわめき。飛ばされない様に踏ん張るが、如何せん足を怪我してるため前へと押し飛ばされてしまった。

「くっ……“氷楯”！」

暴風に負けない、ますたぁちゃんの声。俺はそれを訊きながら、ますたぁちゃんへと飛ばされていく。願うなら、避けて欲しい。欲を言うならば、止めてくれ。

「ここからは、通しません」

「ほォ……、止めてみせるか」

何という助け。ボロボロだと言うのに、我が身を呈して俺を助け様とするちゃちゃまるぅさん。凄く感動した。そして何も出来ない自分にごめんなさい。

ちゃちゃまるぅさんに上手く受け止めて貰える様に、身体を強引に捻り低い姿勢から大きく両腕を開いた姿勢になろうとした。
そこで俺は焦る。突如、暴風の風向きが変わったのだ。一直線だった風向きに左右が加わり乱雑な風の流れが俺を襲う。

「ヒビキさん、援護します！　――――眷属よ、わたしの願いを訊いて！」

風向きが変わった事により、動作が遅れ開こうとした身体のバランスが崩れる。幸い、木刀は落とさず持っていたが今はそれ所ではない。不安定なままちゃちゃまるぅさんに受け止めて貰おうとしているのだ。
ちゃちゃまるぅさんは既に準備万端らしく、両腕を開いてこちらを待っている。只でさえ華奢な女性の身体なのだ。男性の身体をまともに受け止める事が出来る様な身体つきではないのが見て取れる。

もうダメだ！　最悪の展開に眼を閉じる――――瞬間。爆発が起きた。身も心も凍らせる様な、冷えた爆撃。直撃は免れた様だが爆

破の余波で俺は無重力を体験した。

身体が軽い。まるで空を飛んでいるかの様な感覚。暴風も届いていないこの空間は一時俺の焦りを消し、望んでいなかった末路を変え、最良の展開へと進んでくれた。

「間に合ったか。大丈夫か、茶々丸」

「はい。欠損部分、欠落部分、欠陥部分……全て無し。問題ありません」

眼を弱々しく開ける。足の感触を確かめてみる。……どうやら少女達からは余波により大きく離れており、地面に足がついていた。痛みが全身に走ったが顔に出ない様に堪える。良かった、助かった……。

「ヒビキさん、お怪我はありませんか？」

妖精さんが心配してくれている。大丈夫だよ、と意思表示し少女達に視線を向ける。

そして、とある決意をした。

「……帰るぞ」

「は、はい？　帰る、ですか？」

妖精さんの問いに頷いて答える。元よりますたぁちゃんとちゃちゃまるぅさんがこちらに向かってきたから帰れなかったんだ。しかし今なら、大分距離も離れ少女達も落ち着いている様子。逃げる（かえる）なら今しかない。

「元より、これは意味の無いモノだった。……なら、ここで終いにして構わないだろう。それに……」

「それに……？」

「……いや」

答えるのはやぶさかだ。て言うか、言えない、言える訳がない。最悪な結末、それは警察を呼ばれたら終わりだからさっさと逃げたい……だなんて。　街灯があるが、顔も夜のお陰で見にくいだろうし多分大丈夫だろう。

妖精さんは俺の答えに納得したのか、両手を胸の前で合わせて感激していた。感激する要素なんてどこにも無いだろうに……ああそうか。やっと帰れるからか。そりゃあ、ポケットより布団で寝たいよな。

「待て！　一つ、一つだけ訊かせてくれ。お前は……」

悲痛な声を含ませたますたぁちゃんの言葉。最後まで訊いてあげたいが、後腐れがあったら後々困る事になりそうだ。ちゃちゃまるぅさんにも迷惑が掛かるし、それに明日は学校だ。疲れが残っては大変だ。

首に巻いていたタオルに触れると汗で濡れていた。当たり前だがやはり俺も疲れていたんだろう、額からも汗が流れているのが感じる。

「それ以上、言うな」

「ッ、何故！？」

「……俺の目的はお前とは異なっている。それに普段なら会わない筈だった俺達。なら、当然だろ？」

もう、ますたぁちゃんの顔は見ない。後悔は残さないために。早く帰りたいために。……そう言えば、宿題やってないなぁ……。

「……また、な」

「――――あ？　今、何て言った？」

し、しまった！？　つい癖で友人達との別れの言葉を使ってしまった！　これじゃあまた会いましょう、って言っているものじゃないか！

一生の不覚……溜まった疲れがこんな所で返ってくるなんて。ヤバい。ますたぁちゃんが滅茶苦茶凝視しているのが判る。こんな奴とまた会うのか、とか気持ち悪がっているに決まっている。もしくは怖がっているか。

もう帰ろう。どうせもうますたぁちゃん達とは会う事は無いんだ。今日はちょっとした偶然が重なっただけだ。うん、そうだ。そうに決まっている。

ますたぁちゃんがブツブツと呟いているが聞き流す。さあ帰ろう今すぐ帰ろう何が何でも帰りましょう！

†††††

……ふぅ、何だか疲れたなぁ。

「ヒビキさん」

「……何だ」

ん、妖精さん？

「きっと、判る時が来るです。その時まで……いえ、その時が来てもずーっとわたしはヒビキさんと一緒に居ますからね」

「……」

ますたぁちゃんとちゃちゃまるぅさんから去って（にげて）から数時間。漸く自室へと戻る事が出来て安堵していた時の妖精さんの突然の言葉。真摯な眼差しの内に映る弱々しい自分の姿。こんな俺と一緒に居てくれるだけで嬉しいのに、そんな事を言ってくれるなんて……。

「……ああ、ありがとう」

そんな不意打ち、ズルいじゃないか……。

幾つになっても、涙は出るときは出るんだなぁ、と自然な気持ちで思った。

頭を上げて涙が零れ落ちない様にする。涙を拭くなんて、今は出来ない気分だった。

「明日も、無事に過ごせますように」

「――はいです！」

第四話　魔

自分に――――やれない事なんてない。遣れない事なんてない。ヤレなんて事なんてない。殺れない事なんてない。

そして。

自尊心と言う我が儘と自意識過剰と言う情熱を持って、矛盾を孕んだ自信を過剰して、有限を実行し無言を遂行する。それは、途轍もなく意味の無い事に見せかけて途方もない意味の有る事に見える。

だが。

審議する人は必要なく、審判は要らず、審じる事なんて有り得ない。

だったら、どうすればいい？

決まっている。突破出来る程突破して、凌駕したいままに凌駕して、超越すら超越すれば良い。

ただ、それだけの話。

ネギ勘！　魔

先手必勝。敵は眼前の青年。木刀を片手に佇むその姿は、ただの一般人に過ぎない。だがそれは仮の佇まい。普通ではないと知っている悪の魔法使いとしては、歯痒い思いを味わった。だがそこで止まる訳にはいかない。

何故ならば、彼は同族で同属で同賊だから。

主の思いを汲み取った従者は威嚇を止め、戦闘に適した構えを見せる。まるで格闘家のソレ。準備運動なのか親指から順に曲げていく。人の指なら間違いなく関節が鳴っていただろう。それ程までに茶々丸の握力は、普通を逸脱している。

常人なら挑もうなんて決して思わないだろう。茶々丸から感じられる覇気は、純粋なまでに力強い瞳は、魔法使いの従者は、確実に青年を仕留め様とする意志をを持っている。

だが、動揺もせず余裕を見せる青年の姿があった。姿勢を前屈みにする動作は戦闘を開始させる表れか。首を傾げるその仕草も茶々丸を敵だとは思っていないのか。

「……さて、どうしようか？」

「はッ、どの口がほざく！　教えろ！　貴様の本当の目的を！」

エヴァンジェリンにしてみては茶々丸を前にして堂々としている青年に関心を寄せるが、敵としては自分が誇れる従者を敵として見ていない青年に憤慨する。
そして、それを合図に。弾丸の様に青年へと駆けて行った茶々丸。地を蹴る音は戦う者としてのエンジンを起動させ肉薄する。
茶々丸を見ずに呆然とエヴァンジェリンを視界に写す青年。不意打ちを連想させる蹴り。風を切り暴風を生んだしなやかな脚は、青年に致命傷を与える事は明白と言えよう。

（な――――んだと？）

驚愕したのは攻撃を繰り出した茶々丸ではなく、背後でそれを見守っていたエヴァンジェリン。
青年は蹴りを全く見ずに一歩後退し、寸前でかわした上で反撃を仕掛ける。予想のつかなかった青年の動きに数瞬の隙を見せてしまった茶々丸はその身に木刀の一撃を受ける。

（ア――――）

声音にすらならない呻きをその内に呑み込み、身体を反転させ衝撃を流す。勢いを殺しながらエヴァンジェリンの元へと戻った茶々丸は分析を開始する。
青年は先程の攻撃を確かめているのか、茶々丸を視界に収め動きを見逃さない。
口を小さくし聞こえない様にエヴァンジェリンに伝える。

「……マスター。危険です。ここは一時離れるべきかと」

従者の答えに唇を噛む。

「くっ、し、しかし……」

「現在のマスターの身体は人間の少女と全く同じ状態です。彼の実力は未知数、マスターの魔法媒体のストックでは余りにも不十分です。申し訳ありませんが私ではマスターを守れる確率が低いと思われます」

茶々丸の知識量、分析判断、計算能力は随一でありそれはエヴァンジェリンも認める程。機械に詳しくなくとも自分の従者。従者の言っていることは間違いでは無いことを知っている。

だからこそ、ここでの撤退は納得出来なかった。答えを待つ従者の瞳。眉を顰め口を開こうとすると、足音が聞こえた。

「……オイ。傷は、ないか」

平坦な口調。腕を伸ばしながら近づく姿は大鎌を持った死神の様だ。普通を装っているが、心の中では愉悦で笑っている事は容易に連想出来る。

木刀を受けた部分を確認しながら主をを下がらせる従者。その傷は軽い物の、茶々丸としては疑問に思う。

受け身はとったが完全ではなかった。本当ならば茶々丸はあの一

撃で沈んでいた筈だ。それが軽傷で済んだ。

（もしかして、彼は……本気を出さなかった。それとも出せなかった……？）

青年の心配を装った言葉。あれは、言葉通りのいみだったのではないか――――。

「……お下がりください、マスター」

「無視、か？　……なるほど。重症ではない、か。それはそれは――――」

疾駆。身体をバネの如く飛び出す。これ以上近寄らせてはいけない、と言う茶々丸の意志が即座に行動へと移った結果。
視界に入る前に初期動作を起こしておく。勢いのついた足蹴は、確実に青年の脳天に狙いを付けていた。

だが、それすらも無意味、それすらも無価値、それすらも無慈悲。
青年の変わる事のない表情に変化が起きた。口角が上がる、それと同時に頭一つ分低くなり脳天への足蹴を回避する。無防備になったと思ったのか、青年も木刀を差し向ける。空気を切り裂く木製の刃。無表情のままの茶々丸の髪一房を刈り取るだけの不発と終わる。

そして、絡め手で木刀を掴み真上と放る。彼女と彼の距離は鉛筆一本分。思考を展開せずに、仕掛けられた事は茶々丸が人間でないことの利点の一つとも言える。

（こ、れ、で――――）

終了。力を最大限に込められた拳。二手三手読みつつも、これで戦闘は幕引きだと思っていた。今まで青年を視認、認識した上での見解だった。まっすぐに打ち出される華奢な腕に似合わぬ剛拳。そして、深く知らぬ青年に向けられる慈悲。

（――――すみませ――――）

それは、一番、やってはいけない事だ。

震脚。最後まで思えなかった言葉は、茶々丸の視界が、月と星と時々雲にいつの間にか注がれていた事と同時だった。

呆気に取られ、瞼の開閉を一回、二回、三回。視界の隅には何故か離した筈の木刀が。牽制のつもりか、茶々丸の頬の真横に突き出されている。

何故。そんな疑問はとうの昔に回答されていた。

要するに青年は震脚で茶々丸に微妙なズレを起こさせ、正拳を反らしそのまま右肩をぶつけ、倒す。無造作に振り回されただけと錯

覚させた腕には木刀が戻り、切っ先は彼女へと。

「――――ハッ」

嘲笑。これこそが青年と茶々丸の戦闘が終わった合図。

「……やめとけ。お前では、無理だ」

（……ああ、そう、でした）

逆に慈悲を向けられてしまう。どうやら侮っていたのはこちらの方だと、理解したうえで青年に見つからない様に嘆息。まるで人間の様な行動をしたことに彼女は気づかない。そのまま、自分でも判らず口走ろうとする。

それを拒む主の声と姿に気づくには遅すぎた。

「貴様！　やめろ、やめろ！　お前の目的は、お前の真実は誰も理解出来ないのか！？　私なら、理解出来る！　私は、お前の同類だ！」

「……何を」

既に準備していた試験管を放り、呪文を唱える。茶々丸に止めを刺そうとする青年に射出された三本の小さな流星。魔法の矢。当た

りはしなかったが、注意はエヴァンジェリンに向けられた。

「……よく出来た手品だな」

「何ッ！？」

「面白いな。そんなモノで俺を相手してくれる、とはな……。さぞかし、子供に人気なのだろうな」

挙句には児戯呼ばわり。魔法の矢は初歩の魔法だが強者が使えばそれなりの強さはある。エヴァンジェリンが魔力を封じ込められていたとしても、不意打ちによる牽制による攻撃を眼にあっさりとしている。

（私の名を知らぬ筈はないと思うが……臆さないとはな。茶々丸との戦闘もそうだ。奴はどれほどの経験を積んだと言うのだ）

同類には興味は尽かない。長きに渡る人生にこれほどの自分に似た奴はいない。手放したくない。そう思い始めたのは暇潰しからなのか。

「お前が何を考えているのかは大体予想がつく。私は敵ではない。お前の全てを知りたいとは言っていない。お前がここで何をしたいのか、もしかしたら協力出来るかもしれん」

（私は、何を）

「……マスター、何を」

初めて青年の表情に戸惑いが混じられた。茶々丸にも同じ色が浮かんだが、エヴァンジェリンは見ていない。

「……目的、か。言う必要ではないな」

「何故だ！　私なら、お前を――――」

「お前は、俺の敵ではないからだ。……自分で言わなかったか？」

その意味は、拒絶。
その意図は、拒絶。
その意志は、拒絶。

声と共に映し出された笑みは裏のない、綺麗さを持ち合わせていた。
少女は一人だった。人とは異なる生を持ち、人との関わりを持ちたかった。だが、その身に宿る血が力が存在が否定させる。
人とは振れ合わせず、関わらせず、接する事をさせず。混濁した感情を抑え、人形を操った。

唯一、認めてくれたと思った奴でさえ、帰ってくる事はなかった。

青年は一人ではなかった。人と似た生を持ち、人外と関わりを持った。その身に宿る血が力が存在を否定せず、されど肯定せず。
人と触れ合い、関わり、接した。その結果、人外ではなくとも人外の力を得た。

唯一、認めてくれる奴は今も認めてくれている。

平常を装うも、思考が上手く出来ない。茶々丸が青年の隙を見て、戻ってきた今でも去来してきたのは安堵ではなく、悲壮感。
青褪めた表情。夜の暗闇がより一層、身体を心を冷たくさせる。

このまま逃げる事は可能だった。だが青年はそうはさせない。構えを取る姿。それすらも偽りに見えてしまうのは何故だろうか。

（私は悪の魔法使いだ。人を恐怖で陥れ、苦しめ、哀しめ、嘲り、蔑み、罵り、堕落させる。……考えは止めだ。ふざけるな、面倒だ、何なんだ、今の私の腑抜け具合は。ああそうだ。今は仕事だ。時間だ。やるか。やるぞ。ああやってやる。私は、あいつを、どうやって、何をするのか――――考えろ）

悪としての矜持。それがエヴァンジェリンをエヴァンジェリンと言わしめる。
表情は戻る。単純とは言わないで欲しい。彼女は残酷なまでに純

粋で純情で天然で合理的で非人道的で非純情的で非合理的なまでに――――悪なのだから。

「ん～、ヒビキさん……？　どうしたんですか……？」

「ッ！　マズい……」

次なる介入者は、青年の相棒。妖精と偽る上位精霊。眠気眼で紡ぐ言葉から、青年を信用している事が判る。何せ今までの戦闘の時でさえ寝ていたと言うのだから、図太さに呆れると言うか信頼していると言うか。

「お前……やはり、妖精……いや、精霊の類か」

「あ、ああ、あああーーー！？　真祖の吸血鬼！　何でこんな所に！？」

青年は相棒を隠していたかった。これでは青年と妖精が繋がっている事は明白。エヴァンジェリンには青年を捕らえる理由が出来た事になる。

慌てる相棒を宥める青年。それを視界に入れたまま、茶々丸を見遣る。　力強い、強者の瞳が精錬された従者に届く。

「茶々丸、やれるか」

疑問でも質問でも設問ではない、問い掛け。答えは判っていた。

「……マスターの命ならば、なんなりと」

その清らかな忠誠心は、今だけは有り難かった。

「……俺がやる事はただ一つ。そのためには障害ある」

「はいです！　今はまだユニゾン出来る力は出せませんが……例え真祖の吸血鬼と言えど、マスターが居れば怖くないです！」

二対二。従者対従者。主対主。正攻法の戦い。　合理的な戦い。当たり前の戦い。戦陣を切ったのは青年の相棒、キョウから。

妖精の気概に呼応し、顕れたるは世界樹の根。その数、十は超えている。太い根もあり細い根もあるが、その根の生命力は計り知れない。

「行って！　お願い！」

「くっ……“氷楯”！」

妖精の意に応え、根の群は吸血鬼を襲う。媒体を用いそれを防ぐが、それを利用する者もいる。

――――青年。根の一本を背にし、押し出し加速する。狙いは従者の主、エヴァンジェリン。その行動上、どうしても瞳が露わになってしまう。
真祖の吸血鬼が見たのはどこまでも深く純粋な黒色。標的を決して離さぬ、そんな力強い意志が垣間見えた。

数多の根群を従えて、手にするは非凡の武器、木刀。彼が担えばそれは一級品の戦器へと変わる。

己の武を用いるための器。
己と共に戦うための器。

さて、この意味は何なのか。

氷楯を使っている最中、回避行動に移せない僅かな隙を狙った一撃。入れば致命傷は避けられない、青年は戦闘に慈悲は要らない。だが、主を守るこそが従者。主に従うのが従者。
茶々丸がその道を阻むように青年に立ち向かう。

「ここからは、通しません」

「ほォ……、止めてみせるか」

「ヒビキさん、援護します！　――――眷属よ、わたしの願いを訊いて！」

青年の身体が螺旋を描く。そして茶々丸は眼を疑う。暴風を体現していた根群が青年を中心に吹き荒れ、さらに一点に集まり一本の木刀に絡まっていく。完成するは、世界樹に包まれた大剣。絡まった根の一本一本から魔力が凝縮され、膨大な力が生まれた。

———これでも、止められるか？　まるでそんな事を告げているかのような笑み。相棒に後押しされた力は人間が扱うようなモノではなくなっていた。

茶々丸まで、後数歩と言った距離。そこで大剣を振るう。決まれば間違いなく必殺の一振り。彼も、彼の相棒もこれで終いだと思ったに違いない。二人ともその表情を変えていたのだから。

……そう。青年とその相棒が茶々丸に視線を向けていた事。その隙を逃す悪がいるだろうか。

「考えが、一歩……甘いんだよ」

———氷爆。茶々丸の数歩手前、つまり青年自身に展開された氷の爆発。当たればその身は氷の彫刻となり、凍傷は避けられない。例え青年が障壁で免れたとしても無傷ではないだろう。現にエヴァンジェリンの相手をしていた妖精が、その顔を氷の様に青く冷たく変えている訳がない。

「あ、ああ、ヒビキさん……」

冷えた硝煙が展開しているため青年の姿は確認できない。その内に茶々丸がエヴァンジェリンの下へと戻ってくる。

「間に合ったか。大丈夫か、茶々丸」

「はい。欠損部分、欠落部分、欠陥部分……全て無し。問題ありません」

それを訊いてほっとする。言葉を介さず行った作戦とは言え緊張はしない筈がない。敢えて妖精に青年を援護させるように仕向けるなんて、妖精に経験がなかったからできたこと。そこは救いだ。後は傷ついた青年を学園長に差し出せば良い。そして、後は……、

「く、くは、くはははははは！」

「……マスター？」

変わって妖精———キョウは絶句した。良かれと思って青年を援護したのに、それが後眼となってしまったのだ。普段からマイスターと呼んでいるのに、マイスター……、

「……ふう」

「あれ？　ヒビキさん？」

硝煙が晴れ、姿は見えず。聞こえた場所は自分のすぐ隣。一息入れて落ち着いた様子のマイスターヒビキ。あれ、あれ、と困惑し安否を心配しているキョウに向かって無骨な微笑みを投げかける。――こんなモノで俺がやられると思ったのか？　そんな意味を持ちながら。

（やっぱり、マイスターはすごいです。当たる寸前での回避。瞬動、クイックムーブ、瞬間移動？　わたしまでだまされちゃいました……。なるほど、敵を欺くならまず味方から、ですね！　さすがです！　すごいです！）

キョウの中でぐんぐんと青年の株が上がっていく。当の本人はそれを知らず、氷爆の影響で朽ちた根群を木刀で振り払いながら、敵に視線を投げつける。キョウは先程自分が同じ表情をしていた事を忘れ、絶句しているエヴァンジェリンと茶々丸に攻撃を仕掛けようと――――、

「……帰るぞ」

「は、はい？　帰る、ですか？」

静かに頷く。こんな敵にも慈悲をむけようというのか。なんて心の広い方だろうか。さらに株が上昇。ぐんぐんぐん。前髪から隠れている鋭き瞳にも、力が弱まっていた。

「元より、これは意味の無いモノだった。……なら、ここで終いにして構わないだろう。それに……」

「それに……？」

「……いや」

そこで青年――ヒビキは顔を伏せ、それ以上は語らなかった。そのまま相棒と視線を重ねる。その時ヒビキがキョウに初めて見せた表情。それは敵に向かっての好戦的な表情ではなく、自分に見せる優しい表情ではなく。どこか遠い誰かに向けた望郷の念に染まった表情だった。

思えば、自分は彼の過去を知らない。別に気にはしなかったし、彼も気にはしなかった筈だ。大切なのは今。それを知っているからこそ、こんなところで学生をやっているのであって。自分と初めて会った時の彼のに感謝していたのに、自分は今も彼に感謝されていると勘違いをしているのだから。

過去に何があったかは知らない。否、魔力が回復すれば知る術を得られるだろう。だがそれは不公平だ。

いつか、彼が己の過去を伝えてくれる日まで、自分は全力で彼を支え、力になろうではないか。

（だって、わたしは、マイスターヒビキの相棒なんですから！）

答えを見つけ満足した。彼が帰るというのならそれに従おう。いつの間にか定位置と化したポケットに入り、眼を閉じる。次起きた時は彼を支えれる言葉を言えるために。しばしの休眠を。

それを確認したヒビキは動く前に吸血鬼に遮られる。

「待て！　一つ、一つだけ訊かせてくれ。お前は……」

それ以上、エヴァンジェリンは声が出なかった。

攻撃を避けられた事ではなく、興味を向けられなかった事ではなく、自分が悪の魔法使いという事ではなく、彼が――――ヒビキが泣いていた事に声が出なかった。

前髪に隠された瞳から流れる一筋。何を思っていてなのか判らないが、それ以上言うな、と言っている事が判る。

「それ以上、言うな」

案の定、彼はそれを望んでいた。だがそれを素直に訊ける吸血鬼ではない。悪の魔法使いだ。

「ッ、何故！？」

「……俺の目的はお前とは異なっている。それに普段なら会わない

筈だった俺達。なら、当然だろ？」

そして彼は少女から顔を背ける。これが最後と言わんばかりに。
これを最後に彼はもう現れない、と。背中が如実に語っていた。
せっかく出会えた同属が離れていく。いつの間にかぽっかりと空いた心が哭いている。ああ、こんなにも私は飢えていたのか、と嘲笑。
茶々丸も主の思いを汲み取ってか彼を追うとはしなかった。こんなひどい顔をした主を初めて見た、それも起因の内だろう。

これで終わると思った夜の戦い。
だが最後に、青年は粋な計らいをしてくれた。

「……また、な」

それを最後に青年は去っていく。

「———あ？　今、何て言った？」

彼はもういない。静かな世界が漸く調子を取り戻し再び朝が訪れる前の宵闇が始まる。
エヴァンジェリンは青年の言葉を脳内で何度も何度も反芻しながら、茶々丸と顔を向ける。茶々丸が見て思った事は、まるで玩具が手に入った時に見せる子供の笑みだった、と。ただし妖しい愉悦混

じりで。

「茶々丸」

「はい」

「じじいにあいつを調べさせるように伝えてくれ。徹底的にだ。今すぐだ」

「了解しました。ですが今夜はもう遅いです。風邪を引く前に帰りましょう」

「ああ。そうだな。……私は、しつこいぞ？　何せ悪の魔法使いだからな。———待っていろよ？」

第五話　聖

人には言えない事がある。それを、世は秘密と言う。恥ずかしい事、嫌な事、隠したい事、嬉しい事、悲しい事……何でも良い。自分の内に入れておけば、誰にも語らなければ、それは秘密だ。

そんな俺にだって秘密はある。その日あった出来事を絶対に隠し通したい、秘密がな。

そうやっていると、ふと思う。この世はどれだけ秘密で一杯なのか、ってな。

まあ学生の身分である俺の知的好奇心を擽る一時。そんな考えでも暇潰しにはなるな。

……さてさて、今日も一日頑張ろうかね。

ネギ勘！　聖

気分は類を見ないほどに穏やかだった。部屋全体を朝日の輝きが覆う中で密やかに感じる昂揚感。その感覚は間違いではないと断言

できる。
窓から覗く木々の上で羽を休む鳥達の朝を告げるささやかな囀り、人肌の温もりの大切さを教えてくれる布団、人々の身体と心を照らす太陽。
そして何よりも。昨晩疲弊していた俺を癒してくれた妖精さん。それが寝起きの気分を一掃させてくれており、安らかな寝顔を見るだけでどこまでも助長させてくれる。

昨晩の出来事が嘘みたいだな、と思いつつもそれは明らかに現実だ。夢じゃない、幻じゃない、幻想じゃない。
かぶりを振って思考すると思い出すのは二人の少女。一人は手品師、もう一人は武術の使い手。
明らかな誤解がありつつも俺は二人に剣を向けてしまった。それは反省すべき汚点だ。だがあれしか方法が無かった事も事実。少女達には悪い事をした。今度会ったらきちんと謝罪しなければ。

心の中で固く誓いつつ、出発の準備を整える。
学生である以上、特別な事がない限り平日は授業がある。俺もそれが当然だと思っている一人だ。学生の本分は何だ、と聞かれれば『学業』、『部活』、『青春』、『恋愛』……大体がこれに当たるだろう。最も、俺がこれらに当てはまるかと言えば頷き辛いが。
学業もそこそこ。帰宅部所属。青春なんて何処へやら。恋愛なんて程遠い。

重い溜息を吐く。先程とは打って変わっての心持ちだ。大きな枕の隣で天使の様な素顔で寝ている妖精さんがいなければ、気持ちはさらに降下していったに違いない。妖精さんにそっと感謝の意を唱

えながら昨晩から放置していたリュックに手をつける。
変態に間違えられる事は早々無いだろう。貴重な体験をしたと喜ぶべきか、昨晩の記憶は抹消すべき汚点だと猛省するべきか。

結局のところ、もうあんな体験はしないだろうと軽く捉えて昨晩の出来事は記憶の中で封しておく事にした。

だが、しかし。

どうやらまだ終わりでは無いようだ。

†††††††

学校に登校し授業を受け友人と雑談を交わし小テストに苦悩し最後はやはり談話して放課後へと至る。有意義とは言いづらいがそれでも楽しめた今日一日。このまま帰宅すれば何一つ変わらない、普段の一日となっていただろう。帰れば妖精さんが待っているかいないかの違いだが。
だがしかし。今日は寄り道をしなければならない。朝に封をしたのにもう開封しなければならない事に苦笑しながらも、俺は寄り道しなければならに理由を空気に零す。

ますたぁちゃんとちゃちゃまるぅさんとの誤解の最中に付けていた筈なのにいつの間にかどこかに行ってしまった代物。落としたか。それとも最初から持っていなかったのか。明らかに前者の選択肢が当たりなのだが、不安に思う。
もしかして、二人に素顔を見られたのではないのか、と。通報されたらどうしよう、という恐怖観念に囚われつつ事の発端の場所である世界樹広場で探す事にした。

落すとしたらここしかない。道中で落とすなんて気がつかない方がおかしい話だし。さっさと探し出して帰ろう。

「……さて。どこかな、と」

眼を凝らして辺りに向ける。誰も拾っていなければ見つかるだろうけど、落とした時は生憎の夜中。俺でさえ落とした場所は検討もつかず、探す時間が長引くに連れて不安が生まれる。
昨夜は誤解とは言え、無垢な少女に木刀を向けてしまった。きっと、それがいけなかったのだろう。天罰。因果応報。自業自得。額を指で押さえ陰鬱な気持ちを宥めた。

「……あの」

「ん……？」

耳朶を打つ聞き慣れない声。心内、首を傾げながら声の主へと顔を向けた。

「あの、もしかして、これ。貴方のですか？」

恐る恐る、と言った相手の顔を伺う様な声色。その瞳は迷いを持ちながらも芯の力強さを表していた。

そして、偶然か。世界樹を包む夕陽の鮮やかさがとても声の相手に似合っていた。その声相手は、女性で、服を見る限り中学生。今時の女子中学生の快活さを物語っている身体つき。何よりもその変わった瞳の色と、髪を結ぶ小さな鈴が可愛らしさを身に表していた。

息が詰まる。俺は人見知りだ。極度、ではないものの初対面の相手には戸惑ってしまう程であると自覚はしている。冷静な場合なら何とかなるが、冷静さを欠いている時、不意打ちを喰らった時、初対面の相手との距離が異様に近い時……どうしても緊張してしまう。

しかも相手は女性。俺の人生の殆どが女性に縁が無かった。昨夜の誤解を生んだ事件は偶々運が良かっただけだ。

俺と面と向かって視線を交える彼女に、俺は不覚にも固まってしまった。

「あの、大丈夫ですか？」

「う……ああ。大丈夫、だ」

そして、不覚にも。彼女が持っている仮面に眼が向くよりも先に、俺は彼女に眼が向いてしまった。
不覚、不覚だ。俺に怖がっていないか、顔は緊張で引き攣っていないか、羞恥で赤くなっていないか、不格好な笑みを浮かべていないか。
初対面ならば当然の如く考える筈が、それすら適わず。
何より、も。俺の気持ちを揺さぶった事態が起こった。

「これ、もしかして貴方のですか？　何か探しているようでしたし」

――――見惚れて、しまった。

女子中学生ならば明らかに年下。それなのに。視線は宙を舞い、唇は渇き、上手く言葉は発せず。次を待つ彼女の事に注意が向けられる時間等有りはせず、思考が混乱混濁困惑してしまう。

「……」

取りあえず、何か言わなければ。彷徨う視線の一瞬に彼女が入ると、どうやら彼女も何も言わない俺にどう接すれば良いか、迷っている事が窺える。

マズい。これは非常にマズいのでは？

下手してまた誤解を生んで変質者扱いされてしまう。そんな有り得てはならない未来を想像してしまった。昨夜の少女達も俺を見て怖がってしまった始末。目の前の彼女も怖い存在は苦手っぽいし、怪しまれて通報されたらお仕舞いだ。

脳内で充分なシミュレーションを繰り返す。そしておまじない。きっと大丈夫だと。きっと成功すると。きっと何とかなると。

恐れるモノは何もない。勇気を振り絞って、言葉を滲み出した。

「……ありがとう。本当に、ありがとう……！」

ありったけの想いを込めて。違和感の無い笑顔を浮かべて。彼女に感謝の意が届く事を祈りながら、成り行きに任せて仮面ごと彼女の手を握った。

†††††††

結果を言えば、誤解は免れた。彼女――――神楽坂　明日菜さんもどうやら朝の新聞配達のバイトの途中、この辺りを通ったところで拾ったらしい。このまま拾いもせず、無視もせず、持ち主が現れるのを待ち望みながら持っていた、と神楽坂さんは話してくれた。学校の時もちゃんと持っていてくれた、と思うと、彼女の人格の良さが判る。

それらを初対面にも関わらず親しげに話してくれた彼女に再度礼を言いながら、俺は缶コーヒー（ミルク入り）に口を付ける。神楽坂さんはジュースを。見つけてくれたお礼に――と飲み物を奢った。本当ならばもう少し良い物を準備すれば良いのだが時間がない。神楽坂さんも断っている様子だったが、そこは何とか拝み倒す。

結果、神楽坂さんも折れてくれて二人肩を並べて飲み物を片手に会話をしている。

初対面ならば人見知りをする俺だが、神楽坂さんの持ち前の明るさと人を好ませる笑顔、そして飽きさせない話術に引き込まれ、彼女と知り合えて良かった、と思えるまでになった。

「けど、良かったですね。あの、それって大切なモノ何ですか？」

「……ああ。見つかって良かったよ。無くした時はどうしようかと、思ったのでな」

頷きながら缶コーヒーに口を付ける。

この仮面、実家の両親が旅行先で買ったお土産らしく、そのお土産の一つとして送ってきた物だ。お土産と言うことなので、無碍にも出来ず持っていると愛着も湧く。今では壁に綺麗に飾る程。時々持ち歩く事もあるが、それが幸を成して昨夜は何とかなった――と思いたい。

神楽坂さんにもそんな切実な想いが届いたのか、苦笑を携えている。久しぶりに女性と話した、とは言え、俺も仮面が見つかって安

心しているのだろう。こうも流暢に話しているのは本当に久しぶりだ。
大抵は俺に対して一歩引いたり、この眼を怖がるからな。前髪で隠しているとは言え、この娘は見た筈。それなのにそれを面として出さないのは礼儀がなっている証拠。
俺としてもこうやって普通に接してくれるのは有り難く好感も持てる。

「……そう言えば、女子中学の噂を耳にしたのだが」

「噂、ですか？」

話も弾み（俺視点）、以前友人から訊いた噂を神楽坂さんも知っているか訊いてみたところ、

「子供……が、先生をやっている。と言うのだが」

「ブフッ！？」

それが神楽坂さんの答えなのか、景気良く口から吹き出した。何を、とは言わない。ただ俺としてはその噂が嘘なのだ、と神楽坂さんの反応から気付く事が出来た。
自分で言ってみたが、やはりあの噂はデマだったのだ。しかもその噂は随分前の物。神楽坂さんもそんな昔の噂を信じている人が居るとは思ってもみなかった様で、吹き出してしまったと見る。
咳き込む神楽坂さんにハンカチを渡しながら頭を下げた。

「……いや、すまない。忘れてくれ。場違い、だったな」

「ケホッ、ケホッ。……あ、ありがとうございます。こちらこそ、いきなりすみません」

どうやら神楽坂さんは気にしていない様子。愛想の良い笑みを浮かべている彼女に再度、謝罪をした。

「私だって信じたくはありませんでした。いきなり、突然ですよ？もう本当に嫌になって……ああ、愚痴なんて零しちゃってすみません」

「謝らなくて良い。……誰だって、信じたくない時はある」

この噂のせいで神楽坂さんにも何らかの被害が起こったらしい。可哀想に。俺もこんな人相と人見知りのせいでここまで生きるのに苦労したものだ。何度か引きこもろうと思った事もある。だが、そんな苦難も友人達の支えでそれを脱する事が出来た。

恐らく、神楽坂さんもそんな友人に恵まれているのだろう。だから彼女は強く、真っ直ぐに成長したんだ。

まるで自分の事の様に俺は喜んだ。

「……よく」

「え？」

「よく、ここまで……成長した、な」

歓喜喝采。友人が居る、と言うのは素晴らしい事だ。事実俺も何度も助けてもらった。きっとこれからも助けて貰い、助けていくに違いない。

だから神楽坂さんにも知ってほしい。友人の素晴らしさを。助け合いと言う事を。

「あの、それって、どういう意味なんですか？」

「……君は、これからも厳しい事、辛い事、苦しい事に直面するだろう。だからこそ、信じて欲しい。君の、大切なモノ。大切な、事を。それは絶対的な力で、何より———君を裏切らない」

今日、初対面の相手がこんな大それた事を言うのはおかしい。俺だって変だって思っている。だけど、神楽坂さんはそんな真意に気付いているのか真剣な眼差しで次を待っていた。

「……それは、一体」

「今は判らなくても構わない。初対面の相手にこんな戯言を吐かれたのなら尚更流して構わない。忘れても構わない。……だが、君を守ってくれる存在は、少しでも良い。気付いてあげる事、だ」

それは、実体験があったからこそ言える言葉。何よりも強く、支えてくれた存在に感謝しているから言える言葉。過ごした時間の少ない妖精さんだってそうだ。俺は妖精さんを助けたい。損得勘定抜きにして、助けたい。大切だからこそ、助けたい。

だって、それは。

———俺が、何よりもその事を理解(わか)っているから。

「……先輩はそれに気付く事が出来たんですか？」

茜色に焼けた空。風を凪ぐ優しい歌。耳朶打つ暖かい人の音色。心安らぐ鈴の声。

誤魔化す事を是としない後輩の視線に、俺は以前の自分を見ている様で苦笑を堪える事が出来なかった。

「———ああ。結局、遅過ぎた事だが、な」

麻帆良、と言う小さな世界を見下ろす世界樹を振り返って一瞥、俺はそのまま静かに口を閉じた。

†††††

居たたまれない空気の中、神楽坂さんは上辺他の笑みを浮かべて足早に帰って行った。一人佇む俺に残ったのは、後悔と羞恥。そして重い溜め息。

今思えば普通にお礼を言って二、三回会話して帰れば良いのに、まともに初対面の人と会話した事に感動して相手を考えずに話し、挙げ句の果てに調子に乗って説教染みた事を言ってしまった。

神楽坂さんにとってはたまったものではないだろう。何故、初対面の変な男から説教を受けなければならないのか、と今思っている筈だ。

最悪、最悪だ。

「……今更後悔するなんて、な。本当に、すまない」

神楽坂さんが既に居ないにも関わらず懺悔の念を抱く。時間を割いてくれて仮面の持ち主を待っていてくれた彼女に申し訳が付かない。彼女とは連絡先を交換していない。学校も分かれているし、会う事も少ない。だけど、もし、どこかで会う機会が有るのなら。素直に謝ろう。そして感謝しよう。

———久しぶりに貴女の様な人と話せて良かった、と。

「……帰るか。見ているのも、見られているのも趣味じゃないからな」

彼女が去って行った道を何時までも見る。往生際が悪いのは判っている。だからまるで、そんな雑念を払うかの様に頭を掻いた。
数分の名残惜しさに心が浸りつつ、仮面を持っていた鞄にしまい込み、次に考えるは夕食の事と妖精さん。きっとお腹を空かせて待っているに違いない。もしかしたら眼を回して倒れているのかも。
急いで帰らないと、待っている妖精さんに悪いから。

俺と相部屋の人は家庭の事情により引っ越しをしてしまい、現在俺一人のみの淋しい部屋。だけど妖精さんが来た事で、それは一気に賑やかとなった。それはとても有り難い事だ。元来人間は一人では生きてはいけない、と言う。俺も一人では生きていけない人間だと自負している。一人の日々は本当に寂しく、冷たく、悲しかった。だけどそんな日々も終わりだ。
胸中で待っていてくれる妖精さんに感謝の意を。

「……さて」

帰路に着こうと世界樹広場から離れる。
一歩、脚を踏み込もうとした時———僅かに、空気の感触が変わった。

「ふぉふぉふぉ、どうやらワシは最初から気付かれてようじゃのう」

「……」

固まる俺、絶句する俺、冷や汗が止まらない俺。思考が働かない俺。唾を飲み込む音が耳朶に大きく捉えられ、進もとした脚は大木の様に動く事はなくなった。
それも当然の作用と言えた。この声を俺は知っている。喩え俺が知らずとも、俺以外の麻帆良に居る全ての人間は彼を知っている。それ程彼は有名だ。有名過ぎた。

ギチギチと油の入れられてない機械の如く、ぎこちなく首を曲げる。視界が捉えたのは、世界樹を背景にして悠然と立つ声の主。その声は決して若くなくとも、その年数を踏んだ分の確かな威厳と言うものが微かに感じられた。
俺は彼とは親しくないし、この先会話する事も無いと思っていた。一介の学生たる身分である自分が、麻帆良の最高権力者である彼にこうして話掛けられる事なんて無いと思っていた。
自然と姿勢が正しくなり声の張りも確かなモノへとなっていく。前髪から覗く彼の姿に、俺は親に怒られた子供の様な気分にされていた。

「……近衛、近右衛門学園長」

声が、震えていないか心配だった。

「ふむ。ワシの名を覚えてくれるとは、の。この名故、学生達には覚えてもらえないとは思っていたが……」

眼先の老人が豊かに伸びた髭を撫でる。その髭は苦労した証か、それともこの広大な麻帆良に居る人間を纏めた証か。

「俺は、ここの学生ですよ。この学園都市を纏める偉大な学園長の名を……忘れる訳がありません」

「そうかそうか。それは有り難い事じゃ。すまぬの、急に声何ぞ掛けて」

「いえ……判っていたから答えたまで、ですから」

親しみを込めて、無理の無い笑みを浮かべながら答える。相手は見た目老人だが、彼は麻帆良の長だ。下手な事は言えないし出来ないし――――やらないが。それでも癇に障ったりした瞬間、俺の将来は真っ暗だ。

ここに学園長が居るのも息抜きか何かで散歩の途中だろう。そこで一人の俺を見つけて声を掛けた――――これが一番妥当な線だろう。

だから学園長は話掛けてきた。偶々、暇潰し、偶然、気分で、眼に着いたから、何となく。

「して、君は学業の方はどうかの？　きちんとやっているかね。部活だけ頑張ってはいかんぞ。何事も両立が肝心じゃからのう」

「……部活は、入っていません。勉強もそこそこですが、楽しんでやっていますよ」

「ふぉふぉふぉ。そうかそうか。何よりじゃ。して、突然じゃが、君はこの麻帆良をどう思うかね？　生徒としての意見を訊いてみたいのじゃがのう……？」

「……ここは、環境も良く生徒達が充分に活動出来る素晴らしい学園だと思います。部活も盛んで、留学生や多文化を受け入れる部分は何よりの特色かと。……言うなれば、麻帆良は、どんなモノも受け入れる、でしょうか」

言葉を区切る度に訪れる不安の波。決して止む事の無い恐れを抱いた鼓動。それは早く緊張から解いてくれ、と言う訴えを表現している事が判る。眼の前の老人に向かって笑みを浮かべると、俺は次なる行動へ移るべく思案する。

最悪、帰っても構わない。そんな虚言すら思い浮かんだ。それはいけない事なのに、無理だと言うことに気付いているのに。

だが俺は何かを恐れている。意味もなく、理由もなく、ただあるがままに。それは、確かな喩え。確信に至る道だった。

気付いているのに、答えを出さないのはそれを否定しているからか。

「なるほど、の。あいや判ったわい。貴重な意見ありがとうのう――八霧　響君」

「――――は、い」

詰まれた。逃げ道は、無い。

「それはそうと。響君はエヴァンジェリン、と言う名前に覚えはないかの？」

「……」

素直に謝ろうと思った。ビンゴォ！　と叫んだ自分が居た。頭を抱え絶望した俺が居た。

彼は昨夜の事件に気付いていたのだ。さすが、と言うべきか。きっとますたぁちゃん―――エヴァンジェリンちゃんが学園長に伝え、即刻に調べ上げて声を掛けた……これが真相だったのだ。

やはり、おかしいとは思った。用もなく俺に声を掛けるから最初は何事かと思ったが、昨夜の出来事の次の日だ。学園長もここの平和を守るため、自ら重い腰を上げたのだろう。

昨夜は仮面を落とした上に妖精さんが何度か俺の名前を言っていたから、それを糸口に調べ上げたに違いない。逃げても仕方がない。身体の中に充満する暗い思いと最悪の末路の考えを身に溜めて、甘んじて罰を受ける事を決意した。

あれは、俺が加害者でありエヴァンジェリンちゃんが被害者なのは一目瞭然。学園長も真偽を知るために散歩を装って声を掛けた――自嘲した。こんな考えに至る情け無い自分に。

「どうかしたかの？」

「……いえ……、エヴァンジェリン、さんの事ですね。はい、知っていますよ」

俺は全てを彼に話す事を決心した。逃げる事はなく、言い訳する事はなく、全てを話す。ただそれだけ。非があるのは俺なのだから仕方がない。エヴァンジェリンちゃんの心に深い傷を負わせた責任が、俺にはある。

視界が真っ暗になる程の立ち眩みに耐えながら口を開く。昨夜の出来事の全て、を。

話し終わった時に、彼女の安否を訊く事が出来る様に願いながら。

第五話　魔

最も欲しいモノは届かず、虚空に投げられ星となる。　願うならば、希望を全て焼き尽くせ。

最も拒絶したいモノはこの手に宿り、真夜中の草原は既に荒ぶる波と化し心は解き穿たれる。

戸惑う事が与えられても、自分の事は蔑ろ。もし相手から奪うのならば、全てを棄てて手に入れろ。

想う心は今一つ。
重う心は今一つ。

伸ばした掌には、未だ気付かず――――。

ネギ勘！　魔

今の気分を表すならば、泡が飽和している状態。
巨大化した泡は壊れる事を知らずただただ膨らみ続けるのみ。心の外壁が強固だとしても、心の中身は空虚。自分を騙し偽り嘘を並

べ歪に歪んだ精神を複雑に保ち続けていた。

それは明らかに脆く、建前。そんな強さは無情にも弱く。不確かな思いのみが募り、四肢に必要な力は入らず無駄な思考を繰り返す。

「……何をやっているんだ、私は」

窓から見える青空と忌々しい太陽と逆に――――エヴァンジェリンの表情は灰色の曇り空。

人肌の温もりを感じさせる自身のベッドに身を預け、嘆息を零す。既に制服を着込んでおり皺ができるが、そんな事片隅にすら置いてはいない。彼女の思考の大半が昨夜の出来事に囚われていた。瞼を閉じれば自然と始まる鮮明に刻まれた記憶。思いだせば出すほど精神は捕えられ、それは身体の自由にも及ぶ。

ただの記憶が少女を酷く執着させていた。

「何故、アイツは」

青年。同族であり同属であり同賊である自身と近しい存在。

何故同一も等しい存在がこの麻帆良で隠れ住んでいるのかはわからない。だが今まで独りだと思っていた心は彼の登場で辛くも揺さぶられていた。闇の魔法使いと恐れられていた魔女は、今や恋心に戸惑う少女の雰囲気を纏っていた。

彼の瞳は新月の如く純粋に昏く人を拒み、その芯は悪意、害意、敵意を持ち合わせ耐性の無い人間ならば、視線の重圧に耐えられない。

だがそれとは矛盾を孕み、一定の人間を引きつける。その事にエヴァンジェリンは気づいていた。芯の根幹は認められた者にしか判らない慈愛に満ち溢れている事に。闇色の皮を剥ぎ取ればその中身は眩し過ぎるモノに変わる事に。

眼を薄く開けば何も語らぬ天井。無粋ながらも横暴な怒りが募る。手の甲を額に乗せて、エヴァンジェリンは別れ際に放った青年をの言葉を思い出す。

口には出さず、ただ唇だけをその形に変えて。黒く汚れた底無し沼から救ってくれた青年の何気無い一言。

それは彼からすれば本当に何気無いのかもしれない。気紛れで口にした事をエヴァンジェリン自身が真に受けているだけ。だが、それでも――――、

「……またな」

恋に恋する可憐な少女の如く、呟いた。頬は僅かに上気しており彼女は自分が彼が最後に口にした言葉を出していた事すら気付いてはいない。

約六百年。その年数を生き抜き、闇を識り光を憶えた。純粋な世界を知らぬ少女は世界を恨み、何も知らない自分を呪い魔法使いとなった。

何時の頃か闇に生きるしかなかった少女は一度、光を見た。それは彼女にしてみれば初めてな事で感動して嬉しくて。とても、心地

の好いモノだった。

だが、光は彼女を受け入れず。交わした約束すら果たせない彼に少女は失望の念を抱く。心の底では愚直にも信じた莫迦がいたが――彼の死亡を訊いた時、少女は光を諦め闇に手を伸ばす。

掴めぬ光（きぼう）は不要、ならば感じられる闇（あした）に生きよう。

そう。純粋に歪んだ思想は少女を肉体を、精神を強くさせ全てを払拭させる力を手に入れた。

喩え身を縛られた現状だとしても、鎖が途切れれば少女は孤独に生きようと決意していた。

「……アイツが現れるまでは、な」

独白する様に口から洩れ出た言葉は、陽の光に柔らかく溶けていく。身を縛り付ける頑丈な鎖が腐食して自由を得られる感覚が、青年を思い出す度に染みていく。

顔が熱いのが判った。ただ、何故熱いのかは今のエヴァンジェリンには判らなかった。青年を思い出す度に光を見た時の感覚が再現されていく事に気付けずに。

もう一度会いたい。今はそれだけ。

他人に興味が湧いたのは何年振りかと、自身を嘲ながら興味を抱かせた青年。確か、名前は……ヒビキ。

「ヒビキ、ヒビキ……ヒビキ。アイツの名前は、ヒビキ」

譫言の様に戯言の様に狂言の様に虚言の様に箴言の様に閑言の様に。

蕩けきった表情で何度も繰り返す淡い言葉。
もう一度会えば、この感情が判る。もう一度会えば、興味が湧いた理由が判る。もう一度会えば、ヒビキが放った「またな」の真実が判る。

カチリ、と。歯車が動いた音がした。暖炉に火が灯った様に沸々と炎の意志が生まれる。怠けを司っていた身体がまるで嘘みたいに軽くなった。頬の赤みは消え、六百年を生きた瞳は鋭さを思い出し何時も通りの邪悪な、皮肉気な笑みが浮かぶ。
ベッドから飛び降り朝食の準備をしているだろう従順な従者へと駆けていく。善は急げ。階段を下りる途中、滑って転んで額を打ち涙目ながらも行動へ移す。自分の最善なる行動。決めた意思は固く、玩具を親に取り上げられた児童の如く、感傷を受けていたエヴァンジェリンは既に存在せず。

「茶々丸！　朝食は抜きだ！　私は先に行く！　おにぎりでも握っておいてくれ！」

「あの、マスター。まだ登校の時間ではありませんが、どこか行く予定があるのですか？」

理由は訊かず即座におにぎりを握り始める茶々丸の姿はまるで従者の鏡。昨夜から肩を落として気分を害していた主の打って変わった様子に胸中で安堵する。そんな従者の心内を知らず、外へと続く扉を半ば開けつつ茶々丸へ振り向いて答える。

嬉々として、妖しい笑みを持って。それは、闇の魔法使いの復活を確信させる程に。

「アイツに、ヒビキに会うために。ならばこちらから会うまでさ。学園の生徒を探すなら生徒をより知っている奴に訊けば良いだけの事。私は……決して諦めない！」

陽光が穢れを知らぬと錯覚させる少女の金髪を輝かせる。その姿は、闇の魔法使いではなく、見る人から見れば天使の様な姿だった。

†††††††

その日も何時もと変わらぬ朝。厚手の服で寒さを防ぎ、白い吐息が気温を図らずもとも察してくれる。冬の季節は去ったが早朝は未だに冬を著しく保っていた。

脇に抱えていた新聞の束も既に無く、一日の始まりとも言えるアルバイトを終えた神楽坂　明日菜は背伸びをして身体をほぐす。とある事情よりこうして新聞配達を行っている訳だが中学生の身なの

にも関わらず彼女は決してそれを苦だとは思わなかった。

慣れたからなのか。当たり前となってしまった今では知る由も無い事だが、彼女は一日のスケジュールに組み込まれているこれに関しては勉強よりも楽しさを覚える事ができた。勉強嫌いが祟ったのか、それとも身体を動かす事が元来から好きだったからなのか。それも理由に入るのだろうが、

「……はー。今日も良い天気になりそうね」

地平線から生まれ出る太陽を世界樹広場から見るのが、何時の間にか好きになっていた自分がいた。

「さてと。んじゃ帰って二度寝するか……。あのバカ、また私のベッドに入ってこないでしょうね……？」

数ヶ月前から同居し始めた厄介者に対して嘆息を零しつつ、帰路に着こうとするとふと地面に注視する物があった。

疑問を浮かべながらソレに手を取り上下左右からを眺める。手に良く馴染むのは材質が良いからなのか、興味本位でソレを顔に被してみる。全く違和感を覚えないソレに明日菜は感嘆の息を洩らす。

ソレを見つけてから数分後、中指の第二関節で軽く叩きながら漸くソレの感想を口にした。

「何でこんな所にお面があるのかしら？」

伸びた思考の糸は回答へ辿り着かず、頭を使うより身体を使った方が得意な彼女にとっては知恵熱が出る要因になった。

別にこれに思い入れがある訳ではない。これは初めて見た。自分が勝手に持ち出すよりもここに置いとけば持ち主がやがて探しに来るだろう。そう思った。

だが。手放すには今一つ理由が足りなかった。本心では捨て置く事を拒んでいる様にも感じてしまう。仮面に触れている指一つ一つが吸盤の様になって離れない。何故だろう、不自然に興味が湧いた。

「きっと持ち主が探しに来るわよね。うん、そうよ、そうに決まっている。私が持っていたら持ち主の人だって見つける時に困るだろうし。

あー、やめやめ。もう、何でこんな事で悩まなくちゃいけないの？

……行こう」

苦い顔を浮かべながら明日菜は不意にこの場を去る。まだ二度寝出来る時間だ。朝から身体を動かした所で眠い。

一人で独り言。何だか身体を妙な感覚が襲ったが吐息と一緒に拭い去る。仮面は、言葉とは裏腹にその手に掴んだまま。明日菜は気づかない。妙な感覚は仮面を見た時から始まっていた事に。その感覚は、身に覚えのある懐かしさから去来している事に気づかない。

———まだ、気づかない。

†††††††

結局。勝手に仮面を持ち帰って勝手に持ち込んで勝手に持つ事にして勝手に持つ事に決めて勝手に持って行った事に後悔して勝手に持ってしまった事を開き直って勝手に持った事をクラスメイトには内緒にして。

夕方までそうして過ごした。他意は無い。強いて言うならば、持ち主がどんな人なのか興味を持ったからなのかもしれない。

一人世界樹を背景にベンチに腰かける。まるで反抗期を表した鋭い瞳には何も感情は映らない。別に明日菜自身が感情を表に出さないのではなく、来るか判らない持ち主に対して思う事が無かった。興味は湧いた。ただそれだけ。彼女の大部分は補習が無かった事に安堵している。それに伴って仮面の持ち主がどんな人物なのか一人想像に耽る。

「変な人じゃ無いといいな……あれ？」

「……さて。どこかな、と」

元より行動型の彼女では大した結果に行き着く訳がない。想像する時間を与えず、仮面の持ち主は現れた。

前髪の長い中肉中背の青年。地面を注視しながら何かを探す姿は、彼から焦燥感が滲み出ている。だから深く考えずとも理解した。神楽坂明日菜は行動派だ。故に十秒も観察せずに身を寄せていたベン

チから飛び上がる。
オッドアイに力が宿る。全身から溢れる感覚が砂漠で水を得た魚の如く、鋭敏に反応した。明日菜自身はこの感覚に気づかないだろうが、後々気づく事になる。

故に警戒心の微塵もなく、初対面の相手にしてしまう遠慮の欠片もなく。
軽い足取りで向かう女子中学生。利き手には仮面。緊張はない。しかし相手に警戒を与えさせない声音で青年に投げかける。無意識に明日菜はそれをやってのけた。遠慮がない、と言えば終幕だがそれこそが彼女の美点であり利点であり機転が利くところ。

「……あの」

「ん……？」

「あの、もしかして、これ。貴方のですか？」

青年が明日菜に気がつく。表情は読めないが疑問を抱いていると感じた明日菜は仮面をゆっくりと青年の視界に収める。再度尋ねると狼狽の様子。青年がこの仮面の持ち主ならば――――と、思ったがどうやら杞憂に過ぎなかった。

「……」

（え……？）

何故ならそれは。神楽坂明日菜にとって、驚愕に値する出来事だから。これから始まる驚愕の一つだから。その刹那、明日菜は眼を僅かに見開いた。

眼前に佇む無表情の青年。無表情を決め込む青年は明日菜が反応を起こす前に、仮面を持っている手ごと掴む。その手は多少なり震えており、異性とあまり触れ合う事の少ない女子中に通っている彼女にとって――――明日菜にとって。

「……ありがとう。本当に、ありがとう……！」

ここまで異性に、真摯に感謝されたのは久しぶりかもしれない。変な人と思いつつ、異性にここまでお礼を言われて照れない訳がなかった。

――――どこか遠い遠い記憶の海原。倒壊した残滓の音色。思い出したくても、思い出せない。憶えたくても憶えられない。識りたくても識リ得ない。風化した城の如く、前世の跡形もない塵芥。

神楽坂明日菜の脳裏をノイズが奔る。幼くあどけない小さな頃の自分。麻帆良ではない、土地に居た頃の自分。人として――――見られなかった時の自、分。

――――私は、こ、の人――――を知ってい……る……。

†††††††

「けど、良かったですね。あの、それって大切なモノ何ですか？」

何気ない疑問も、彼にしてみればとても大事な質問だった。空を仰ぎ、缶コーヒーに口を付ける姿はとてもではないが、同年代には見えずその不可思議な雰囲気が意中の男性に酷似していた。

憧憬に思いを馳せ、届く事のない過去に縋り、しかし区切りを付け前を向こうと進んで行く姿。

少なくとも、明日菜にはそんな幻想が視得てしまった。

「……ああ。見つかって良かったよ。無くした時はどうしようかと、思ったのでな」

安堵を孕んだ口調。初対面にも関わらず、人を言葉のみで落ち着かせるのはある意味では才能の一つであろう。明日菜自身も固くならず、緊張せずに青年――――響の言葉を冗談で受けず真に受けた。

思えば。仮面を渡し終え帰宅しようとした明日菜を響が引き止めた事から始まった。数度、断ったのは言うまでもなく。それでも尚、礼がしたいと言う響に明日菜が折れ、ベンチ一つに腰を落とし会話を交えている。

律儀な人だ、と手元の缶ジュースに視線を落とし苦笑した。

（まあ、私がやった事は間違いじゃなかった訳だし、ここは素直に受け取った方がいいかな）

缶ジュースに口を付け、喉を潤す。いつもより美味しく感じ取れた。

「……そう言えば、女子中学の噂を耳にしたのだが」

「噂、ですか？」

視線を響に移す。喉を景気良く鳴らし、彼の伺う様な声色に胸中で首を傾げた。噂、と訊かれて即座に頭に浮かんだのが小さな背丈の子供先生。眉を思わず顰めるが、それも一瞬。

そんな事はない、と高をくくり彼の言葉を待ち受ける。

「子供……が、先生をやっている。と言うのだが」

「ブフッ！？」

予感的中。吹き出し咳き込むとハンカチを渡される。さり気ない配慮に感謝しつつ、羞恥で赤く染め上がった頬を隠しながら頭を下げた。

「……いや、すまない。忘れてくれ。場違い、だったな」

「ケホッ、ケホッ。……あ、ありがとうございます。こちらこそ、いきなりすみません」

響の苦笑混じりの口調に同情も含まれている事に明日菜は鋭い勘で気がついた。追求されなくて良かった、と思う。されれば、湯水の如く口から愚痴が流れていくだろうから。

だがそれでも。明日菜は子供先生がどれほど稀有な存在だと思い知った。噂だから半信半疑の者も多いだろうが、麻帆良の生徒は元よりお祭り好き噂好き遊び好きの傾向がある。麻帆良祭等の全体イベントで子供先生の噂が本当ならどうなるか……考えるだけで気が落ちる。

それも察してくれたのか、優しく慰める響。年上然とした包容力は、少しずつだが明日菜の心の疲れを癒やしてくれた。彼は諭す様に、口を開く。

「……よく」

「え？」

「よく、ここまで……成長した、な」

まるで子の成長を喜ぶ親の如く。そのままの意味を放つソレには、

確信めいた何かが裏付けされていた。
一瞬、言われた事に理解出来ず顔を響に向ける。前髪が長く彼の眼が何を想っているのか判らなかったが口元は柔らかな弧を描いている。　明日菜は、その意を知りたくてもう一度尋ねた。

「……君は、これからも厳しい事、辛い事、苦しい事に直面するだろう。だからこそ、信じて欲しい。君の、大切なモノ。大切な、事を。それは絶対的な力で、何より――――君を裏切らない」

――――困った事があったなら何時でも話してみなさい。

「……それは、一体」

「今は判らなくても構わない。初対面の相手にこんな戯言を吐かれたのなら尚更流して構わない。忘れても構わない。……だが、君を守ってくれる存在は、少しでも良い。気付いてあげる事、だ」

――――俺は、君を助けてあげたいから。

そんな幻聴が、耳朶を打つ。不安定で不可思議な、だが彼にとってそれを伝える事は不可能ではなく不可欠で、流れてきた想いは全身を心地好く嬉々とした感情が溢れていく。
ふと抑えきれなくなったのか、耳まで赤くなる。理解し辛い感情に困惑しつつ、嫌ではない、と心の底の自分が告げていた。

彼も明日菜に伝わった事が嬉しいのか、頬は緩んでいる。苦笑ではなく、微笑。
それを見た明日菜はさらに羞恥心に駆られ、話題を変えるため、話を反らすため、彼にも尋ねる。あなたはそれに気付く事は出来たのか、と。

その答えは、微笑から苦笑へと変わった。
まるで、悔いた事を噛み締める様に。後悔に懺悔。罪と罰。幸福と不幸。過去と現在。
夕焼けの空が彼を俯瞰で赦しているかの様に幻想的な風景だった。

ポツリ、と何気なく。静かに。彼は呟く。

「———ああ。結局、遅過ぎた事だが、な」

その意味を理解し、意思を訊くところまで今の明日菜には彼自信を知らな過ぎた。

†††††

急に彼が判らなくなった、と言ってもいいのだろうか。明日菜は

自問自答を繰り返す。育ての親でもある、元担任から貰った鈴のリボンが涼しげに鳴るが、ざわめく心がそれを訊かせない。
可笑しくなったのは彼が呟いた後だ。変な人、だとは何となく判っていたがあそこから急に判らなくなってしまった。

同世代の普通の人かと思ったが、自分より年上の雰囲気を醸し出し諭す口調で言うものだから、明日菜には彼が判らなくなった。
普通かと思えば変な人。同世代かと思いきや、大人の様な振る舞い。初対面かと思いきやどこかで会った様な錯覚を覚えて。

「んー、本当に初めてだったのかしら。んー……」

どんなに頭の中を探っても彼と以前会った記憶は無く、無駄に終わり溜め息一つ。
やはり判らない。初対面なら彼を判らないのは無理も無いがどこか会った様な事がある気がしたから仕方がない。
結局、逃げる様に彼と別れたが得られたモノは再会を匂わせる初対面。頭を使う事に慣れてはいない明日菜はそこで切り上げ、自分を待っているルームメイトと同居人、ペット一匹の下へと駆け出した。

浮かぶ顔は思った以上に晴れず、元気が取り柄の彼女にしては予想以上の空元気。

「……あ」

一つ。思った。

「先輩のあの感じ。偶にネギが見せる子供とは思えない表情と似ていたわね」

明日菜がソレを呟いたと同時刻。麻帆良の長と青年が邂逅する。

「どうかしたかの？」

「……いえ……、エヴァンジェリン、さんの事ですね。知っていますよ」

「そうかそうか。なら、訊かせてくれんかの？」

「構いませんよ。……ですが」

「ん？」

「彼女と。———エヴァンジェリンさんとの面会を許可していただきたいです」

物語は静かに緩やかに暖かに動きをみせる。

まだ、始まったばかり———。

第六話　聖

朝の日差しに身を引き締め。
昼の穏やかさに心落ち着かせ。
夜の静けさに安らぎを憶える。

太陽におはよう。
月にこんばんは。
あなたにこんにちは。

表の世界に別れの手を振り。
裏の世界に出逢いの手を振る。

これから紡ぐは最悪の戦場物語、最善の抗い物語、最初の再会物語、最後の再開物語。
覚悟は持ち得ず気迫は万全。不安に満ちて安堵に満ちる。口を開けば怯えが混じり眼を見遣れば羞恥が走る。

それでも。止まる事は出来ない。佇む事なんて許せない。何もしないなんて有り得ない。出来ないなんて言わせない。逃げるなんて選択肢与えさせない。負ける理由を作らせない。
言葉を放て、一字一句間違えず。真摯な気持ちを込めて言え。

――――ごめんなさい。

ネギ勘！　聖

これまでの経緯を簡潔にかつなるべく理解しやすく妖精さんに伝えた時、彼女の表情に驚きの色が混じる。

まあ、それも当然だろう。俺だって何故こんな事になったのか未だに解決の道が見つからないのだから。嘆息を一つ。朝食に作った目玉焼きを口にして彼女に視線を移す。

「どど、どうするんですか！　あの、あのあの！　うぅ〜！」

「……」

案の定、と言うべきか。彼女も混乱していた。口周りをご飯粒で汚しつつ眼を回しながら可愛く唸る妖精さん。胸中で負担をかけてしまった事に謝りつつ、俺も昨日の出来事を思い出す。

根本的な始まりと言えば、俺がエヴァンジェリンなる少女に誤解とはいえ戦闘まがいの行ってしまった事か。それがどういう経緯を伝ったのかは理解の範疇を超えているので判らないが、とてもマズ

い人物の耳に入ってしまった。
麻帆良の最高権力者において学園の長。近衛近右衛門。その人からエヴァンジェリン———さんの事を尋ねられた刹那、俺は視界が暗くなった。

理由は言わずもがな。余程エヴァンジェリンさんの心に傷を与えてしまったのだろう。心臓を鷲掴みされた感覚、息苦しさを覚えながら俺とエヴァンジェリンさんの馴れ初めを話し、刑を受け入れる決意をした。今でもその気持ちは変わらない。
だけど。だけども。だけれども。
俺は彼女に会いたかった。

謝って済む話ではない事は重々承知している。これは俺の我が儘で自己完結したい自己中心的な自己主張。ただの戯言だった。
けど、そんな俺のちっぽけな気持ちさえも学園長は寛容かつ寛大な心で受け入れた。
有り難かった。泣きそうになった。感謝の意を表した。彼が菩薩に見えた。錯覚だった。
悩んだって仕方がない。どちらにせよ、機会が出来たんだ。俺がやる事は既に視得ている。やるしかない、やるんだ。

慌てる妖精さんの頭を優しく絹を触る様に触れる。この娘は俺を怖がっているにも関わらず一緒に居てくれる稀有な存在。元よりこの娘自体が稀有過ぎる存在だが、共に過ごした時間は短くとも俺は彼女を居てくれた事に感謝する。助かった事……嬉しかった事があったのだから。

「ふぇ……ヒビキ、さん？」

「……昨夜に言わなくてすまない。これは、俺だけが抱えればいい問題と思っていたから」

「そ、そんな事！　謝らなくていいです！　それはヒビキさんの考えですから、キョウ何かが口出し出来る訳がないです……えへへ、気にしないでくださいです」

己の気持ちを無理矢理押し込めた自虐的な笑み。彼女の視線の先の俺は、一体どんな顔をしているのだろうか。

惨めだ、俺は。幽霊になってまでこの世に留まる彼女にこんな表情をさせるなんて。少なくともこんな事、望んですらいなかった。

エヴァンジェリンさん、と言う純粋無垢な少女の心を蹂躙し。キョウ、と名付けた妖精（ゆうれい）さんの意志を傷付け。俺は自分の意思を無理矢理振り回すだけ。何も訊いておらず、何も学習せず。

だから、こんな状況に陥ったのだろう。自分で足を動かせず、他人に背中を押してもらい行動に移す。何て受動的。アンチ行動的、リバース積極的だ。

先日、学園長に出会わなければおそらくエヴァンジェリンさんに謝罪をしなかったかもしれない。俺がここを出るまで隠れて過ごし、彼女と出会わぬために身を小さくさせて。何て惨めだ。

だからこれは良い機会だ。この機会を有効に活用し、今の俺を変えてやる。元より人見知り。どうせ怖がるのだから、怖いモノなん

て既にない。
やる。やるぞ。俺はやってやる。自分のために、妖精さんのために、エヴァンジェリンさんのために！

「……キョウ」

「はい？」

君には、迷惑が掛かるかもしれない。だけど――――、

「――――ついてきてくれるか？」

頭を撫でれば撫でる程、小さな身体の幽霊さんから元気を与えられている気がした。やる気に満ちた表情、何かを決心した顔付き。それだけを見ていれば俺も元気が出てくるし、無粋な言葉等、不必要。
笑みが、自然と込み上げてきた。

「そんなの当たり前です！　わたしは、キョウのマイスターはヒビキさん一人なんですから！」

「……そうだな」

妖精さんの後ろの壁に掛けられた時計を見遣ると良い時刻。食べ終えた食器を片手に立ち上がると共に、空いた手を強く握り締めた。

「そろそろ頃合いだ。……行くぞ」

「はい、です！」

†††††††

以前、友人から訊いた情報ではここ麻帆良では人知れず人助けをする正義の味方然として者がいるらしい。彼らは皆、人前に出る事を避け素性を隠し影の如く気配を消しこの麻帆良の平和を守っているのだそうだ。

その噂を耳にした時には半信半疑。いや、三信七疑だろうか。確かにこの学園都市で目立った事件が起きた話は訊かない。精々イベントの際に無茶をやらかす人が出るくらいだ。治安が良いのは良い事だがそれらを正義の味方様方が創っているとなると、案外ここもそんなモノなんだろうなぁ――――と、ぼやいてみる。

何だかんだで守られている側の俺としては有り難い話ではあるし、お礼を言いたいのだが無償の正義を届ける彼らは一体何を活力にして行動しているのだろうか。

当たり前の事を当たり前の様にやってのける。出来そうで出来ない事だ。誰しもが挫折諦めがやってくるだろうし、損得勘定で動く人の方がよっぽど多いだろう。

何しろ人間というヤツはそんな考えが出来る唯一の存在だから。

考える事は素晴らしい、と思える人はどれだけいるだろうか。最早考える事が当たり前だと思ってしまっている自分が居て、嘆かわしい。

「……」

そんな俺も。決心した俺も、挫折諦めの念を捨て置き眼の前あるがままの現実を認める事にしよう。諦めが肝心、とは素晴らしい言葉だ。どこか矛盾を感じるがそれは今夜寝る前でも思い返せば済む話。

さて、どうするべきか。前日、学園長から指定された場所――――麻帆良女子中等部行きの駅前に佇む名の知れた広域指導員が一人。

「さあ着いたよ。ここが麻帆良女子中等部。まあ、君には縁が無かった場所だったとども言うかな。……その、大丈夫かい？」

「……気にしないでください。烏が飛び回っているだけですから」

そこから歩いて幾許か。眼前に堂々と建てられたら洋風の校舎。彼の言った通り、まず俺の様な男子学生には縁が無い場所なのは確か。緊張と未知の場所への好奇心と羞恥心で焦りが生まれ、それらを隠す様に話を反らしてみたが空振りに終わった。

場を和ませるための笑みを浮かべ彼――――デスメガネこと、無敵の広域指導員こと、高畑教諭が俺をここまで案内してくれた。

不良の間でも「奴には手を出すな」と言われる程の実力者。柔和な笑みを浮かべ両手をポケットに手を入れ非暴力宣言をしている様

に見えるが、有無を言わせぬ速さで不良を黙らせる強者。恐ろしいのは、何時倒したのかが判らないところ。本当にいつの間にか高畑教諭は不良を倒してしまっているのだから恐ろしい。

「烏、かい？　んー、そう言えばこの辺りで烏を見た事はないな。ここは綺麗だしね」

「……見間違いかもしれません。烏ではありませんでしたね。あれは……いや、なんでもありません」

「ハハハ。何にせよ、悪かったね。ここまで連れてきちゃって。でも、君も男なら少しは得したかな」

ほんの冗談もきちんと返してくれる教諭に人格の良さが判る。思わず眼を反らしてしまったがそれでも彼は優しさの籠もった瞳で俺を見詰めていた。話の反らし方が下手な自分に絶望した。

それから数分の後。俺は眼前の扉を前に軽く吐息を零した。

「……マイスター？」

「静かに」

懐に隠れている妖精さんが声をかけてきた。一言返す。

「ん？　何か言ったかい？」

いえ、何も。

ぎこちなさを感じる笑みを高畑教諭に向ける。

「……そうかい。じゃあ、入るよ」

ノックを二回。返ってくる声。開かれる扉。ぎこちない歩み。煩い心臓の音。走る冷や汗。早まるな呼吸音。渇く唇と喉。どうやら、意識が、曖昧に、単調に、疎らに――――。

「学園長。彼をお連れしましたよ」

自分の使命を全う出来た安堵を洩らす高畑教諭。

「ごくろうじゃの、高畑君。――――そして、ようこそ。八霧響君」

悠然と、豪華な長椅子に座る麻帆良学園長。

「……ああ、そうか」

後から考えてみれば、礼儀のなっていない返事をしてしまった俺。

確実に、詰んだと、思いました。

「――――ッ」

「マイスター！」

耳朶を打つ妖精さんの声が俺の身体に活力を与えた。緊張で固まった身体は動ける事を思い出し四肢の先まで神経が行き渡る。
だが、油断していたのだろう。カクン、と簡単に膝が折れ前屈みに倒れそうになる。眼を前へと見遣れば驚きで眼を見開く大人二人。妖精さんがバレただろうがその前にバランスの崩れた身体を戻そうと、脚に力を込め利き手の右を前へと伸ばす。

「くっ！」

「――――間に合え！」

踏み込み飛んだ脚は直線へ進み、眼の前の学園長の机に支えてもらおう。自然に出た言葉に高畑教諭が反応したのを視界の隅に捉え、そのまま――――いてっ！？

「ッ――あぁ！」

何か変な物に右手がぶつかったと思いきや、そのまま身体が一回転。両手を広がった状態で回ると何故かまた右手に違和感が。奇声を挙げてしまった羞恥よりも痛みが上まり口元を歪める。
何が起こったのか判らないがこんな姿を目上の人に見せてしまうのはいけない。何しろ相手は麻帆良の長とデスメガネ。確認するよりも前に急いで扉の前まで下がる。

「高畑君、大丈夫かの」

「……ええ。ですが、やはり彼は」

「……おそらく、のぅ。やれやれ。エヴァンジェリンも大変な役目を押し付けた訳もんじゃ。老人を労る気持ちを持って欲しいわい」

……やばい。確実に眼を付けられた。口下手だからせめて態度だけでも、と思ったがまさかの序盤で目論見は崩れてしまった。額から嫌な汗が流れる。

きっと二人は俺の処罰を決めているに違いない。少女暴行に教師に対する態度。落ち着け俺。落ち着け。早く、早く謝罪――――を！？

「マイスターヒビキを傷付ける人は許さないですー！　まずはこのキョウが相手になるですー！」

「待て、出てくるな！」

妖精さんはまるで盾にでもなるかの様に両手両脚を開いて懐から飛び出した。不意を突かれて慌てて叫んでしまったが、妖精さんは妖精に見えるけど正体は幽霊。普通の人が見える訳がないのだ。エヴァンジェリンさんは手品師だったから。俺は運が良かったから。だが見えていない学園長と高畑教諭から見れば奇声を発した怪しい男。

「……」

視線は学園長、高畑教諭、妖精さんを捉えているにも関わらず次に繋がる行動が判らない。どうすればいい。どうすればいいんだ。答えが見つからない。思考が一方向に捕らわれている。またの名を、負の連鎖。

「ヒビキ、さん……？」

「……」

考えろ。この状況を安全に安心して安定した方法で脱出脱却脱兎できる作戦を。

底無し沼に嵌り身動きがとれない状態。重力に支配されていた身体が宇宙に投げ出された感覚。嫌な結末だけが脳裏に延々と映し出される。

助けを求められない状況の中、妖精さんの声が涼しく耳に流れていった。

「学園長。ここは……」

「ウム。そうじゃな。……響君。儂等が悪かった。だからそろそろ静まってくれないかのう。身体が軋むわい」

両手を挙げて重苦しく息を吐く学園長。ぷつり、と緊張の糸が切れた音がした。
間抜けな顔をしている自分が簡単に想像出来る。学園長から高畑教諭に顔を向けると、苦笑を携え頷いている。
取り敢えず、最悪の展開は免れたのか。小さく吐息を零すと同時に妖精さんが顔まで近付いてきた。瞳が潤んでいる所から見ると、彼女も俺と同じ気持ちだったのか。頬が弛むのが抑えられない。少し、嬉しくなった。

「それに、そこの可愛い娘さんにも手を出さんわい」

「……ん？」

大事な事を訊いた気がしたぞ。

「学園長。もしかして、あなたは……」

「ふぉふぉふぉ。判っておる。君の事情もその娘の正体ものぅ」

「こんな真似をしてしまってすまない。どうしても君の真意を知りたくて、ね。大丈夫。僕達は味方だよ」

肩に積まれた重荷が取れた気がした。軽量感を感じるのは否めない。自然と妖精さんと向き合わせて、数回瞼を瞬かせた。
彼らも、手品師であったエヴァンジェリンさんと同じく妖精さんが視得ていた。その現実が受け入られて息を吐く。

「……ありがとうございます。その言葉だけで、充分です」

「何、儂等も君を煽らせてしまったからのぅ。感謝される覚え何ぞなかろうよ」

「ごめんね。少し試す様な事をしちゃって。ここまでの道のりで君が警戒していた事に気付いてね。少し乱暴過ぎたけど計らせてもらったよ」

感謝したつもりが何故か謝られてしまった。はて、教諭方は謝る様な事をしたのだろうか。間違い無く俺が原因で起こった筈なのに。

取り敢えず、彼等は妖精さんが視得ている事が判っただけでも僥倖だ。それにもう一つ判った事がある。この二人はエヴァンジェリンさんの手品の師匠だったんだ。

「……エヴァンジェリン、さんを襲う様な真似をしてしまった事に変わりはありません。教諭方にとってどれほど彼女が大事な人物なのかは承知です」

だから誰よりも早く彼女の違和感に気付いたのだろう。一般生徒の俺に声を掛けてきたのも頷ける。きっと内心では腹腸が煮え繰り返る様な気持ちで一杯に違いない。

妖精さんを抱き寄せて、立派に生えた顎髭を撫でる麻帆良の長に改めて敬意を払う。

「……自分は止める事が出来ませんでした。それを出来た筈なのに、

現状に甘えて自分に甘えてしたくなかった事を……暴力を振るってしまった。ここでそんな事をしないと、決めていたのに。……流された、自分がいました」

「……ふむ」

何かに縋りつくかの様に、普段の自分には考えられない程口が動いた。懺悔と後悔と苦悩に固められたら言葉は少しずつ己の精神を削っていく。

良い歳なのに、自分よりも年下。しかも少女に木刀何ぞ向けてしまった。実家ではよくチャンバラ等でよく竹刀や木刀を使ってはいたが、ここは実家ではなく、ここは教育機関だ。自分の慣れ親しんだ故郷じゃない。

自分なりにけじめを付け、謝罪をしに行ったと思ったら逆に謝られるとは。これも少女の師匠にとっては修行の一環だと言うのか。……いや、言わないだろう。

言い訳とも取れる俺の言葉を静かに、何かを定め思案する姿にも威風を感じた。そして、閉じていた口をゆっくりと開く。

「少し訊きたい事があるんじゃが、良いかの？　二つだけ、答えてくれるだけでいいんじゃが」

元より、自分に拒否権があるとは思ってはいない。即答気味に首を縦に振る。

「ここ、麻帆良に来た理由とそこの精霊は君にとって何なのか。そ

れが訊きたい」

ゆっくりと吐き出された質疑は口が閉じられた途端、俺の身体を重い負荷が襲った。嘘は並べられず、虚言で返す事は出来ず、偽る事は皆無。

何人もの人間を視てきたであろう彗眼が今、俺だけに向けられていた。

「……マイスター」

「……」

表情を見ずとも明らかに不安の色を染めた妖精の瞳が俺に向けられていた事が判る。彼女も僅か数日と経たずに自分の姿を見る事が出来る人間がたくさんいた、と判ったのだ。嬉しさもあるだろう。だけど同時に焦燥もあったのかもしれない。

視得ていると言う事はその存在を認められている、ということ。

視得ていると言う事は拒絶もする事が出来る、ということ。

視線の重圧がリアルに過負荷を感じさせた。額から汗が浮かぶ。暑いし、嫌な感じだし、重い。学園長は俺をもう一度試しているのか。あの眼は心の壁を意味なさない力を持っていた。

妖精さんの声を訊いただけで涼しさを覚える。癒されている、という事なのだろうか。

負抜けている自分に諦めにも似た意味を込めて笑みをつくる。全く、少しは自分の力で何とかしないものか。

だけど、そんな俺でも見てくれる存在はいた。一緒に居た時間なんて関係ない。時間よりも思い。どれだけ相手を思っているのかが問題なんだ。

———この娘はそれを誰よりも判っている。

「わたしのマスターはヒビキさん、ただ一人だけです。どんな事があっても、どんな事が起きても、どんな事になっても、一人になんて絶対にさせません。———だって、わたしのただ一人のマイスターなのですから」

「……」

ありがとう。そう心の中で呟いた。

「自分を変えるために、ここに来ました。我が儘な自分とはもう別れて、素直に謝る事の出来ない自分に別れて、ここで得た経験を何よりも活かして生きたいから自分は……来ました」

安直かもしれない。だけどこれは本音だ。

「……この娘は———キョウは、一緒に居たいと思えた存在です」

恥ずかしがり屋な俺でも、口下手な俺でも、妖精さんはずっと居てくれる気がする。そう思える自分が嬉しかった。

「うぅ～、わたしもずっとヒビキさんと一緒にいるですー！」と、泣きながら頬に抱き付いてくる妖精さん。ちょっとくすぐったい。

胸中が安堵で満ちる。憑き物が落ちたみたいに、思考が柔らかく、よりクリアに鮮明になっていくのが判る。重圧も何時の間にか消えていた。汗も引き、呼吸も安定。気分は上々。

高畑教諭も、表情も見る限り悪い気分ではないみたいだ。学園長もまるで孫を愛でる様な笑みを向けている。

何のための決意表明だったのか今一掴めていないが、後はエヴァンジェリンさんとの面会許可を貰うだけなのだが……、

「そうかそうか。なるほどのぅ。響君の気持ちを訊けて良かったわい。……じゃとよ、エヴァンジェリン」

……。

……。

……。

「ふ、ふん！　随分と臭い台詞を吐いたものだな。背筋が凍る勢いだったわ。……だが、まあ、その。別に嫌いでは無かったぞ」

「お？　もしかして照れているのかいエヴァ。珍しいな、これは良いもの見れたな」

「うるさい黙っていろタカミチ！　大体なんだ貴様等は！　朝っぱらから連絡してきたと思ったらヒ、ヒ……コイツがいるじゃないか！」

「こりゃエヴァンジェリン。名前で呼ばんかい。それに人を指で指したらいかん。響君に失礼じゃろ？」

「じじいはさっさと死ね！　嵌めたな？　この私を嵌めたんだな？」

……。何だろう。今、俺の眼の前には会いたかったエヴァンジェリンさんが……いる。

「また現れたですね吸血鬼！　今度こそこのキョウがぎったんぎったんに倒してやるです！」

「ああ？　言うじゃないか精霊。この悪の魔法使い、真祖の吸血鬼を相手に？　ハッ、やめとけ。三秒で終わるぞ。もちろん貴様がな」

目尻を尖らせて睨み合う二人。置いてけぼりの俺。と言うより、学園長。呼んでいたのなら言って欲しい。

先程より軽くなった場の雰囲気が蓄積されていた疲労を俺に荷担していく。苦笑。

「……キョウ、落ち着け。エヴァンジェリン、さんで大丈夫だな？」

「ん。いや、さんはいらん。それ以外なら好きに呼べ。私も好きに呼ぶ。……ヒビキ。私はお前に逢いたかった」

「……ああ。俺もお前に、会いたかった」

妖精さんとの小競り合いに興奮し過ぎたのか、顔を赤らめ俯かせ

るエヴァンジェリンさん。『さん』は、口に出さなければ大丈夫だよね？
彼女は俺の眼を一度見た筈だ。それなら俯かせて避けているのも判る。眼関係は慣れているとは言え、やはり心が痛む。

学園長のドッキリには加害者としては度が過ぎている気がするが、これが学園長が与えた機会だ。大切に使おうじゃないか。視界の隅で学園長と高畑教諭が笑っていた。ありがとうございます。
キョウを隣に並ばせ直立不動。
交差する視線。思いを伝える真摯の言葉。最悪な記憶と共に吐き出す後悔の念。自責と良心の呵責に捕らわれた自分を取り戻す。だけど、伝えたいのはそれではない。

伝えたい言葉はたった一言。純粋純白純正。綺麗美麗秀麗。そんな言葉が似合う程、気持ちと言葉に磨きを掛けて。
邪魔な考えはいらない。気持ちと言葉に磨きを掛けて。
邪魔な考えはいらない。不要な考えはいらない。付属な考えはいらない。

「エヴァンジェリン」

俺が言いたい、謝罪の言葉。“ごめんなさい”。
今、それを――――、

「――――ご」

「判っている。皆まで言うな。お前の言いたい事はちゃんと理解している」

――めんなさい。

……。

……ん？

「エヴァンジェリン……？」

「大方、私のためにこの場にやってきたのだろう。全く、お前は私の予想を何度も超えていく。……本当に、有り難い」

「……では、何故君はここに？」

「決まっている。己の真意を問いただすためだ。いや、だった、が正しいな。気付けなかった事に気付けた。気付いていた事を深く識る事が出来た。

……全く、この私がこうも簡単に……ハア」

どうやらエヴァンジェリンさんは聡明な娘だった様だ。両腕を組み唇を尖らせ、拗ねている。

俺が言いたい事を瞬時に理解しあまつさえ許しを請う俺を許すと、言ってくれた。予想を超えてしまっているのはこっちの方だ。

相手の気持ちを識り寛大な心で抱き締め嫌な顔一つせずに許すと。まだ少女だと言うのに、この娘が大人になったらたくさんの人に支持されるだろうな。

きっとクラスでも人気なのだろう。拗ねている顔もとても愛らしい。

「ありがとう」

飛び出した言葉がソレだった。

「……別に。構わんさ。それにお前、ヒビキは私の気持ちどうせ識っているんだろ？」

「……ああ」

「ふん。だったら良いさ。さあ、もうここには用はない。じゃあなじじい、タカミチ。……ヒビキ、家に良い紅茶と菓子があるから来い。ほら行くぞ」

「あ！　勝手にマイスターの腕を引っ張らないでください！」

腕を無理矢理引っ張っていくエヴァンジェリンさんと何時の間にか頭の上に居る妖精さん。腕が痛いよ、頭の上で暴れないでよ。

学園長、高畑教諭。助け――――何で笑っているんですか？

「エヴァンジェリンを頼むぞ響君」

「こんなエヴァ、久しぶりだな……響君ありがとう」

何故か頼まれ、礼を言われてしまった。明らかに最初と目的が変わっているよね？

力強く前へと進むエヴァンジェリンさんの曇り、穢れを知らない

金色の髪は、今の彼女の心を表していた。

「ほらちゃんと歩けよヒビキ。お前には話して貰いたい事があるんだからな？」

「……それは、大変だ」

綺麗な大人顔負けの笑みを見て、思わず身体が熱くなった。

———ありがとう。

第六話　魔

噂を耳にした。嘘だった。
噂を耳にした。疑問に思った。
噂に耳にした。騙された。
噂を耳にした。忘れた。
噂を耳にした。本当だった。

どれもこれもかれもそれも真実であり虚実。偶像で虚像。全ては己次第。どの選択を選ぶかは自由自由自由。喩え本当でも嘘で、喩え嘘でも本当で。進む道は一本ではなく、分岐点は多種多様に存在す。

さて、今までの戯言を無しにして、あなたが望む真実は――――なあに？

ネギ勘！　魔

漸く出張を終え無事に帰還を果たした信頼ある部下――――高畑を労っているとある時刻。扉を破壊寸前まで追いやる程の音が麻帆良の長――――近衛近右衛門と高畑の注意を惹いた。
事後瞬間、眼を見開く。そこに居たのは膝に手をつき肩で呼吸し額から汗を流す、十五年間中学生の吸血鬼の姿があった。
言葉が出ない、とはこの事か。何事かと訊いてみればいきなり服を掴み上げられ耳元で叫ばれては何も言えない。

ただ、何かが彼女に起きたのは見れば明白。慌てる様に、急かす様に、顔を赤く染めているのは脳に酸素が行き渡っていない様子か。それとも彼女の心中を占めている彼が原因か。
彼女を落ち着かせる事に大幅に時間を要し、訊いてみれば侵入者を発見した、と。協力者が内部に居た、と。外見はただの男だが自分と近い分類の存在だ、と。彼を即座に見つけてほしいのだ、と。

傍迷惑な話。同時に興味が湧く。その様な輩を今まで野放しにしていた事を自身に叱咤し、深い息を吐き重い腰を上げる。
果たして、彼とは、一体どんな人物なのか――――。

†††††††

「学園長。彼をお連れしましたよ」

「ごくろうじゃの、高畑君。――――そして、ようこそ。八霧　響君」

ごく自然。そう表した声質はただの老人のモノと聞こえた。ゆっくりと相手の注意を削ぐ感覚を持って長は彼を迎える。

その身を隠し、一般を装い、普通で彩り、常人と化した青年は部屋に入ってから初めてこちらに意識を向けた。

「……ああ、そうか」

眼中の無い素っ気無い態度。ぼんやりとした空の声は確かに二人に届いた。だが、それだけ。初見で現れた意志も、不確かな感覚も、彼から滲み出ていた不透明な感情も――――何もかもが消え去っている。

予定調和。スケジュールの通りに行動しているかのような、その立ち振る舞い。思えば、長も教員も彼と交わした会話もどこか一貫性の無い状態。のらりくらりと自分を隠すその姿に、二人はただただ機械的に言葉を返すしかなかった。

だが、それも初見故に。今回の会合は長の独断。庭に生えた不思議な芽を確認するために、彼を呼び寄せた。

八霧響が言葉を返した、という事は少なからずこちらに気は向けている。それではいけない。長は彼の興味を確かにするために、高畑に目配せする。

彼がこれで気付くかどうかを確認するのめ兼ねたごく僅かな気の発露――――それがいけなかった。

「――ッ」

八霧響の表情が強張ると同時にその身を屈め疾駆を開始。彼から発せられる意識がチリチリと高畑の肌を焦がす。

高畑がポケットに入れられている拳を居合いするのと、八霧響が鉤爪を模した掌を向けたのはほぼ同時だった。

「マイスター！」

「くっ！」

判断を見誤った、舌打ちにも似た苦渋の感覚が高畑を染める。襲い掛かる一本の顎（あぎと）。主人と同様、獰猛な性格を隠し、表された強かさはまるで伸ばされた腕が生命を持っているかの様に錯覚させた。

別段、事を起こそうという気は無い。どこで食い違ってしまったのか。柔和な笑みさえ今は懐かしく、達人の業をもってしてこの場を収める事を高畑は狙う。

「――――間に合え！」

その結果は――――引き分け。撃ち出された拳と顎は同等の力故か、鈍い音を放ち衝撃を打ち消し合った。八霧響の苦悶の声が上げる。

さらに第二撃を放とうと追撃の構え。だがそれよりも速く、八霧響は顎を軸に宙返り。音を立てず着地、愉悦が滲む顔を高畑へと注

視させ唯一の出口の扉前を制圧する。

一瞬。五秒も満たなかった戦闘は両者無傷で終わった。ゆらりゆらりと立ち上がり警戒を怠らず、見えてしまった瞳の奥に潜む色を内包する八霧響に麻帆良の長は嘆息する。

これが目的では無かったとはいえ、先に手を上げてしまったこちらの不手際。たった少し気の出しただけで彼はこちらに牙を向けてきた。それから判る事はただ一つ。八霧響は常に警戒の眼を向けていた。何時でも、何処でも、これまでも。

「高畑君、大丈夫かの」

「……ええ。ですが、やはり彼は」

高畑の確認を欲する声に長は頷くと同時に愚痴を零す。事の発端である真祖の吸血鬼。彼女が彼を探せ、と言った際に見せた表情にやれやれと首を振りながらも、笑みは自然と浮かび上がった。

彼を見付けられたらのは僥倖である。何故隠れていたのは判らず、見付けられなかったのはこちらの失態だが彼の態勢を見る限り何かに“追われている”。故に今まで隠れていたのか。

一手のみ高畑と相対したがそれでも警戒を解かないのは自然とそうならざるを得なかった、という事か。長はエヴァンジェリンが気にかけるのも判る気がした。

「……なるほど」

どことなく、似ているのだ。今の彼と初めてこの地を訪れた彼女が。

表面ではなく内面が。性格ではなく性根が。感情ではなく感覚が。

自身の運命を、人生を、処遇に牙を剥き出し追い込まれていた少女に。何ともこれは懐かしい、と。笑みを携え顎髭を撫でつけた。

視線先に映るは少女の形と重なる青年の姿。彼らが重ね合わさるのは彼らが似ていると思えてしまう程の感情を錯覚しているせいか。

「……」

青年の警戒が解く気配は未だ来ず。それがどうしようもなく、哀しかった。

だが。これで終いにする訳が無い。彼を知ったからにはこちらも態度を見せようではないか。話し合いをするのに武器を持つ必要は無い。彼はこちらの生徒だ。この地に住む、大きく言えば大事な孫の一人だ。

信用を得ずして何が信頼か。信頼を得ずして何が信用か。

学園を護り、関東の裏を占める長は口を開く。緊張感は無く重苦しくは無い。この場所は、血生臭い戦場では無いのだから。

まずは会話から――――と。それは、同時に起こった。

「マイスターヒビキを傷付ける人は許さないですー！　まずはこの

キョウが相手になるですー！」

青年の懐から勇み出る小さな影。青年の静止の声も届かず、影は両手両脚を振り回して眼前の二人を威嚇する。

小柄な体躯に負けぬ大きな気迫。その容姿は可愛らしくあるものの、手を出せば噛みつかれる勢いを持っていた。

（彼女が君の……。フム。“マイスターヒビキ”、か。一人ではないと思ってはいたが）

長は高畑に視線を移し合図を送る。非武器不暴力。それは彼も同意の頷きを返す。

せっかくの会合の場を破綻で終いにはしたくはなかった。だから、長も高畑も望んではいない――――だが。

「……」

青年。八霧響は望んでいる。

獰猛な、肉を裂き骨を砕き神経を刈り魂を殺す。そんな意識がまるで意志を持つかのように青年の身体から気配の如く溢れ出る。

生きた気配。呼吸を繰り返す空気。相棒に手を出したら最後、青年は一切の躊躇無くその牙を長達に向ける。

「ヒビキ、さん……？」

「……」

その意気は相棒にまで伝わる。青年だと確かめる様にか細く、不安気に。

「学園長。ここは……」

「ウム。そうじゃな。……響君。儂等が悪かった。だからそろそろ静まってくれないかのう。身体が軋むわい。それに、そこの可愛い娘さんにも手を出さんわい」

疲労を顔に出し諸手を挙げる。終始続くかと思われた緊張感は糸が切れたかの様に唐突に終わる。

小さく息を零す青年に安心したのか相棒は頬に寄り添い笑みを浮かべる。

相棒の笑みを近く感じ、青年も氷の表情を静かに溶かしだした。

長と高畑も自身の頬が緩まれていくのを感じた。表情の読めない青年の挙動を気をつけるの事は、二人にとっては骨が折れる。相棒が青年のストッパーである事は見て感じ取れる。だから、まずはそこから切り出し成功を勝ち取れた。

「……ん？　学園長。もしかして、あなたは……」

「ふぉふぉふぉ。判っておる。君の事情もその娘の正体ものぅ」

「こんな真似をしてしまってすまない。どうしても君の真意を知りたくて、ね。大丈夫。僕達は味方だよ」

彼等がこの地に居る理由とは、何故隠れていたのか、何故そこまで警戒していたのか。真意は掴めず相手を洞察で塗られた良心で高畑は口を開く。

それは彼等に踏み込む、了解を得ずして入っては来れない立ち入り禁止の場所なのかもしれない。

まだ知り合いでもなんでもない、ただの初見の相手。素顔を晒した今、彼らは本当の意味での初対面となる。

「……ありがとうございます。その言葉だけでも充分です」

「何、儂等も君を煽らせてしまったからのぅ。感謝される覚え何ぞなかろうよ」

「ごめんね。少し試す様な事をしちゃって。ここまでの道のりで君が警戒していた事に気付いてね。少し乱暴が過ぎたけど計らせてもらったよ」

八霧響は首肯する。

「……エヴァンジェリン、さんを襲う様な真似をしてしまった事に変わりはありません。教諭方にとってどれほど彼女が大事な人物な

のかは承知です」

真祖の吸血鬼をこの地に縛り付ける理由――――ある人物との約束。それは、確約されたモノでは無かった。信頼し、信用し、吸血鬼も信拠にしていただろう。長も、待っていた。僅か数年でも光を浴びて進もうとする吸血鬼の姿を英雄（かれ）に見せたかった。

――――だが。

そのような夢も、夢と終わる。他人が願った夢は本人は識らず、悲しくも人の夢は当人は識らず――――“儚く”。

八霧響がどこで知ったのかは知らない。彼の背景を想像しか得る事が出来ない以上、まるで雲を掴む様なモノだと解釈する。

そんな彼が見せた一抹の素顔。他人に決して興味を抱く事は無いだろう――――そう、思わせる人間が人外を心配した。

八霧響の独白の様な言葉は続く。

「……自分は止める事が出来ませんでした。それを出来た筈なのに、現状に甘えて自分に甘えてしたくなかった事を……暴力を振るってしまった。ここではそんな事をしないと、決めていたのに。……流された、自分がいました」

苦渋を込めた、長々と吐露される八霧響の恥部。彼自身は気が付いているだろうか。その言葉一つ一つが震え、絞られている事を。

長達では開く事は無かった扉を、吸血鬼がこじ開けたとなっては苦笑せざる得ない。一体八霧響が吸血鬼のどこに何を見いだせたのか。八霧響が人外のどこに何を惹かれたのか。

「……ふむ」

空意気が吐き出される。何故だか長には心配そうに相棒を見ている妖精よりも小さく見えた。

どうしたものか。彼の心中を見透かそうとして、ふとちらりと。彼の後ろにある扉に視線を向ける。扉は何も言わない。当然だ。扉は言葉を発さない。

長はほんの数秒、間を開けてから脳に並べた言葉を話す。

「少し訊きたい事があるんじゃが、良いかの？　二つだけ、答えてくれるだけでいいんじゃが」

八霧響は無言で頷く。

「ここ、麻帆良に来た理由とそこの精霊は君にとって何なのか。それが訊きたい」

老練な瞳が八霧響を射抜く。踏んできた場数、得てきた経験、こなしてきた修練。人生の密度がどれほどのモノかが伺える。

何気ない質問。それこそに意味がある。伊達に長く生きた訳ではない、と射抜く双眸が語っていた。

「……マイスター」

「……」

それは、小さな相棒にも届く。呟きに込められたのは不安ではなく、確認の意。恐れているモノはない。それは、彼女がどれほど長く八霧響と共に居ただろうか。想像の領域でしかないが、間違い無く八霧響を理解しているのは彼女だろう。

「わたしのマスターはヒビキさん、ただ一人だけです。どんな事があっても、どんな事が起きても、どんな事になっても、一人になんて絶対にさせません。――――だって、わたしのただ一人のマイスターなのですから」

八霧響もまた、小さな相棒をこの世で一番理解しているだろう。彼が彼女に向ける言葉には必ずと言っていいほどの慈愛が込められている。

それは、他人に無関心な彼にとって救いとなっている存在だろう。

「自分を変えるために、ここに来ました。我が儘な自分とはもう別れて、素直に謝る事の出来ない自分に別れて、ここで得た経験を何よりも活かして生きたいから自分は……来ました」

一文字一文字に力強く、支えられた言葉に意味は有り。真摯に語っている姿は八霧響の容姿に似合わず。古時計が止まるまでその針

を動かし続ける様な強さと潔さが彼に垣間見える。
八霧響は支えられ、小さな相棒は支えており。
小さな相棒は助けられ、八霧響は助けており。
彼らにしか判らない繋がり。ただ見ているだけで、羨ましく思わせる。
きっと、それは。

「……この娘は――――キョウは、一緒に居たいと思えた存在です」

それこそ――――視てきた景色が、歩んできた道が、経験したモノが――――　一緒なのだから。

†††††††

やれやれ、と長は苦笑の言葉を洩らし、目尻に弧を描かせる。それを気付かせない様に、伸びた髭を撫でた。
八霧響の思いを訊いた上での結論。それは、取越し苦労。彼の言った事全てが本心だとは結論し辛い。だが、全てでは無いにしろそれは本心の一欠片。小さな本音。
要するに――――『キョウに何かしたら赦さない。エヴァンジェリンにも手を出すな』――――と、言ったところか。つくづく家族(なかま)想い

な青年だ。そんな身体で一体何を溜め込んでいるのだろうか。

だが、彼が言うのだ。ならばこちらも手を出すまい。出す必要がない。若い者に物事を任せ、古き時代の先駆者は裏に回させてもらおうではないか。

「そうかそうか。なるほどのぅ。響君の気持ちが訊けて良かったわい。……じゃとよ、エヴァンジェリン」

だから、そろそろ隠れてないで出てきたらどうだ？　クツクツと笑いを耐えながら扉前に居る吸血鬼を見据える。

扉を叩き壊す様に開け放った真祖の吸血鬼。その相貌は赤に染まり無沙汰を装う形で腕を組み視線を逸らしている。

まるで素直に気持ちを表せない少女の様な———否。吸血鬼と言えど、彼女は少女であり少女とも言えるだろう。

「ふ、ふん！　随分と臭い台詞を吐いたものだな。背筋は凍る勢いだったわ。……だが、まあ、その。別に嫌いでは無かったぞ」

吸血鬼（しょうじょ）の言葉に一切笑いを堪えずに表す高畑の様子に吸血鬼は憤慨。子供の様に喚く姿に威厳も威風も威勢も無く。僅かに染まった頬が可愛らしく見える。

一区切りついた所で、吸血鬼は青年を視界の中央に入れる。苦笑する青年に少々調子が狂う。

「また現れたですね吸血鬼！　今度こそこのキョウがぎったんぎったんに倒してやるです！」

……邪魔な奴め。

「ああ？　言うじゃないか精霊。この悪の魔法使い、真祖の吸血鬼を相手に？　ハッ、やめとけ。三秒で終わるぞ。もちろん貴様がな」

その三秒でさえも精霊にくれてやるのが惜しかった。今の私の相手は目の前のこいつだ。苦笑する以外何も表さない能面の彼奴。中背の体躯を卒塔婆の様に支える異形。この訳の判らない存在が私を悩まし、私を狂わせ思考を中断させる。

「……キョウ、落ち着け。エヴァンジェリン、さんで大丈夫だな？」

———ああ、そうか。

「ん。いや、さんはいらん。それ以外なら好きに呼べ。私も好きに呼ぶ。……ヒビキ。私はお前に逢いたかった」

語尾に残る艶やかな声。少女とは呼べない女性然とした花の香りが青年に響く。まるで彼を誘う様に放たれた甘い声色が出せるとは

少女自身も気付く事は無く、それを全面に享受している。
ただ、背筋が震えた。　彼と向き合う事でこれ程までに胸の内が歓喜に吠えているとは。
だから、青年の相変わらず苦笑染みたその表情が、とても愛おしく思えた。

「……ああ。俺もお前に、会いたかった」

———ああ、いい。いいぞ。

その言葉一つ一つが、自身にのみ向けられているという事実が。その隠れた視線が自身にのみ集中している事が。その溢れた感情が自身にのみ注がれているという事実が。
十五年。その進化も退化も成長も衰退も起こらなかった年月に置いて、これほどまでに嬉しく思えた事はない。同族嫌悪。そんな能書きは吸血鬼の思考には存在しなかった。
ただ自分と同じ存在が居た事に、苦境を共有出来る存在が出来た事に吸血鬼は異常なまでに興奮している。

「エヴァンジェリン」

———ああ。その眼を私に向けてくれるのか。その声を感情を感覚を。私にだけ向けてくれるのか。良い。良いぞ。もっと訊かせてくれ。もっと、もっとだ。

長年吸血鬼は一人だった。だから、その寂寥感を拭うために『生き抜く』という目的を盾に力を付けた。それでも寄ってきたのは雑多な敵。ただ一人だけで生き歩いてきた。

戯れに従者を造った。一言余計な殺戮人形。それでも主と従者という壁があり、暇は潰せたが寂寥感は拭えない。

長年生きれば共感、同情してくれた人間も確かに居た。ただそれも人間。永久を生きる吸血鬼と共にする事は無く、楽しめはしたが寂寥感は拭えない。

英雄と謳われた人間が居た。共に居れば何とも心地好い感情に身が溺れたが、一つの約束を置いて現れる事は無く、寂寥感は拭えない。

今代。妙な雰囲気を携えた青年が現れた。口数は少なく柳の如く佇み高位の精霊を従わせている青年。ただそれだけなら吸血鬼もさほど興味を持つ事は無かった。

凝縮された黒。闇に近いのではなく、闇に似ているのではなく、闇そのものではなく。闇を従えた黒の瞳。

向ける視線は悪意を放ち。向けた先に敵意を感じさせ。相手に害意を与えさせる。

――――全身が興奮で震えた。

青年の生きた年月からでは想像もつかない程の負の意志に吸血鬼は初めて共感を得た。

それからはもう考えられない程の甘美の時間。彼の声は吸血鬼の同情を察し、彼の瞳は共感を感じ、彼の雰囲気は吸血鬼の同感を得てくれた。

自身とより近い存在を発見したのは僥倖と言える。何を言おうと

彼は判ってくれて何をしようとも赦してくれて何をしても理解してくれる。それは、八霧響と言う青年がエヴァンジェリンと言う吸血鬼と同じ存在であり同じ苦境を味わったからでもある。
それが本格的に判ったのは、長に呼び出され扉を開けようとした際に聞こえた彼の声。訊けば訊く程彼に心が捕らわれていく気がしたが、それも吸血鬼にしてみれば上質な血だ。何を恐れるのか。恐れるモノ等、何もない。

「――――ご」

「判っている。皆まで言うな。お前の言いたい事はちゃんと理解している」

――――お前が私を理解してくれる様に、私もお前を理解しよう。だから、もっと。もっとだ。訊かせてくれ、お前の声を。見せてくれ、その眼を。感じさせてくれ、お前を。それだけで、私は――――濡れる。

「エヴァンジェリン……？」

邪魔な考えはいらない。不要な考えはいらない。付属な考えはいらない。
青年は吸血鬼を誘う蜜だ。それを判っていながら吸血鬼は感受する。手放せ無い程に、気持ち良く心地好い。
立てば毒薬座れば麻薬歩く姿は誘蛾灯。

青年を言葉に表すならば、これに尽きるだろう。吸血鬼はそう思う。

「大方、私のためにこの場にやってきたのだろう。全く、お前は私の予想を何度も超えていく。……本当に、有り難い」

だからこそ、私と居てくれ。

「……では、何故君はここに？」

「決まっている。己の真意を問いただすためだ。いや、だった、が正しいな。気付けなかった事に気付けた。気付いていた事を深く識る事が出来た。

……全く、この私がこうも簡単に……ハア」

私とお前は同族なのだから。

†††††

真祖の吸血鬼エヴァンジェリンが青年八霧響と共に足早に去って

いて数分。
壊された扉に嘆いて数分。直す手配をして数分。漸く落ち着きを取り戻した後、口を開いた。

「のう、高畑君」

「何ですか、学園長」

「儂は間違っておるかのう？」

高畑は落ち着いた調子で瞳を閉じる。そして開く。

「……判りません」

答えを訊いて嘆息する長だがその言葉はまだ続く。期待した眼差しで壊された扉を見詰めながら。

「彼に、任せましょう。そのために僕達大人が居るんですから」

「……そうじゃな」

彼の正体が掴めなくとも、疑いをもってしまっても、最後まで信じて見守り導いてやりたい。
それが大人の、教師の役目だから。

笑みは絶えない。それと一緒に彼らの希望も絶えないで欲しい――

――そう、長と高畑は願った。

第七話　聖

怖いモノは怖い。人っていうのは己の認識出来ないモノ、理解の範疇を超えているモノというのはどうにも認めたくないらしい。それを恐怖で彩りしたり、現実逃避をする――――等々。エトセトラエトセトラ。多々あったりなかったり。

とにかく。現実で有り得ないモノを信じるには己で確かめないといけないようだ。それを確かめる事自体が怖いというのに。

かく言う俺も、怖いモノは存在する。当たり前である。俺は完璧完全完成された人間じゃないのだから。

桜通りの吸血鬼。

……まさか、本当に存在していたとは――――なんてな。

ネギ勘！　聖

肌寒さを感じさせる風が身を包む。季節は暖かさを迎え始めた春だというのに、それを否定したかの様な外気。それも当然。辺りを見渡せば暗闇で、僅かな光を灯す街灯だけが俺の道を照らしてくれる。

真上を見れば満点の星空。生憎、天文学は学んでいないためどれが星座をかたどっているかは判らない。ちょっと凹む。

「……ああ、全く」

「どうかしましたかマイスター？」

「……いや。早く帰りたい、と思っただけだ」

胸ポケットから顔を出している妖精さんに落ち込んでいる様子がバレない様に体裁を装う。機微に感じ取ってくれた事が少し嬉しかったのは内緒である。

時刻は既に夕食時であり、こんな夜道を歩いているのは図書館島に本を借りに行っていた訳であって。妖精さんもお腹が空いているだろうに、それを臆面も出さずわざわざ俺に付き合ってくれるとは良くできた娘だと思う。

しかし、まあ。

そんな優しさの塊で出来ていそうな妖精さんにも苦手なモノはあったとは。

先日、学園長の仲介により和解となれた少女———エヴァンジェ

リンさんとはどうも相性が悪い。顔を見合えば悪口雑言の雨霰。どちらも一歩も引かず、止める役となってしまってはいるがどうにも微笑ましく見遣ってしまう。男同士ではなく少女同士の可愛い喧嘩。いやはや、これを何と表せばいいのやら。

「……ふむ」

和解した日。エヴァンジェリンさんは俺達を家へ招待してくれた。その際、茶々丸さんとも誤解が解け、漸く俺にも安堵する日がやってきた。エヴァンジェリンさんもやはり俺と茶々丸さんが仲を心配していたらしく、誤解が解けるや否や上機嫌。

俺も久方ぶりの女性とのきちんとした会話に四苦八苦していたが――と、ここで俺の長い思考は途切れる事となる。

「……悲鳴？」

まるで絹を裂くような甲高い声。咄嗟の事に判断が出来ず理性よりも本心から漏れ出た声。それが俺には助けを求めているかに聞こえた。

場所は近い。そう判断するや否や、俺の身体は反応していた。

「マイスター！」

「ああ、判っている」

野次馬根性、とでも呼べば聞こえは悪い。だが悲鳴の元が何なのかは気になるし、その悲鳴の元凶が最悪ならば警察に連絡しなければいかない。
妖精さんも俺の心境を察してくれている。彼女も気になるのだろう。第一、人の好い妖精さんなら声を訊いて放っておく訳がない。そう確信させる何かが、俺にはあった。
そうとなれば話は早い。俺は怯父だが恐怖する事はない。一人なら怖がっていた俺の心も、妖精さんのおかげで強化された。
その身が駆ければ足取りは軽く、直ぐに目的地へと。

――――だから、忘れていた。少しでも考えれば判る事なのに俺は目の前の事に注視させられ思い出す事は無かった。
ここは桜通りであり――――噂に訊く、吸血鬼の目撃現場である事に。

「――――ォッ！」

現場に駆け付ければ吹き荒れる暴風。驚きが口から漏れ出たが、気にする余裕は無く風を避けるために腕で顔を隠す。
前が見えない程の暴風は瞬き数回程で消え、残るは風の残響に理解不能な現場。駆けつけてみたはいいものの、俺の目の前で起きているであろう出来事にどうすればいいのか。情報が足らなかった。

「……何が起きているのか、説明してもらいたいのだが？」

そう告げれば僅かに肩を揺らす程度の反応を示した小さな黒陰。全身を黒一色の服で覆ってせいか、顔も性別も判断できない。
先程の叫び声の持ち主と予想される麻帆良女子中学生。見遣れば現在気絶している模様。
そして。身の丈よりも長い棒を持った子供。
……一体どんな状況だ？　そんな疑問を裂いてくれたのが黒陰さんだった。

「お前は……ッ。何故ここに……」

聞き取れた言葉から判る事はどうやら俺を知っているご様子。生憎と黒陰さんぐらいの身長を持った知り合いは片手で数えられるくらいしか居ないが、それでもこんな夜に出歩く知り合いばかりではない。
さて。現場状況を知りたいのだが一向にその気配は無い。黒陰さんは何か呟いているし。残る人物に声をかける。

「……そこの、君。詳しく話してくれないか？」

交友を拒絶するかのような固い口調。それは仕方がない。緊張しているんだもの。

「あ、あなたも僕の生徒を襲うんですか！？」

返ってきたのは反応に困る答え。

「……は？」

「だって――――」

「――――驚いたな。まさかお前がここに来るとはな。……いや、それも既にお前に判っていた事か」

子供の言葉を遮った落ち着いた声。慌てている子供の様子と黒陰の様子は両極端であり、それ故にその黒陰の声は何物にも阻害される事なく静かに、流れる様に俺の耳へと届く。

どこかで訊いた事のある声。奇しくもそれはとある勘違いのせいで出会った少女の声と酷似していて、脳内に記憶されている少女の声と黒陰の声を照合するのに時間はかからなかった。

「あなたは……！　何で僕の生徒を襲うような事をするんですか！　一体何者なんですか！」

「ハハッ。さすがは奴の子供も言ったところか。凄まじい魔力だ……だが、ここは退き上がらせてもらう」

黒陰がこちらを一瞥し、俺が気付くより早く黒陰は何かを取り出し子供に――――その中心に居る俺に投げてくる。

ただ呆然と。

何も反応を起こせず、俺はただ見て立っているだけ。
黒陰の正体が彼女のせいだったのがこんなにも身を棒にするとは思わなかった。
まるで家族が事故にあった事を後日訊いたかの様な、ふとした消失感。信じられない。そんな七文字が胸の内をさ迷う。
———だからだろうか。

『マイスター！　あなたは私が守るです！』

———妖精さんの声が胸に力強く届いたのは。

硝子が割れたかと思わせる小爆発。寒気を覚える白煙が身を包み何が起きたのかが判らない。声を上げる暇すら与えて貰えず、眼を向ける事すら叶わず。
どうすればいいのか。その答えを見つけるための方法は———、判っている。

『マイスター？』

彼女をここで見失う訳にはいかない。訊いておかなければならない。
———何を？　識らないよ。判らないよ。意味不明だよ。だけど、ね。人間ってのは得手して理由が判らなくても識りたくなる事があるんだよ。

「追うぞ……ッ！」

『りょーかいです！』

「あっ、待って――――」

凍える寒さも一時の状態で、決心した後にまるで道を示してくれるかの様に白煙は晴れる。街灯と月明かりに照らされた桜通りを前にして走り出す。件（くだん）の彼女は既に遠く、小さな粒となっている。

不味い。このままでは見失ってしまう。

『任せてくださいマイスター。彼女の魔力は既に捉えました。今から私の言う方向から追ってください』

「ッ、そうか。助かる」

心情を察してくれたのか妖精さんの言葉を理解するよりも早く言葉少なめに感謝を言いつつ従った。足取りが何故やら何時もより軽く、視界に映る景色が早々と変わっていく。何時になく調子が良い。

疑問に思う事なく絶好調。最近妖精さんといる時にこの絶好調を味わう様な気がするのだがこれも妖精さんが与えてくれる癒やしによる安心感のものだろう。

桜通りを抜け、広場を抜け、走り続ける。上下左右縦横無尽。どれくらいの時間が経ったのかは判らない。彼女が止まった先に着くまでの道のりを確かめる余裕は無く、気付けば彼女と相対していた――――屋根の上で。

「……何故？」

いや、確かに場所を確認せずに妖精さんに従って行ったが……一体どのようにすれば屋根の上に辿り着く結果になるのだろうか。それよりもまず彼女の横に何時のまにか一人増えているし。

だけど、まあ。

「お前なら訊かなくても判るだろう？　八霧……響」

「……マクダウェル。それに、絡繰か」

予想通り、案の定とでも言えるのか。満足そうに喉を鳴らすエヴァンジェリンさんと綺麗な礼をする絡繰さんを前にして手持ち無沙汰を覚えた。

彼女を追いかけてみたのはいいものの、その理由も動機も皆無でただ追いかけただけの俺にとっては、彼女がエヴァンジェリンさんだと判った時点で目的は達したと言えるだろう。

ならば、蛇足に補足。彼女があそこに居た理由を訊いて話題を振るのも一つの手なのかもしれない。話題を持って居ない自分が恨めしい。

エヴァンジェリンさんの顔を窺いつつ、口を開く。

「……邪魔だったか？　俺が居た事は」

「何を今更。どちらとしても結果は変わらん。何、ちょっとした余興が増えるだけだ」

「少し、消極的だと……。気にする事でもなかったか」

「なんだ、安心したのか？」

「……判る事を言わせるのか」

「ククッ。それもそうか。そうだな。そうだよな」

どうやらエヴァンジェリンさんの機嫌は上々らしく場違いな俺の登場に寛容な気持ちで受け止めてくれたようだ。

思えばそれも当然であろう。エヴァンジェリンさんにとって、俺は知り合いその一みたいなモノでる。居なくても変わらないし居ても何かが変わる事はない。少々の会話ができる程度で、そこまで彼女とは親しい訳ではない。

親しい友人となるまでに時間は関係は無いと思うが、俺は彼女が中学生の手品師で友人想い、人形好きくらいしか判らない。彼女の内側を全く知らないのである。

「ん？　どうした。何か気になるのか？」

「いや……少し、自分が情けないと思っただけだ」

落ち込んだ事を気付かれてしまうとは。彼女の鋭い感性に驚きつつも尊敬し、気付かれる自分に申し訳なさと隠せなかった事に肩を落とす。
やはり、ダメだ。まだまだ人に気遣われるようでは。人見知りも恥ずかしがり屋な内面も治したいのだが……ゆっくりと時間をかけるしかない、という訳か。エヴァンジェリンさんと友人になったからと言って、早々に上手くはいかない。

「……エヴァンジェリン」

小さな溜め息を零しつつ、俺は彼女に背を向ける。こんな調子ではさらにエヴァンジェリンさんに迷惑を掛けるだけだ。今日はもう帰る事にしよう。

「……そうか。私もあの坊やには用があるのだがな。まあ、今回は……いいだろう。少し楽しみにしていたのだがな」

「……いいから、もう今日はいいだろう。先に、帰ってくれないか」

ここは屋根の上だし、そろそろと降りる所を恥ずかしいから彼女には見られたくない。エヴァンジェリンさんには悪いが別の場所から降りてもらう事にしよう。
彼女の声からはまだ物足りなさを感じるが、気のせいだろう。

「ではな、ヒビキ。今度は腰でも据えてゆっくり語り合おうではな

いか」

「……さようなら八霧様」

「ああ、……楽しみにしてる」

絡繰さんの声を今日初めて訊いたなぁ、と間抜けにも思いつつ彼女達の気配が無くなるまで待つ事にした。

最後までエヴァンジェリンさんの服装について指摘しなかったのだが、きっとあれが手品師としての正装なのだろう。

無理矢理納得しながら胸ポケットに居る妖精さんに感謝する。エヴァンジェリンさんとの会話中、声を出さずに隠れていた彼女の思慮深さに感嘆を覚える。

彼女にとっては苦手な存在かもしれないが、俺にとっては新しい友人との会話は勇気を持って踏み込んだ第一歩なのだ。感謝の足りようが無い。

「キョウ。今回は……いや、今回も感謝する、だったな」

『何を今更ですか。私はマイスターに救われているのですよ？　今も、そしてこれからもずーっと私はマイスターヒビキの味方なのです！』

妖精さんを救う程の事をした覚えはないが、きっとこれが支え合うという事なのだろう。

自分のためではなく、誰かのために。

この眼つきで悩んでいた時（今も悩んでいるが）、同じ眼つきで

ある祖父に随分と教えられたものだ。記憶の海に身を任せてみれば、自然と祖父の言葉が浮上する。

――他人の心配を自分の心配だと思うなら、それは余計なお人好しだ。自分で持ち上げられない程の荷物を持とうとするな。少しは置いておけ、それが忘れない印となる。一人という意味を間違えるな。独りという意味を履き違えるな。自分のためではなく、誰かのために。それは唯一の忘れない教訓となるのだから。忘れるなよ？

……我ながらよくこれだけ長い言葉を全て憶えていたものだ。苦笑苦笑。

厳格さと楽天さを不安定に持ち合わせどこか超然とした雰囲気を帯びている祖父。祖父のおかげで俺はこの眼つきと向き合える事が出来るし、学校を通えているのだが……今は余計な考え事だろう。

「キョウ。そろそろ帰るぞ。……ここに長居しても意味がないからな」

「そ、そうなのですか？　ですが……」

「……どうした？」

さて、と帰ろうとした先妖精さんの戸惑いを含んだ声が聞こえた。

もしかして、降りる勇気が無いのかもしれない。登る際は下を見ていなかったのでれたが今度は下を見て降りる。意外とここ、高い場所という事に何故登っている最中に気付けなかったんだろうね、

俺。
と、妖精さんが降りる勇気を持てるまで待とうとすると――――、
「待てーーー！」
……え？　何事？
「……何だ一体。こんな時間に叫ぶとは、迷惑なのだがな」
「……あ、あなたは何者なんですか。どうしてエヴァンジェリンさんと一緒に居たのか、訊かせてもらいます」
「……何者、ね。……はてさて」

夜に相応しくない静止を破る幼い声。長い棒に縋る様に持ちながら、眼の前の子供は鬼気迫る表情を浮かべていた。
どうやらこの子はエヴァンジェリンさんの知り合いな様で、それが一方的などうかも置いといて。
俺が何者である、か。
俺とエヴァンジェリンさんとの関係は、とは。
「……学生」
「えっ？」
「……今、俺は学生をやっている。エヴァンジェリンとは最近会っ

たばかりでな。……あまり彼女の事は判らん」

他にも挙げるならばエヴァンジェリンさんは手品師だと言うことだろう。だがそれは俺が口にしていいものかは判らないし、眼の前の子とエヴァンジェリンさんの関係を知らない以上、無理に言うべきではないだろう。

……て言うか、自分より小さな子に素直に答える俺って……。

「……用件が無いのなら帰らしてもらいたい、のだが」

「……」

仕舞いには無視ですか。傷付くんだぞ俺だって。

子供は何やら考え中な様でこちらに気付く様子では、ないと。とりあえず帰ろうか。

夜も遅いし、噂ではあるが吸血鬼とやらに出会ったら大変だ。

「……おい」

「へ……っ、きゃっ！？」

近付いた途端、驚かれた。悲鳴を上げられた。後退りされた。

「……俺は、帰らしてもらう。……傷付き過ぎた、からな。……君

も、帰るといい」

「……へぅ」

返事らしきモノを受け取って下へ続く階段を探しつつ、あの場を去った。

あの子供は何なのか。気になる所だがそれは俺の役目ではないだろう。この麻帆良は確かに規模は広いがそれでも出会う時がきっとある。

一期一会。そんな素敵な言葉があるんだから。

「あっ……せ、先輩！？」

「……神楽坂、か」

いつぞや俺の仮面を拾ってくれた、一応後輩に当たる神楽坂。そんな彼女が息を切らしてこちらに向かって来た事に疑問を覚える。

「せ、……先輩。あの、こっちにネギ……子供が来ませんでした？探しているんですけど、眼鏡掛けて長い棒みたいな物を持ってる、子供を」

「……ふむ」

手の甲で口を拭いながら神楽坂は尋ねる。どこか慌てているもの

の、心配の色は見えなかった。
神楽坂さんが探しているその子供。彼女の特徴を訊く限りでは先程会った子供で間違いないだろう。
親戚か何かの関係なのかは判らないが見るに急いでいる様子。ここで立ち話させる訳にはいかない。そんな度胸も無い。

「……その子供ならここから先の屋根の上に居るぞ」

「屋根！？　ああもう、全くあいつったら迷惑ばかり掛けて！　先輩、ありがとうございます！」

「ああ――――」

慌てて走り出す神楽坂さんに道を空ける。やはり彼女は優しい。その言葉から子供好きが滲み出ているからかもしれないが、俺でも屋根に登るのは躊躇するのに迷う事すらないなんて。
きっと彼女が探している子供も待っている事だろう。結構高いし、もしかしたら泣いているかもしれない。足場も不安定だから危険だ。

「――――気をつけろ」

だから、こうやって注意を促しておいた方が良いだろう。
神楽坂さんもさっさと行きたいだろうに、俺なんかに止まって耳を傾けてくれるのだから早々に喋って去るべきだ。

「……夜はまだ始まったばかりだ。危険は、眼の前にあるものばかりではない。……少し、噂にも耳を傾けてみろ」

桜通りの吸血鬼、を装った愉快犯が現れるかもしれん。神楽坂さんはまだ中学生、子供である。狙われる可能性だって充分あるのだ。気をつける事に越した事はないだろう。

逡巡した後、神楽坂さんは力強く首肯した。どうやら判ってくれたみたいだ。

「……少し、喋りが過ぎたな。戯言だった。……行け」

「……、あの……はい」

神楽坂さんの姿が見えなくなったのを確認し、嘆息。

いや、いくら注意したとは言え、最後の台詞が『行け』、だなんて。自分でも判っている事だが判っている事だからこそ余計に自己嫌悪に陥る。

どうにかしたいと思っているんだが……ま、少しずつ直していって判ってもらおう。

「……キョウ」

『なんですか？』

「寒い、なぁ……」

『……。そうですねぇ……』

白色に染まる吐息に眼を奪われながらも、結局妖精さんに頼ってしまうのだった。成長しない俺に……一つ、嘆息。

第七話　魔

世に語る者が居ない時代。
朝を護る守護者が支持を指し、昼を背負う支持者が逆らい、夕を巣くう反逆者が死を振り回し、夜を語らう死者が護り通す。
詩人が謳いそうな物語。誰も彼もが瞳を輝かせば耳を傾ける。

故にこの世は平和で平穏で平定している。争いは多々あるが、それも小さきモノ。娯楽もあれば道楽しており何とも極楽な世界。
まあ、それも。表の世界の話であるが。
楽しければ、いいじゃないか。吸血鬼相手を友達と呼ぶ奴が居たって。

――――等と、吸血鬼の友は言う。その相貌はどこか、満足そうにしていたり。

ネギ勘！　魔

寒々とした。空っぽの心を覆う冷たさが己を冷静にさせてくれる。
掌を見れば。青白く、温かみを感じさせない色合いが逆に己を異端だと感じさせてくれる。
血の味が。何時度となく忘れられない呪いの味が己を吸血鬼だと認識させてくれる。

己を縛る視得ない鎖が身体を這いつくばっていると思うと、夜よりも暗い沸々とした嫌な感情が魔法使い――――エヴァンジェリンの表情を歪にさせる。
蝙蝠に似せた様な外套と月に見せた金髪に陰りを真似る三角帽子が童話の魔女を連想させる。

「……もうすぐ、もうすぐだ」

風に乗せて遠くへ飛ばすかの様に魔女は囁く。送り主は魔法使い。受取人は届かぬ青年へと。
魔女が夜を闊歩しているのはとある理由からだった。己をこの地に縛り付けた英雄の子が自分の居るこの土地に訪れる――――その時から魔女の計画は始まった。

計画成功の暁は、この地からの脱出、脱退、脱却。

止まる事は無い。唯一心を開かせてくれた英雄でさえ、魔女を裏切り土産として自身の死を送りつけられた。

光を見てみろ。英雄は言った。
確かに光は暗闇を過ごした魔女にとって暖かな環境と感情と感動を与えてくれた。だがその光も浴び続ければ熱を出し痛みを与える。それは直視出来ない太陽の様で――――魔女は、癒されていく筈だった心は何時の間にか炎に焼かれた感覚を持ち始めた。

魔女は嘆いた。自身を癒やしてくれる日の光は自身を拒んだ事を。英雄（ひかり）は魔女（かげ）を救う事は叶わなかった事を。
所詮魔女は闇の権化。太陽とは相反するモノ。この【癒やし／痛み】が心地良くなる事はなく、解いてくれる主を失った鎖は一生――――それこそ、未来永劫縛り付けられたままとさえ思われた。

――――だが。

「感謝するぞネギ・スプリングフィールド。お前が、お前のおかげで私はついに解放される……。ハッ、英雄（ちちおや）の責を子が拭うとは、な」

何とも世知辛い時代となったモノだ。くつくつ笑う。
英雄の倅は父親の威光だけではなく、その責さえも背負う事になっている事実に、どれほどの人数が気付いているのか。気付いていたとして、告げられるのか。
英雄は判っているのか。血を継いだ倅が、今まさにその責に捕らわれる現実に。

「だから。今は力、力が必要なんだ。判るか？　判るか？　……判

るまいよ。これは私の我が儘、その我が儘でお前は巻き込まれるのだからな。恨むなら、恨めよ。憎いなら憎めよ。だが、そうであるなら……無知でいるなよ――――」

――――宮崎　のどか。

闇夜に浮かぶ炯眼は一人の獲物を捉え狙いを定める。魔女の警告を訊きつつ、半ば受け入れられない現実に脳が悲鳴を上げた。

叫声。

裏を識らない無垢な少女に魔女の警告に含まれた感情を識る余地など無い。ただただ受け入れられない現実に、受け止められない現実に、受け付けられない現実に。

――――宮崎のどかは、意識を手放した。

呆気ない。他人事に思った。

それで夢と思えるならどれほど幸福だろうか、それで幻想だと思えるならどれほど楽だろうか、それで勘違いだと思えるならどれほど嬉しいだろうか。

かつて短いながらも宮崎のどか（にんげん）と同じ道を歩んでいた自分（きゅうけつき）。もう戻れない。それは判っている。だから、戻れないなら歩むべき道を変えてやるまで。今はこの地に縛り付けられ削れていく筈だったこの感情も、同じ視点から視てくれる存在を見つけたおかげで取り戻せた。

もう一人は嫌だ。そんな幼子の様な寂しい声が胸の内から聞こえてくる。それが本心からか気まぐれな遊び心からなのか、エヴァンジェリン本人も判らない。

確認はしない。今はそれが第一の目的ではないのだから。

「待てーー！　僕の、僕の生徒に何をするんですかーー！」

「……来たか。ほら、まずは腕試しだ」

人を救うため、現れたるは次代を担う英雄の子。その眼に汚れを知らない光を灯し、意識は常に未来へと向いており次なる英雄に相応しい力を保有している。今はまだ原石の輝きだがそれは何れ価値のつけられない素晴らしい宝石へとなりえるだろう――が、そうだとしてもそれは未来の話。

唯一己の力を引き出せないエヴァンジェリンが出来ることは媒体を用いた魔法の具現。投げられた二つのフラスコが割れ、閉じ込められた液体が混ざり合い不可思議な反応を起こすと、それは一つの凶器となり英雄の子へと狙って行く。

子供で実践経験が皆無に乏しいが慌てながらも咄嗟の判断により魔法の矢を放つ。宮崎のどかを守るために牽制にも等しいそれらは互いにぶつかりあい場を一時鎮静化する筈だった。

「――――ォッ！」

現れる事の無い、青年によってそれは起こらない。

両者の魔法の間に入り受け止めたかの様に見えた後――――衝撃と煙幕が生まれる。状況にそぐわないイレギュラーの登場に英雄の子は呆然とするがエヴァンジェリンは違った。　驚愕より先に歓喜に。困惑より先に歓喜に。焦燥より先に歓喜。

望んでいたモノが現れ彼女はどうしようもなく嬉しくなった。見

えない終わり。つまらない日常。変わらない感情。それらを反転させてくれたのがまぎれもない青年――――八霧響であった。
数日前に出会いその数日とは短いながらも長く感じる彼との共有時間。互いに同じモノを視て感じて思い境遇を背負わされたモノとしては彼ほど自分を理解してくれるモノは居ない。そうエヴァンジェリンは思う。
何故今まで出会わなかったのか同じ地に居て不思議に思うがこれも一つの巡り合わせ。出会った今では文句もなし。彼と出会う度に喜の感情が飛び跳ねてしまうのだがそれも押し殺していた反動故だろう、と結論付ける。

魔法の残滓を防ぐかの様に顔を覆っていた腕を払うと、その瞳を隠しながら静かに告げる。

「……何が起きているのか、説明してもらいたいのだが？」

その声色は反論を許さない、ただ結論を求めるだけの色。

（判っているだろうに。お前はどこまで楽しむつもりだ？）

こんなタイミングの良すぎる登場。おそらくどこかで覗いていたのだろう。考えなくとも判る青年の心情を読み取りながら、咽喉から生まれる笑いに噛み殺そうとするが肩が揺れる。
出なくても良い舞台に青年は現れた。それが何を意味するのか――――、エヴァンジェリンが吸血鬼だという事は八霧響も気付いている。だが彼女の目的は判らない。
つまり。大方エヴァンジェリンの目的を知るために現れたのだろ

う。桜通りの吸血鬼。その噂が本当なのかどうかを。

目的を阻む事をしなければ追々出会った折に話すつもりではあったが、その必要もないだろう。青年と出会うきっかけが一つ失われただけである。

ならば、と。エヴァンジェリンも遊ぶことにした。当初の目的である宮崎のどかの血を吸う事はできなっかたが既に計画に必要な量は足りている。子供騙しの児戯。青年は当然として、英雄の倅にも多少の興味もあった。状況として悪役の立場である今。何をすべきか。

「お前は……ッ。何故ここに……」

まるで突然の来訪に取り乱すかの様に慌てた様子を見せる。次に出るは嘘の言葉、虚像の困惑、偽りの表情。それら全てがエヴァンジェリンの真意ではなく裏の顔では絶えず笑いが込み上げてくる。

それは描写も甚だしい一幕。英雄の倅は充分に思考を落ち着かせる事が出来ず顔を青くさせ、青年に変わった表情は無い。予想はしていたが何とも判りやすい反応であると吸血鬼は思う。

英雄の倅は見れば判るほどに混乱し青年にさえも敵意を見せている。生徒だと思っていた少女が事件の犯人であり悪の魔法使いでありクラスメイトを襲っていた。倅の今まで築いていたモノが、信じていたモノ真実なのか倅でさえも判らなくなっていったのだろう。徐々に声色を強くし始めた倅を中心に風が生まれつつある。倅はそれに気付かず尚も青年に言葉を吐きかける。表情は苦悶に満ちてい

た。

身長よりも大きな杖が倅に抱かれ、その内で震えている。善と悪の境界が曖昧な倅が唯一縋れる物。知らぬ土地で過ごしていくには足りない物が、今ここで隠されていた物が片鱗として現れてきている事に気付かずに。――――強く、強く、強く。見せ始めている事に。

三者の内、動き始めたのは件(くだん)の主、吸血鬼。
懐から持ち出される試験管には具現化される奇跡の材料。この場に留まる理由も、興味も無くし、有るのは青年に関する情報のみ。
――――倅？　論外である。

「ハハッ。さすがは奴の子供と言ったところか。凄まじい魔力だ……だが、ここは退き上がらせてもらう」

倅が言葉を返すよりも素早く魔法は発動した。
瞬く間に起きる小爆発。近くに居る者を氷結させ武装を解除する魔法。倅は宮崎のどかを庇い、青年はただ立ち尽くし。
それらを視界の隅で確認し吸血鬼は飛んだ。黒衣を翼に見立て飛ぶ姿は満月に浮かぶ影法師の如く。
月の光が金髪に良く映える。吸血鬼は自然と微笑した。久方ぶりの自由な飛行は縛られる以前の己を思い出してくれるから。

「――――ハハッ。そうだ、そうだよなぁ。まだお前の都合は終わってないもんなぁ」

そして、微笑を浮かべた理由がもう一つ。

———八霧響。

吸血鬼を空を翔る黒鳥と例えるならば、青年は地を駆ける黒豹か。自然に溶け込む様に空気と同調し、その脚は逸脱した速さを見せる。大方、その速さは精霊が力を加えている事でもあるが、大半は青年の力による速さだろう———と、吸血鬼は考える。長年麻帆良の魔法使いからその身を隠し続けたのなら容易くできる行い。彼の力はまだ、こんなものでは無い事を物語っている。自身の金髪が頬を擽った。

麻帆良の街並みを翔け抜けながら上下左右縦横無尽。どれくらい時間が経ったのかは判らない。だがその間、八霧響はその前髪の隙間から決して瞳は離さず逃そうとはしない。距離は着かず離れず。エヴァンジェリンと八霧響の関係の距離を表しているようにも見えた。

そして。エヴァンジェリンはちょうど良い屋根上へと降り立った。口元は弧を描き八霧響を迎えている。家で待っていた筈の茶々丸も何時の間にか三歩後ろで佇んでいた。

「……何故？」

一拍置いてからの八霧響の言葉。それが何に対してなのか判っているからこそエヴァンジェリンは満足そうに喉を鳴らす。付き合っても利益は無いだろうに少なからず気にかけてくれるのは擽られた様で気恥かしい。

「お前なら訊かなくても判るだろう？　八霧……響」

「……マクダウェル。それに、絡繰か」

ちらりと後ろを見ると綺麗な会釈を見せる茶々丸。従者の行いは八霧響の視線を誘った。

抑揚の感じさせない声調。己の感情を露わにしないその言葉の羅列は吸血鬼に向けられている。

「……邪魔だったか？　俺が居た事は」

「何を今更。どちらとしても結果は変わらん。何、ちょっとした余興が増えるだけだ」

エヴァンジェリンにしてみれば八霧響に出会う事自体がそもそもイレギュラーな事態。彼女からすれば彼とはもっと深く語り合いたいが今は計画がそれを阻んでいる。計画は十全にして万全。失敗は許されず、しかし失敗するとは考えられなかった。そんな余裕の考えが浮かぶくらいには慎重に進めているからだ。

何より彼女自身の時間は無限であり八霧響も真意は測れずとも麻帆良を出る予定があるとは思えない。語り合うのは後でもいいだろ

う、そんな楽観した心境だった。
———余興。観客。八霧響。そうだ、彼には一級の特等席に招待してもいいかもな。

「少し、消極的だと……。気にする事でもなかったか」
八霧響を注視していたせいか、彼の声色に若干の変化を読み取れた。これは、何かを窺う……心配、気にかけているのか？
「何だ、安心（しんぱい）したのか？」
「……判る事を言わせるのか」
「ククッ。それもそうか。そうだな。そうだよな」

八霧響の隠された感情。短い言葉だが僅かながらにエヴァンジェリンを思いやる気持ちが含まれている事を掴めた。を互いに同じ道を歩んだ者同士。通ずるモノがあるという事か。シンパシー。
自然と笑みが零れ落ちる。夜だというのに涼しくなる筈の身体が妙に熱い。
長年共感できる者がいなかったせいか、エヴァンジェリンは現れた青年に少なからずの好意を持ち始めていた。六百年近く生きていた高位の幻想種。戦争を終わらせた英雄に極東の地にてその力を封印されながらもその立ち姿、雰囲気、矜持は尊大で風格あるモノで今まで変わる事は無かった。
それが、今この時は、

「ん？　どうした。何か気になるのか？」

「いや……少し、自分が情けないと思っただけだ」

まるで恋する乙女の様に――――訂正、恋だと気付かず純粋な好意で相手の機微を見抜いてしまう身体年齢相応の少女の様に、エヴァンジェリンは八霧響の感情の揺らぎに短い付き合いながらもまたもや見抜いた。だがそれはエヴァンジェリンの長年の経験から由来したものでもある。彼女の観察眼は決して偽りではなく、初見以外ならば間違いはほぼ皆無と言ってもいい。魔法使いとして、吸血鬼として、悪として視間違いはあってはならない。それが自身を脅かす事柄に為りうるかもしれないのだから。

だから、前述の通り決して全てが少女然とした勘から感じた訳ではない。

「……エヴァンジェリン」

青年の嘆息が場を占める。気付かれた事を悔む様に。彼女を呼ぶ声が弱々しかったのは決して気のせいではない。

八霧響が背を向ける。それがまた青年にとっての解散の合図となった。

遥か後方から近づいてくる膨大な魔力。先程の相対から察するに追いかけて来ない訳が無い。元より、追いかけてくるように餌を撒いたのだから来てもらわなければ困る。自身の力を見せつけてからの宣戦布告。兎狩りは愉しい方が良い。狩人たるエヴァンジェリンの笑みは崩れない。

そして察した。八霧響は自身と同じく英雄の倅、ネギ・スプリン

グフィールドとも何かあるのではないか、と。それが何かとは判らない――――、

（判らない。まただ。私はお前に対して何も判っては居ない――――）

会ってからまだ数日。逢ってまだ二度目。エヴァンジェリンは八霧響を何も判っては居ない。

識らなかったのだから、そんなものはエヴァンジェリンにとっては言い訳に過ぎない。この小さな体躯に宿る極上の経験は何よりも彼女を強くさせ、吸血鬼を腐らせた。吸血鬼ならそんな瑣末な問題は気にしない。エヴァンジェリンには力がある。ただそれだけで解決できない問題は力で薙ぎ払い捩じ伏せてきた。問題をあげるならば――――エヴァンジェリンは人間から吸血鬼と為った事か。

人間は考える。考えるからこそ歩みを止め、停滞する。そして間違いなく歩み続ける。歩みは遅く一歩ずつ一歩ずつ。

どこかの、とある学者は言った――――強い人が勝つとは限らない。すばしこい人が勝つとも限らない。「私はできる」と考えている人が結局は勝つのだ。

考える事ができるからこそ人間は成功し進化する。力のみ誇示する愚者は直ぐに時代の隅に溺れていく。知識無くして強者とは為り得ない。つまり考えなければいけないがその分歩みは遅くなる、と言う事だ。確かに利になり益になり得になる情報はあった方が良い。だが力があるならば、知識を補えるだけの力があるならば必要はないのでは無いだろうか――――？

（そんな訳がない。それは私自身が証明している筈だ。今までの、一時代を生き抜くにはどうしても知識は必要なの、と）

エヴァンジェリンは吸血鬼として何度も死んだ事はあった。それこそ力を誇示していた青臭い時に。

何度も人間を討ちながらも、幾度も討たれた。それは彼ら人間が知識で抵抗し続けた結果だから。この身に受けた傷は癒えても受けた傷は憶えている。その受けた傷の分だけ彼女は思い知らされ、識る事となった———苦い記憶だ。

だからエヴァンジェリンが八霧響を知らないのは仕方がない事である。それを悔む事は無く、これから識っていけば良い話。まだ付き合いは短くともこれから長くなっていく可能性だってあるのだから。

背を向けた八霧響に向けて視線を僅かに反らしながら鼻で笑う。

「……そうか。私もあの坊やには用があるのだがな。まあ、今回は……いいだろう。少しは楽しみにしていたのだがな」

「……いいから、もう今日はいいだろう。先に帰ってくれないか」

八霧響は既に拒絶の意を示している。もう、彼からの歩みは無かった。

「ではな、ヒビキ。今度は腰でも据えてゆっくり語り合おうではないか」

「……さようなら八霧響様」

「ああ、……楽しみにしている」

それが今回の邂逅の最後の言葉。

数秒、視線は宙を泳ぎ口は上手く閉じない。八霧響はただ石造の様に佇むだけ。その背中は近いようで遠い。歩み寄れそうで歩め寄れない。遠い。只管に感じた。

気付けたのは幸いか、何時の間にか青年へと伸ばす細い右腕。もちろんエヴァンジェリン自身のモノ。戻す腕は慌てる事無く、しかし薄らに赤味を帯びているのはご愛敬。その様子をじっくり従者に見られていた事に関しては黙殺を決め込む。

最後に、八霧響の姿を視界に見遣りこの場を後にする。自身は待ててもも英雄の倅は待っててはくれないのだから。

†††††††

春と言えど夜となればまだまだ冷える。だがそんな事は関係ない、と言った様に駆ける脚は動き止めず新鮮な空気を求めるために呼吸が荒くなる。おかげで身体は熱い。髪止めの鈴が熱した身体とは別に脳を冷やしてくれる。悪態をつける程に思考は冷えたが僅かな良心がそれを呑み込んだ。双眸は視界に入る全てのモノを捉え判断させる。そのため余計な動きは無く、軽やかに駆け抜ける。

先程の、桜通りにて起こった出来事の説明とその場を理解出来ぬ自分に押し付けた同居人を求め、神楽坂明日菜は視界に見遣ると同時に彼を呼ぶ。

「あっ……せ、先輩！？」

「……神楽坂、か」

いつぞや奇妙な落し物をした変わった、一応先輩に当たるであろう人物、八霧響。そんな彼が寮でも図書館島からの道でもないこの場に居る事に疑問を覚える。その疑問を口に出すよりも当面の目的を言ったのは彼女が直情的であるが故だろう。

「せ、……先輩。あの、こっちにネギ……子供が来ませんでした？探しているんですけど、眼鏡掛けて長い棒みたいな物を持ってる、子供を」

「……ふむ」

息を整え様と手の甲で口を拭う。この程度で汗が出る程、柔な身体では無い。

一言、小さな呟きを入れた青年を彼女はまじまじと眺める。神楽坂明日菜が感じる八霧響という人物。その両眼が隠れた前髪は不似合いだが、自身の保護者である高畑教諭とも後見人である学園長とも異なる年上としての雰囲気。確かに保護者と後見人と年齢が青年より年齢が一回りも二周りも違う。同じ環境で育った訳でもなく赤

の他人であり彼らが直接会った訳でもないのに比べてしまうなんて――と、神楽坂明日菜は不覚にも思う。
だが比べてしまうくらい彼らが似ている。その感覚は自分のモノなのに、自分のモノではない不可解で腑に落ちないこの感覚。胸中でそれを無理やり払拭した。

「……その子供ならここから先の屋根の上に居るぞ」
「屋根！？　ああもう、全くあいつったら迷惑ばかり掛けて！　先輩、ありがとうございます！」
捲し立てる様に礼を述べ、横切り再び身体にエンジンを掛ける――、
「ああ――――」
――――気をつけろ。

そのエンジンを冷ますかの様に、神楽坂明日菜の脚を止める程の威圧の籠もった声。一般人である神楽坂明日菜では振り切れない糸。拭い切れない縄。断ち切れない鎖。ただの声音がまるで実体を持ったかの様に神楽坂明日菜の身体を縛る。だがそれは決して攻撃性を持たぬモノ。ただ、自身の言葉を一方的に相手に告げる自分勝手なモノ。
だがそんなモノ神楽坂明日菜が理解出来る筈もなく。耳を傾ける事になったのは自然の事だと言える。慌てる事無く、それが出来たのは八霧響の言葉に攻撃性が含まれていなかったのもあるが、神楽坂明日菜自身が問題ない、と認識したからだろう。その選択を選んだ事さえ気付く事なく。

「……夜はまだ始まったばかりだ。危険は、眼の前にあるものばかりではない。……少し、噂にも耳を傾けてみろ」

故に、彼の言葉が浸透した。

「……少し、喋りが過ぎたな。戯言だったな。……行け」

思う事があっても彼自身が拒んでいる。勝手に止めて、勝手に言って、勝手に行け、と。それは他人が見ればとても傲慢で自分勝手。だけどもそれを疎ましくは思う事はなかった。その言葉が心配から来るモノだと認識――――何故？　胸中で彼女は思う。その答えを得るにはまだ先の話。

「……、あの……はい」

逡巡した後、走りだす。既に糸も縄も鎖も無かった。

「……キョウ」

『なんですか？』

「寒い、なぁ……」

『……。そうですね……』

八霧響は気付かない。判らない。理解していない。彼の相棒たる精霊が既に彼自身と深く繋がりを得ている事に。その根幹が、歯車が、精霊へと噛み合わさっていく事に。

街灯に映る吐息に八霧響は眼を奪われた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9815k/

ネギ勘！

2011年9月5日18時22分発行